

エキスペディション

I

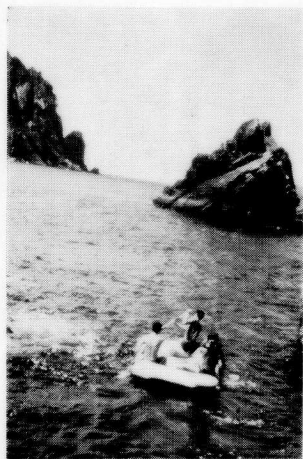
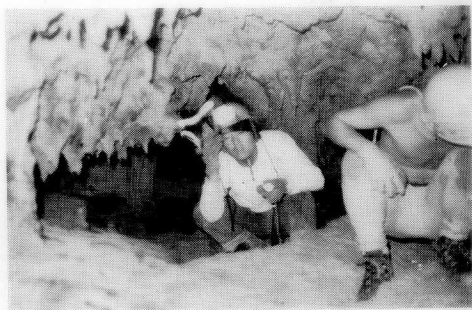
1958 — 1969

横浜市立大学探査部・探検部



北上川を下る一登米付近（北上川調査・1961年）





右上—ウナキベツのベースキャンプでブヨよけの
頭巾をかぶる（知床調査・1959年）

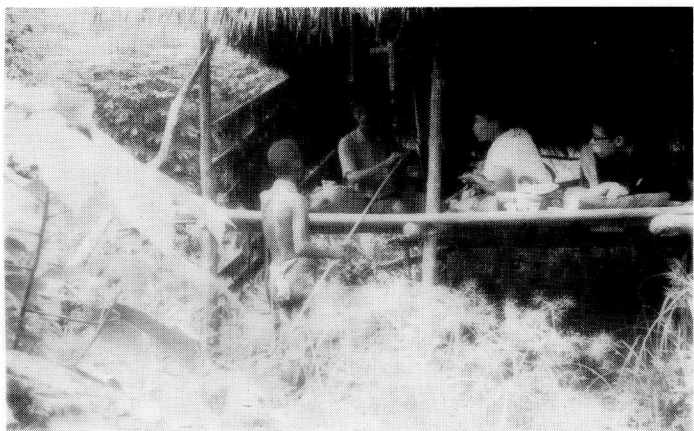
上左—扇原の原野の中のみどり沼

（大雪山調査・1962年）

下右—無人島での生活（男女群島調査・1965年）

下中—洞穴探検（沖永良部島調査・1968年）

下左—ゴムボートで渡る（宇治群島調査・1968年）



ネグリート族と生活する（第二次パラワン島調査・1966年）

まえがき

横浜市立大学に、探検活動のサークルとして探査会が発足して十一年になります。そのころは、ヒマラヤ登山、南極観測が始ったころであり、戦後の探検活動の開始期ともいえます。

生物教室の先生、卒業生、在校生が中心になって、野外活動の場をつくろうとしたのが発端となり、全学的なサークルとして探査会が生まれました。探査会が生れたもう一つの契機は、福島博先生が南極観測隊に参加されたことともいわれています。初期の探査会は、山岳部と合同の知床半島の学術調査で、夏期初縦走という記録をもつくり、表面的には、会の活動はもりあがっておりました。しかし海外調査企画のつまずきから活動がにぶり、時間的余裕のある学生が独立した行動をとるようになり、会の中に学生部というものが組織されました。学内の文化部連合会に加入し、先生や卒業生の指導のもとに学生中心の探検活動が始ったわけです。

当時は、全国的にも探検部というサークルは少なく、やることなすこと、目新しいものでした。その後、探査会学生部は、探検部と名前を変え現在に至っています。

私たちは、探検の目的と方法という命題に十一年間費いやしてきたように思います。うすよぐれた装備、調査用具にうもれた中で、世界地図、日本地図をながめて、「探検とは」と話し合い、未

知を求めて、汗水流がし、山河をさまよい「これぞ探査会精神、探検部精神」とはげまし合ったものでした。この十一年間、幾度となく活動がにぶったこともあり、そんな時に、新入部員が大量に入ってきて元気づいたものでした。私たちが悩み苦しみながらも、学生だけの手で、パラワン島、台湾、スルー諸島へ出かけ、探査をおこない得たのは、数知れぬ人達の援助のおかげであると思います。

そこで、この十一年間に残された記録を整理し、私たちの青春の記録と同時に、日本の大学探検部の資料にもなるようなものをまとめようということになりました。私たちの活動は、決してはなばなしいものではありませんが、精いっぱいこの活動でした。この小著を読了していただけたら幸いです。

一九六九年十二月一日

編 集 者 一 同

目次

まえがき

探査会・探検部略史

記 録

I 期

三宅島（一九五八年）・知床半島（一九五九年）

神津島（一九六〇年）・北上川（一九六一年）・大雪山（一九六二年）

。知床半島縦走記……………福島 博…三

。ゴムボートによる河下り……………森下 一郎…三

。渉外活動の反省・大雪学術調査隊……………木村 努…三

。間歇泉と無数の湖沼・扇ヶ原……………伊東 芦一…三

II 期

無人島（鵜渡根島・地内島一九六三年）・江川（一九六三年）

朝日連峰北部（一九六四年）・北海道雄武枝幸（一九六五年）

男女群島（二次一九六四年・二次一九六五年）

。ウトネ・江川の頃……………松橋 隆司……………四

。八久和川日記・朝日連峰北部調査隊……………奥田 耕造……………四

。オオムでの食事・北海道雄武、枝幸地方調査隊……………山口 由則……………五

。男女群島（第一次）……………松本 芳樹……………五

。第二次男女群島調査……………遠藤紘一郎……………六

。無人島での食事……………鈴木 宏尚……………三

III 期

パラワン島（一次一九六五年・二次一九六六年）

安家川（一九六六年）・台湾蘭嶼島（一九六七年）

新冠川流域（一九六七年）

。第一次パラワン島調査隊のこと……………菅田 弦……………六

。第二次パラワン調査隊出発前の状況……………井埜 邦明……………六

。パラワン島調査隊の装備……………出羽 寛……………六

。蘭嶼ヤミ族との十日間……………遠藤紘一郎……………三

IV 期
水渡洞窟を探検して……………大橋 正敏…二四

宝島（一九六七年）・宇治群島（一九六七年）

沖永良部島洞窟（一九六八年）・四国山村（一九六八年）

訓練合宿

。五月の尾瀬……………宮崎 捷二…二二

。乗鞍岳雪上合宿事故報告……………合田 濤…二六

探査会・探検部の歩み

。探査会創立・三宅・知床探査と天山計画……………丸山 晃…二五

。学生部にたいするひとつの意見……………伊東 芦一…二六

。部名変更当時について……………松本 芳樹…二六

。探査会・探検部運動史の検討……………峰岸 常之…二四

。探検部と私……………吉野 孝子…二五

探 検

。探 検 の 意 義……………	河合 武臣 ……一六
。マクマード基地で考えたこと……………	福島 博 ……一三
。大学 探 検 部……………	大野 正夫 ……一五
。自然保護と探査会……………	寺島 和光 ……一六
。構造主義的方法についての一考察……………	合田 濤 ……一七
名 簿……………	一八

編 集 メ モ

カット・題字 安藤 嵩

エキスペディション

I

1958 — 1969

探査会・探検部略史

昭和三年（一九五八）

二月 山の（未踏、未開発、未調査地域の）科学的研究及びそれに伴う技術を身につけることを目的として、横浜市立大学の教職員、在学生、卒業生からなる横浜市立大学探査会が発足す。

八月六日～十一日 伊豆、三宅島の新潟、大隅両池の陸水学的調査（団長・福井玉夫他）。

昭和四年（一九五九）

七月一日～三日 市大山岳部と合同で北海道知床半島の学術調査および羅臼より半島突端まで初踏査（団長・福島博、他探査会一五名、山岳部員一三名、医学部協力四名、大町山岳博物館員一名、同行記者、カメラマン各一名）。

八月 臨時総会を開き、会則を改正し、特に探査会の目的を「未知の地域の踏査及び科学的研究を行なう」とした。会の方針として海外探査が議題にのぼる。

昭和五年（一九六〇）

一月 八方尾根雪上訓練。

三月 奥日光雪上訓練および湯の湖、湖沼調査。

七月二日～八月二日 伊豆、神津島調査（生物、医学、気象。隊長・伊東芦一、他七

名)。

一月 訓練、探検活動を学生だけで独自に計画、実行するために探査会学生部が発足。

以後、訓練、国内探査は学生部が中心となる。

昭和三十六年(一九六一)

五月 西丹沢山岳訓練。

七月一六日～三〇日 北上川水系調査(生物、医学、地理。隊長・伊東芦一、他一二名)。

一〇月 学生部が横浜市立大学文化部連合会(文連)に加入し、学生サークルとして部室を与えられる。

一〇月 那須山系山岳訓練および鏡沼調査。

昭和三十七年(一九六二)

五月 尾瀬雪上訓練。

七月一二日～七月三一日 大雪山扇ヶ原周辺の調査(生物、地理)及び大雪山周辺の観光地の市場調査(隊長・寺島和光、他一七名)。

昭和三十八年(一九六三)

三月 苗場雪上訓練。

五月 北八ヶ岳山岳訓練。

七月一九日～七月三一日 伊豆七島、新島付近の無人島、鵜渡根(ウトネ)島及び地内島の踏査及び生物調査(隊長・木村努、他一二名)。

七月二〇日～七月三十一日 中国地方、江川水系調査（生物、水質、隊長・河合武臣、他七名）。

昭和三九年（一九六四）

三月 奥日光雪上訓練。

四月 探査会学生部を探検部と改名し、探査会（探検部員を含む）とは計画、実行を協同、あるいは協力しあうこととする。

以後の活動は、探検部として行なったものである。

五月 多摩川ボート下り訓練。

七月一六日～八月六日 第一次男女群島調査（島内踏査及び生物調査、隊長・松本芳樹、他一名）。

七月二六日～八月二日 朝日連峰北部調査（八久和川逆行踏査、未踏尾根踏査及び生物、地理調査。隊長・奥田耕造、他八名）。

一〇月 小俣京丸集落調査。

昭和四〇年（一九六五）

三月 吾妻雪上訓練。

五月 南アルプス山岳訓練。

七月～八月 第一次フィリッピン共和国、パラワン島調査（民俗、生物、地理、隊長・菅田弦、他四名）。

七月二〇日～八月一六日 第二次男女群島調査（島内踏査、生物、隊長・遠藤紘一郎、他八名）。

八月一〇日～八月二〇日 北海道雄武、枝幸地方調査（開拓農村の社会、民俗調査、水質、生物調査。隊長・山口由則、他四名）。

一〇月 丹沢山岳訓練。

昭和四一年（一九六六）

五月 奥多摩山岳訓練。

七月二一日～九月一一日 第二次フィリッピン共和国、パラワン島調査（民俗、生物、地理。隊長・合田濤、他四名）。

八月二五日～九月一日 神津島合宿（台湾蘭嶼島調査準備。隊長・遠藤紘一郎、他三名）

八月二日～一二日 安家川水系及び氷渡洞窟調査（安家川の水質、生物、安家の民俗、洞窟踏査。隊長・名和裕美、他七名）。

昭和四二年（一九六七）

二月二八日～四月一二日 中華民國（台湾）蘭嶼島調査（民俗、生物。遠藤紘一郎、他三名）。

五月 丹沢山岳訓練。

七月二三日～八月二四日 鹿児島県西方海上無人島、宇治群島調査（踏査、生物、地理、隊員の心理テスト。隊長・大下好憲、他八名）。

七月一日～八月一八日 トカラ列島、宝島調査（民俗。隊長・井埜邦明、他六名）。

八月一日～八月二三日 北海道、日高地方、新冠川流域調査（生物、社会。隊長・出羽寛、他五名）。

十一月 奥秩父山岳訓練。

三月 青木ヶ原縦走。後立山連峰山岳訓練。乗鞍岳山岳訓練。

昭和四三年（一九六八）

四月 北八ヶ岳山岳訓練

六月 青岩鐘乳洞洞窟訓練。

七月九日～九月一〇日 台湾猿学術調査（横浜市立大学マカック研究会協力。隊長・福田史夫、他四名）。

七月一日～八月五日 青ヶ島調査（生物、地質、社会。隊長・水尾寛己、他四名）。

七月三日～八月四日 沖永良部島洞窟調査（生物、地質。隊長・丸茂一文、他四名）。

七月二五日～八月一二日 四国山村調査（社会。隊長・藤山正二郎、他五名）。

一〇月 谷川岳山岳訓練。

十一月 青木ヶ原合宿。

三月 神津島合宿。

昭和四四年（一九六九）

四月 大無間・小無間合宿。

五月 青岩鐘乳洞窟訓練。

七月 ファリッピン共和国・スルー諸島學術調査（民族、生物、地質。隊長・合田濤、他三名）。

記 録

I 期

三宅島學術調査

一九五八年八月六日～八月十一日

伊豆七島唯一の湖沼である三宅島大路、新漣両池の物理化学的性質並びに下等生物に関する調査を行なった。

編 成

団 長	福井 玉夫	文理学部教授
副団長	福島 博	文理学部助教授
団 員	栗飯原 賢	理科三年
	一戸 正憲	東京都水道局
	川口 寛	理科三年
	岸本 公雄	理科三年
	高田 継男	港中学校

学術報告

- 中林 茂夫 文科三年
- 花野井忠司 理科三年
- 松本 利通 理科四年
- 丸山 晃 理科四年
- 宮崎 幸雄 理科四年
- 一、福島 博・三宅島大路池、新漣の湖沼調査について、横浜市立大学論叢、一三C(一)一九六一。
- 二、———・大路池と新漣の微化石分析、同上、一三(一)一九六一。
- 三、———・大路池と新漣の湖底藻群落、同上、一三(一)一九六一。
- 四、———・大路池の沿岸藻類群落、同上、一三(一)一九六一。

五、Kobayashi, T; Diatoms from Lake Taira and

Lake Shinmyo, 同上二三(一)一九六一。

六、丸山 晃・大路池および新沔のランソウ類、横浜
市立大学学生論集、第八号、一七三〜一九四、一九
六一。

七、——・新沔の沿岸ソウ類群落、同上、第八
号、一九五〜一九七、一九六一。

八、一戸正憲・大路池と新沔の緑藻類、同上、第八
号、一九八〜二〇六、一九六一。

九、高田継男・三宅島大路池と新沔の動物性プランク
トン、同上、第八号、二〇七〜二一〇、一九六一。

一〇、Kobayashi, T, Diatoms from Lake Toiro
and Shimmyo, Miyoko Island, Japan, 横浜市立
大学論叢、二〇(二)三〇〜四一、一九六九。

知床半島学術調査

一九五九年七月一九日〜七月三〇日

北海道知床半島の夏季初縦走(羅臼より半島突端ま
で)をなしとげ、同時に同半島における動植物の調
査、ポロモイ台地池沼の陸水学的調査、番屋を中心と
した同半島の人文地理学的調査を行なった。

編 成

隊長	福島 博	文学部助教、探査会
副隊長	大野 迪朗	白い小屋、山岳部OB
隊員	会沢 勝夫	理科二年、探査会
	阿川 良次	商学部一年、山岳部
	浅見 英紀	商学部一年、山岳部
	石下 裕子	文科四年、探査会
	一戸 正憲	東京都水道局、探査会
	伊藤 宏	商学部二年、山岳部
	伊吹 明郎	文科二年、山岳部
	入倉 基一	文科一年、山岳部
	大野 樫	白い小屋
	大野 正夫	理科一年、探査会
	加藤 賢三	理科二年、探査会
	河野 由夫	市大図書館、探査会
	小池 敦	商学部二年、山岳部
	児島 瑞夫	市大医学部助手、医学部山 岳部OB
	佐竹 慶介	医学部三年、医学部山岳部
	竹端 節次	文科三年、山岳部

寺島 和光 医進二年、探査会

中林 茂夫 文科三年、探査会

中村 英之 商学部一年、山岳部

藤沢 伸司 山岳部OB

蒔田徳太郎 理科二年、探査会

丸山 晃 市大研究生・探査会

宮崎 博文 商学四年、山岳部

森下 一郎 商学部二年、山岳部

山岡 貞夫 医進二年、探査会

山形 裕昭 市大医学部インターン、医

学部山岳部OB

山岸 俊彦 医学部三年、医学部山岳部

山田 勇 文科四年、山岳部

若林 稜子 文科三年、探査会

特別参加隊員

高橋 秀男 大町山岳博物館

本多 勝一 朝日新聞北海道支社

松下 昭 フジテレビ

学術報告

一、朝比奈泰彦・知床半島 の地衣、蘚苔地衣雜報、二

(五)、六一、六三、一九六一。

二、大野正夫知床半島のケイ藻類群落、横浜市立大学
学生論集、第九号、五〇、六六、一九六三。

三、Hiroshi Fukushima and Chieko Kishimoto,
Diatom from Shireoko Peninsula, Northeastern
Hokkaido, Japan. 横浜市立大学紀要、一八〇、C
一五八、一、三五、一九六八。

神津島調査

一九六〇年七月二日～八月一日

伊豆七島神津島において下等植物、昆虫、ネズミの
生態学的調査、気象についての調査、島民の罹病状況
についての調査、僻地教育の諸問題に関する調査を行
なった。

編 成

隊長 伊東 芦一 医学部二年

副隊長 大野 正夫 理科二年

隊員 大貫 紀男 文科一年

加藤 誠 理科二年

松岡 徳治 商学部二年

松橋 隆司 理科二年

横山 宣雄 理科二年

吉沢 勇 医学部二年

学術報告

一、伊東芦一、吉沢勇・神津島の島勢並びに罹病状況について、公衆衛生学実習報告（横浜市立大学公衆衛生学教室篇）P. 一九一～二二五、一九六〇。

二、大野正夫・神津島のケイ藻群落、横浜市立大学学生論集第八号、一五七～一七二、一九六一。

北上川水系調査

一九六一年七月一日～七月三十一日

北上川水系の水棲昆虫、付着藻類、水生菌類、魚類について、当時日本最大の硫黄の産出をほこっていた松尾鉱山の廃水との関連において調査し、また北上川流域の地形及び土地利用についての調査、流域各地で採取したサワカニについて肺吸虫メタセルカリアを検索した。同時に好摩より河口石巻までのゴムボートによる河下りに成功した。

編 成

隊長 伊東 芦一 医学部三年

副隊長 大野 正夫 理科三年

松橋 隆司 理科三年

隊員 一戸 正憲 東京都水道局

伊藤 新一 文科二年

大貫 紀男 文科二年

河合 武臣 理科一年

寺島 和光 医学部二年

丸山 晃 国立自然教育園

蒔田徳太郎 理科四年

宮崎 捷二 理科一年

森下 一郎 商学部四年

横山 宣雄 理科三年

学術報告

福島博、大野正夫、横山宣雄・北上川水系のケイ藻相と底棲動物相、横浜市立大学紀要C―五四、第一七三号・一～四九、一九六七。

大雪学術調査

一九六二年七月一日～八月一日

大雪山国立公園扇ヶ原の湖沼群について、湖盆形態、湖沼の物理化学的性質、プランクトン、付着藻類等を調査し、また扇ヶ原の高等植物、コケ類、地衣類、昆虫等の調査、未確認湖沼群の調査を行なった。一方、大雪山国立公園周辺の観光地につき観光市場調査を試みた。

編 成

隊長	寺島 和光	医学部三年
副隊長	大貫 紀男	文科三年
隊員	伊東 芳一	医学部四年
	松岡 徳治	商学部四年
	佐藤 俊雄	文科三年
	田辺 勵生	文科三年

鈴木 泰次	理科二年
宮崎 捷二	理科二年
木村 努	理科二年
河合 武臣	理科二年
矢島 孝昭	理科一年
白井 浩子	理科一年
三橋 孝子	理科一年
奥田 耕造	商学部一年
松本 芳樹	商学部一年
山口 山則	商学部一年
篠原 道雄	商学部一年

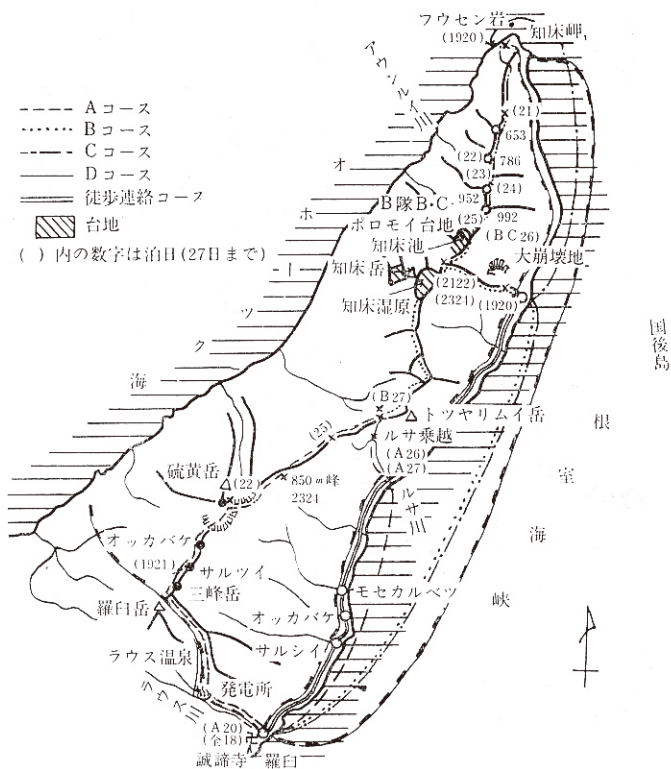
知床半島縦走記

福 島 博

知床半島の学術調査と縦走

横浜市立大学に探査会という会が昨年結成された。この会は未知の地域の自然や文化を調査しようという会で、今年は本学の山岳部と合同調査を行なうことになり知床半島が選ばれた。知床半島の植物は古く原忠平氏（昭和五年）や、館協操博士（昭和二九年）の報告があつてよく調査されていて、海岸線には千島に近い植物があつて森林帯には案外暖かい地方のものが点在し、山の奥に行くとまた千島と同じものがあるというようなことがわかっているが、海岸線以外は未調査部分がかなりあることと、コケ類、地衣類、菌類、藻類等の下等植物は殆ど手がつけられていないので特に下等植物の調査をしたい。動物では犬飼哲夫博士のオホーツク海岸の大型動物の調査が一番大きいもので、陸上の動物の調査はあまり進んでいないので、動物も出来るだけ採集しようという目的でこの調査隊が結成された。

隊のもう一つの大きい目的は半島の縦走であつた。冬の縦走は昭和二八年に京大山岳部が成功



し、また昭和三年には北大学芸学部の人が成功したとのであるが、夏の縦走は早大、日大、高千穂商大、庶路山岳会等で何回か試みられたが、いずれも成功していない。

隊員は七月一八日午後ベースハウスの羅臼の誠諦寺に勢揃いした。羅臼山岳会会長西井誠誘氏が住職としておられる寺である。総員三五名が四つの隊に分れた。一つは知床半島の先端より知床池畔にくるもの（C隊）と、一つはウナキベツ川を逆行し、知床池畔でC隊と合流し知床岳付近を通ってルサ乗越に達するもの（B隊）と、一つは羅臼から羅臼岳、硫黄山を経てルサ乗越に至るもの（A隊）で、他の一つは羅臼岳を通り岩尾別に出て台地上にある池沼を調査し、更に半島の先端より羅臼迄の根室海峡側の海岸線を調査採集するもの（D隊）であった、A、B、Cの縦走隊は以下記すように大変な苦勞をしながらいずれも縦走に成功した。

知床岬より知床池畔へ

チャーターした一五トンの海運丸は一九日朝六時半小雨の羅臼港を出発して中番屋でウナキベツ川を逆行する隊員十一名を下ろし、一〇時半頃文吉湾にC隊五名と私とカメラマン、記者の八名が下りた。羅臼港から中番屋迄ガスで半島の様子は殆どわからなかったが、知床岬に近づくにつれてガスが薄くなって半島の様子がわかるようになってきた。背陵山脈から緑の斜面が円やかに海岸にせまり、海岸には山の斜面にへばりつくように番屋が点々と並んでいる。想像していたより番屋

の数の多いのに驚いた。知床岬は海蝕面が隆起した段丘になっていて青々と草が生えている。海から見ると芝生のようにいともロマンチックに見える。船は大きく回って静かな湾に横づけになった。湾の奥には番屋が一軒廃屋のように静かに立っていた。海の色は全く青い、碧玉を溶かしたとはこのような場合に使う言葉だろう。海藻が海底の岩石上に緑に褐色に所せましと生え茂っている。

海岸の断崖に白い花卉のシコタンハコベのかれんな花が群って咲いていた。高橋隊員はもう目の色をかえて採集し始めた。台地の上はオニカサモチ、アザミ、ヨブスマソウ、ヤナギラン、オニシモツケ等が私達の背丈に達する位、すき間もない位茂って白に黄色にピンク色にとさまざまな色に咲き乱れていた。緑の芝生のようにいともロマンチックにみえた草原はにくらしい位にのびきった草原だったのだ。この草をかきわけて大きなキスリングを背負って今日のキャンプ地を求めて歩いた。

知床岬に近いアブラコ湾に湧水があったのでここをキャンプ地にきめたが、結局田河氏の番屋に全員泊らせてもらった。

七月一九日午後と二十日C隊員はていさつを兼ねて道の切り開きと物資のデポに行った。私は知床一帯を採集して歩いた。アブラコ湾付近の台地の一部にはガンコウランが緑のじゅうたんのよう

に生え茂り、所々にはシロワレモコウが五、六〇糎にひよろひよると伸び頂に白い花をつけ、ある

斜面にはエゾキスゲが沢山咲いていて夕日に映えた黄色い花、特に逆光で見た美しい姿は今も眼底にありありと思い出せる。チシマセンブリの紫の花も大変きれいで夢中で何枚もシャッターを切った位であった。台地上の礫地には一〇数種伸びて紫色がかった線香花火のような花をつけているチシマラッキョウがぺろぺろと疎生していた。こんな礫地の陰で風雪にいためつけられてあまりのびないのか一〇種位の丈の低いハマナスが情熱の花さながらの目に痛い位の赤紫色の美しい花をつけていた。ハマナスの花は随分方々で見たがこんな美しい色をみたのは始めてだ。ツリガネニンジン
の可憐な花、ハクサンチドリのかわいい花、オニシモツケの雄大な群落等々とあげていくときりがない。この辺一帯は高山植物の宝庫なのだ。さまざまな高山植物が海岸近くに咲き乱れているさまはさすがに北の国だ。

知床岬の台地の上で眺めると丸味をおびた楔状の石が海の中に浮んでいる。これが有名な風船岩だ。この辺は波が荒く小船は余程注意をしなければならぬそうだ。右の方に目を転ずると真新しい番屋が数軒のきを連ねている。これらの番屋には終戦迄、国後島や樺太で漁業に従事していた人が多いそうだ。さらに向こうには海岸に突っ立ったローソク岩がわずかに見え、海をへだてて国後島が横たわっている。中腹に雲をたなびかせたチャチャヌブリのすばらしい姿が私達の登山心をかきたてるが、今は登ることの出来ない外国の山なのだ。

台地を草を眺めているとほのぼのと心が暖まり時間の経つのさえ忘れてしまうが、知床岬の海岸

の眺めは天氣がこんなによいおだやかな日なのに何となくうら寂しい。どんより曇った日、雨の日、海のしけた日の眺めはどんなだろう。

ローソク岩から根室海峡側を約二軒、半島の元の方へ行くと海岸に赤っぽい岩が立っている。これが赤岩である。羅臼港からここ迄毎日一回定期船が通っている。ローソク岩からこの赤岩迄が知床で番屋が一番密集している所である。この付近の海にコンブが一番沢山生えているからだろう。船を浮べて海底を眺めると褐色の色の濃いものやら淡いのやら、真直なものからちぢんだもの等不気味な位一面にコンブが生えている。このコンブは目梨コンブと称して上等のコンブとして大阪方面に大量に送り出されているそうだ。

二〇日夕方C隊の隊員達は顔をほらしてほうほうのていで戻って来た。通路をきり開いている折あやまってハチの巣にふれたらしい。猛烈なハチの攻撃に会って全員逃げたがまにあわず、五人の中三人がさされてしまったという。

二一日の朝は飯ごうやコッフェルにできるだけ御飯を炊き、植物採集用の胴乱に逆水をつめこんだ。胴乱に水を入れて運んだのはこれが最初だろう。胴乱にそのまま水を入れることは出来ないのだ、生物採集用の大型ポリエチレンの袋を二重にして水を入れこれを胴乱に入れたのだ。水入りのポリエチレンの袋をついにはキスリングのサイドポケットにまで入れて一八リットル余の水を持っていたいよいよ縦走に出発した。

赤紫色に美しく咲いているヤナギランの群落、シコタンザサの群落を通って、トドマツ、イチイ、イタヤカエデ、ミズナラ、センノキ、ダケカンバ等が昼なお暗い迄に生い茂った林へ入った。この林にはツルアジサイ、ツタウルシ等の蔓植物が多く、下草としてはシラネウラボ、ハンゴウソウ、エゾウバユリ、ツバメオモト、マイズルソウ、オオバタケシマラン等がみられた。特にマイズルソウは内地でみるよりはるかに大きく雄大であった。

苦心して運び上げた水も三日目の二三日にはなくなってきたのでアウンルイ川をめあてに下ったら約四〇分位でこの川の源流をみつけることが出来た。そして再び約二〇リットルの水を背負って出発した。この水の補給が案外簡単に出来たことが、今回の縦走の成功に大きい役割を果しているはずである。

その後も水の不足と戦いながらハイマツその他の藪こぎを来る日も来る日も続けた。一番苦しかったのは水不足のようで全員が水の夢を見たそうで（A隊の場合も同じ）ある時はツユをコップで集めたこともあり、雨の折はビニールの布等で雨水を集めたし、またある折は雨だと喜んでテントを出てみたら、月がこうこうと照っていて、テントに落ちた枯葉の音を雨の音とまちがえたこともあったそうだ。

中番屋から知床池畔へ

観音岩と称する岩礁が海中に突っ立っている所をちょっと先端に行くときまい入江になった浜があった。四、五軒の番屋がひっそりと立っている。この入江の隅に流れているウナキベツ川を私達は逆行した。このウナキベツは終戦直後の頃広大な山崩れがあつて地形が一変したと羅臼村の人が教えてくれたが、なる程海岸迄屑石が押しよせており、この沢は屑石でゴロゴロしていて所々に大きな石が転っており、何カ所かせき止め池が出来、中には池の中に枯れた立木が何本も立っている池さえあつた。ヒグマ平と命名した付近には大崩壊地があつた。磐梯山を松原湖側から眺めた景観のように山の一侧が崩壊してしまつてゐるのだ。爆烈火口のようにも見えるが、素人の私にはどちらとも判断できないのが残念だ。

ウナキベツ川の川口付近には細いミヤマハンノキ林があつて右に左に何回か川を横切つて登る。川辺にはオオブキの群落が発達している。何時の間にかミヤマハンノキの林がなくなり、所々に生えているだけになる。なだらかな斜面と急な斜面が入り乱れた複雑な地形の斜面をあえがきながら約三時間登ると崩壊点を右上に眺める地点で川辺にちよつとした平らな、キャンプ地には屈強な地点がある、ここを横浜平となづけ中間テントを三張はった。

七月二〇日大野副隊長と山田リーダーが登高路の偵察に行き大崩壊地の右側を登つたが、これよ

りもウナベツ沢をつめる方が良いという結論に達した。

横浜平から先はしばらくの間谷は破壊された石ばかりからなりたっている。この石は貝殻状にわれたものでわれ口はナイフの刃のように尖っているので歩きづらいことはおびたらしい。このナイフの刃のような石の上を重い荷をボッカして何回も登り下りしたので新品の登山靴さえいたむ始末、満足な靴で山を下ったものがない状態であった。このような道を一時間位も登ると丸味を帯びた岩石の普通の川床に出る。凹凸のはげしい急な沢道をさらに右へ右へと登ってゆく。高度はどんどん増してゆく、最後の登りは実に大変である。ザイルを三本、二〇〇米にわたってフィックスした急な沢を登りつめると知床乗越だ。眼下に根室海峡が横たわりそのむこうに国後島が指呼の間に青々と浮んでいるのが見渡される。心地よい風がたえず吹きぬけている。横浜平の中間テントからここ迄ボッカすると七時間近くかかることがあった。この歩きづらい嫌な道を多い者は六回もボッカした者がいた。隊員達は不平一つ言わずよく働いたものだ。

知床乗越、ポロモイ台地間は数人の隊員が四日ばかりで切り開いた道をしばらく稜線をゆき、一息にポロモイ台地におりるのだ。この辺のハイマツは全くよくのびている。本州で私達がいつも見ているハイマツと同じ種類でありながら、よくもこんなに生長したものと驚かされる。直径が二〇糎、長さ七、八米から一〇米におよび、高さは三米に達すると考えられる位大きいものによく出会う。これを切り開いてなかったら大きい重い荷を背負っての歩行はさぞ大変だったろう。稜線のハ

イマツは丈がひくく大したことはないが稜線はずれた所にはこのような巨大なのがあり、このハイマツこぎには多大の時間とエネルギーを消耗させられる。早大山岳部員の記録にもハイマツこぎの苦しさをこまごまと記録してある。このハイマツ林こそが知床の縦走をはばんできた大きな要素となっていたのだ。

知床乗越から約一時間でポロモイ台地に達することが出来る。最近版の五万分の一の地図ではヒョウタン状の池（知床池）があることになっているのが実は大きい池が三コあって、いわゆる「神のたんぼ」状の小さい池は大きい池の東南隅に多数散在している。知床池の周縁にはミズゴケが生育していてミズゴケ湿原を形成し、この周囲にハイマツが侵入して来ている。湿原にはキレバハクサンボウフウや、チシマワレモコウ、エゾキスゲ、タチギボウシ、ハクサンチドリ、コバノイチヤクソウ、ニッコウシヤクナゲ、ツルコケモモなどが咲き乱れていた。静寂そのもので夕日の入る知床岳をバックに眺めた時の美しさは忘れることが出来ない。

今迄誰かここを訪れた人がいたら水の少ない知床のことだから池畔のどこかで炊事をしたりして焚火をしているに違いないと周囲を念入りにしらべたがそのような形跡はない。今迄誰一人としてこの神秘的な池畔におり立った者はいないらしい。この美しい景を眺めたのは我々が最初なのだと思うと今迄のあの苦労も一度にふっ飛んでしまった。

知床池にプランクトンネットを入れたらケンミジンコが沢山入ってきた。赤い色をしている。こ

の赤い色素はカロチノイドで太陽熱を吸収するのに役立っているらしい。

湿原中の小池にはミズゴケ湿原に多いツズミモ類をおびただしく見出すことが出来た。

七月二五日夕方、発音筒の音を耳にし煙を認めることが出来た。C隊はすぐ近くに來ているらしい。

翌二六日午前四時に数人の者がテルモスに暖かい紅茶を入れて昨日の煙の見えた方向に向かった。八時頃C隊の五人は元気で知床池畔についた。高橋隊員はウルシにかぶれて顔がはれかさかさになっている。シャツはボロボロだ。破れてない所の方が少ない位。如何に苦勞したかがこの姿を見ただけで想像することができた。一九日に知床岬に上陸してからボロモイ台地迄実に七日間かかっている。一日の歩行距離は平均二軒だ。如何にひどい藪こぎだったかがわかる。

知床池畔よりルサ乗越へ

C隊二名にB隊二名と記者を加えた五名がA隊の待つルサ乗越にむかって二七日未明に出発した。知床程度の夏山ではどの程度やれるかというテストケースとして、極端な軽装にした。テントは持たずツェルトと食糧と採集用具だけで平均約十軒で一日でルサ川上流迄道のない山道をつづる予定であった。

風が強くなり時々雨が降りガスが出るといふ悪い天気になって心配したが、予定通りルサ川上流

に達しそこでビバークした。

羅臼よりルサ乗越へ

一九日、A隊は羅臼川ぞいに羅臼岳へ向かった。このコースは羅臼岳迄は立派な道もありさらに硫黄山迄はふみあともある。残雪が豊富で所々にお花畑があり、羅臼岳、硫黄山の頂上には岩場もあって高山味を十分味わうことのできるゴールデンコースで、知床の山へ行ってきたという人は羅臼岳、あるいは硫黄山まで足をのびた人が多い。

この隊も荷物が大変多かったのでサシルイ岳付近にテント三張をおいてビニールの布をもって縦走したが、やはり水不足に大変なやまされて、ベースハウスを出てから十日目の二七日に目的地に達した。

このようにして縦走の三隊とも大した事故もなく成功し、いろんな山岳会が涙をのんで敗退した知床半島の夏期縦走という難業をなしとげることが出来た。そして生物標本を三千五百点持ち帰って各専門家に配分して今研究してもらっており、今年の春に結果が集まることになっている。

観光地としての知床

私達が知床へ行くのに一番恐れ心配したのは、カ、ブヨなどの害虫とヒグマであった。文献によ

ると先輩の多くが力に悩まされている。知床へ来てみるとなる程ものすごい力である。海岸には少ないが山へ入ると大変多い。ミソ汁を腕につけるとたちまち数匹がとび込む始末で、シャツの上からでも平気でさすのに驚いた。何もしないでいると顔はお岩さんのように忽ちふくれ上がつてしまう。私達は力の対策として防虫ズキンをつくり防虫剤としてぬり薬と液体BHCを持参した。露出部にぬり薬をぬり、シャツ等には液体BHCを噴霧器で吹きつけた。私達の防虫対策はいずれも役立ったが、どのいずれも十分といえない位力が多いのだ。誰かが知床からこの力を追放しない限り、観光地としては失格だといった位だ。

ヒグマは北海道の全体の三分の一が知床半島にいてもいわれているが知床のは大変おとなしいそうで、殆ど害はないといわれているが、各人が鈴や呼子や、豆腐屋のラッパをならし歩いたので、隊員でヒグマの姿を見た者はいない。

私の滞在中は定期船で赤岩において船の停泊のあいまに三〇分位の知床岬へ見物に行く客が毎日数人いた。その殆どが内地からの観光客であった。この定期船は朝六時に羅臼港を出るので前日に羅臼に来て泊っている必要がある。また定期船が羅臼にもどったら終バスが出てしまったあとなのでまた泊らねばならないというように知床岬は交通の面からは観光地としての資格を失っているように考えられるのに、毎日何人かは知床岬へ、また羅臼岳へと観光客が入っている。今後どんどん増えてくるのではないだろうか。そして今の荷物定期船がスマートな観光船に代って知床岬にバン

ガローが、はては安っぽい観光旅館が立ちならぶようになるかもしれない。

知床のよさは「景観の雄大さ」と「原始性」にあると思う。「景観の雄大さ」は船で味わうことが出来る。知床岬の眺めも雄大だが岩宇別から文吉湾あたり迄の岩壁の雄大さには全く圧倒させられてしまう。岩壁の凸凹が朝や夕方には斜の光でくっきり浮び、洞窟が黒々と不気味にならび、海鳥の糞が白くアクセントをつけており、五〇米も一〇〇米もの岩壁の上から滝が静かにおちている。この岩壁の上に緑のカーペットがおっかぶさっているのだ。このような雄大な景観を眺めたものは狭い島国日本にもこんな所が残っていたのかと驚いてしまうだろう。それ位今の日本では観光開発が着々と進んで、いや進みすぎているのだ。観光開発といえはやたらに道路をつけ、山にはロープウェイをつけ、センスのないバンガローを場所を考えずに建てるなど、景観をこわすことが観光開発と考えているのではないかと思われる位だ。なる程老人に喜ばれる観光開発もよいが、そこへ行けば原始そのものというような観光地があってもよいだろう。大自然の景観や動物や植物の自然の姿を見たい者は私達のように藪こぎをすればよいのだ。

知床はこのように開発はしないでそっとしておいてほしいものだ。日本には数少ない「原始の姿」の観光地として。景観は人の力でかえることは比較的容易だが、元の姿にかえすことは大変難かしい。

知床のもう一つのよさの「原始性」は船の上からも味わうことができるが、海岸を山を歩いてみ

てひしひしと味わうことができる。番屋の人々の人情も厚い。この原始性はきわめて簡単に破壊されてしまう。そして一度破壊されたら絶対にもとへはもどらないのだ。文化はこの原始性をどんどん破壊してゆく。原始性を保つのにむしろ保護をしなければならぬ位だ。

知床の山には道路もいらない、ヒュッテもない、バンガローなどもない。むしろヒュッテでも建てるのなら景観をこわさないような所に建ててほしい。

開発庁では日高、積丹、知床を特殊地帯に指定して知床は今年から三年計画で徹底的に調査することになっているそうだ。なるべくそっとしておいてほしいが決まったことは致し方ない。知床半島の基部だけにおいてほしいものだが。知床で一番有望なのは硫黄だ。以前に硫黄を採掘されたことがあるがたとえ有望な鉱床が発見されてもなるべく採掘しないでほしいものだ。館脇教授は「鉱物資源がなくなり、これが最後だという時に掘ったらいと思う。日本は資源が少ないのだから、掘ってはいけないというのではない」とおっしゃったが、私も全く同感である。採掘によって景観が害されるだけでなく鉱山排水が海に流れこむ。知床のように流域の短かい所では水産資源に大きい鉱害を及ぼすようになる可能性も大きい。

繰り返し記しておきたい。知床はこのままそっとしておきたい。いやこのままの姿を長く保存するための対策をねるべきであろう。

今度の調査を実行するに当って後援して下さった朝日新聞社北海道支社、また援助をして下さっ

た半井横浜市長をはじめ多くの方々に末文ながら御礼申し上げます。

——「僻地の旅」(修道社・一九六〇)——

ゴムボートによる河下り

森 下 一 郎

七月二十四日 九・〇〇好摩付近の北上川本流より盛岡をめざして出発。

盛岡着。

二八日 水沢より薄衣へ。

二五日 雨のため天候待ち。

薄衣着。

二六日 盛岡より花巻へ。

二九日 薄衣より登米へ。

花巻着。

登米着。

二七日 花巻より水沢へ。

三〇日 登米着より石巻へ。

水沢着。

石巻着。

ゴムボートを川下りに用いたのは、探査会にとってははじめてのことであり、準備期間も短かったために河川の状況、ゴムボートの性能に関する資料も少なく、予定していた予備訓練も行ない得ず調査に十分活用出来なかったことは残念である。そのような関係から北上川では、ゴムボート

の性能、河川調査における実用性の検討に主眼を置いて、大型ボート（住友電気工業株式会社提供、四人乗り）と小型（一人用）の二つを使用し、常時二人で河下りを試みた。その結果次のような結論を得た。

- (1) 浅瀬を下る際にボートが傾いたり、岩石によって破損したりするため、上流地域では浸水がはなはだしかった。
- (2) 流速の低い下流地域では、漕いだ場合に速度が遅く、下降到極端に時間を要した。
- (3) 四人用ボートでは、二名乗り組むのが限度で、調査用器材が多ければ、かなり活動が制約される。
- (4) 浸水と雨に対する対策を完全におこなえば、適当な水量と流速をもつ河川では安全かつ快適な航行が可能である。

渉外活動の反省・大雪学術調査隊

木村 努

渉外活動は大きく分けて次の四つに分けられる。①会社を対象とし物品援助を受ける。②行く準備行動として学内での援助を受ける。③先発的任務として、宿舎、食糧、交通を調べる。④報道関係、新聞、ラジオ、テレビなどに情報を提供する。

① 今回は対象とした会社はたくさんあった。援助を受けた品物は次の通りである。フィルム（富士フィルムKK）、ボート（住友電工KK）、ビニール製品（積水化学工業KK）、電池、懐中電灯（湯浅電池KK）、石油（日本石油KK）。このように物品援助はかなり多く受けた。これらの物品は我々の行動に大きな助けになった。反省会の時にこのような活動のため、多大の時間を費し物品を請うことは学生のとるべき道かと問題になった。渉外として行動した個人的意見を表明するなら、その為に費した時間は莫大な損失かも知れないが、私がこのような活動から得たものは大きい。普通に学生生活をおくったのでは経験出来ない。又学外に出ている為、個人の見解に従って決めねばならぬ事も度々あった。こういう経験をする事も探査会の目的の一つではないだろうか。そしてその経験が個人に止らず探査会に生かされた時、初めて成果が生れるのだ。単に物品を

得る事のみを目的とするなら働いて買う方が賢明であり健全である。

② 今回取り組みの遅れた原因は学内で認められるのが遅かったことにある。つまり一万円程の寄付を願ったため、寄付を学校が認めた時に我々の計画を後援する意志表明となった。現金を必要としなかったなら対外的に行動するから支援して頂きたいとそれだけで事務的処理を終わってしまい時間もかからない。今回の場合は我々の最初の計画の時から学校側の援助を期待していた。方針がそうであったのだから学内の後援が遅れた原因はやはり探査会内での遅れを主因とみなす。会に金を出す決定はどういう方式で決められるか、そこまで調べておく必要があった。もっとつきつめるなら部員の自覚の立ち遅れに原因がある。これ以上の反省は渉外の域を脱するのでやめよう。

③ 交通機関は遠いだけに問題であった。運賃を安くするため、船を利用するという目的の下に船会社に再々足を運んだが、時期が遅かったことを理由に断られ二人だけが船を利用出来た。それも度々の変更の末。会社、回船、航路の資料は常備しておく必要を感じた。宿舎交渉では商学班は独自に交渉した。

④ 報道関係では、朝日新聞、北海道新聞、北海タイムズ、毎日新聞、神奈川新聞、ラジオニュース等であった。我々がこれらマスコミをいかに利用すべきかは非常に難かしい問題を含んでいる。我々の計画、結果、その間の行動にニュースバリューがあると新聞社等報道関係が認めた時、その団体がとりあげるのは何の不満もない。また我々も認められたことを喜んでよい。そして結果

が出た時、それを公表する義務がある。これが報道面で我々の目指すところだろう。今回は身分不相応の売名的なものを感じたという部員もいる。しかし我々が今回の計画をした際、他団体（会社）の援助を受ける事を認め、実際に援助をうけたからには我々の行動を会社に伝える義務があるのだ。援助を受けたことはその会社の習慣礼儀をこちらでも受け入れたことを示しているから、心の中だけで感謝し努力するだけでは不足なのだ。その時から失敗は許されない。また、報道されたことは、ニュースバリューが有った証拠ではないだろうか。我々が今考えるべきことは、我々がどこまで主体になるかということだ。私個人としては今回の報道関係渉外は計画通り進んだと思っている。

——大雪学術調査隊一報般告（一九六三）——

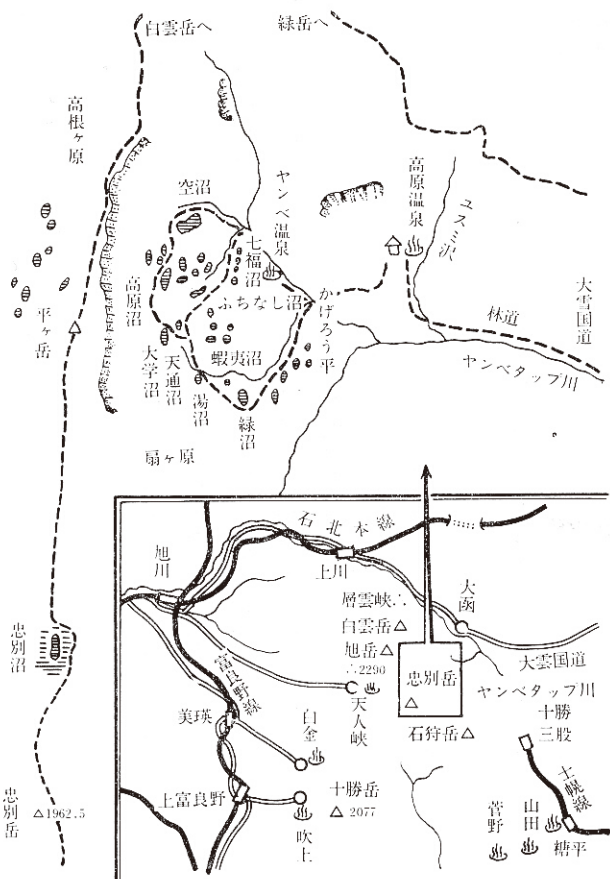
間歇泉と無数の湖沼・扇ヶ原

伊 東 芦 一

宝石のような沼の連続ノ

「これが空沼です……。」

案内の立岩さんの声にふと見ると、目の前がすっかりひらけて大きな沼が横たわっていた。



空沼。そうだあの沼だ。我々はもうよく知っている。航空写真のあそこに写っていた例の大きな沼だ。あのでっぱり、このへっこみ、みんなもうおなじみだ。調査計画をたてながら航空写真とにらめっこした数カ月のあいだに沼の形は我々の頭の中にすっかり焼きついてしまっている。しかし、この色彩の豊かさはどうだ。沼をとりかこむ木々の緑、空をうつす水の青、残雪の白、そして沼に続く緑の湿原には細く冷い流れに笑うリウキンカの目もさめるばかりの黄色。白と黒だけの航空写真からはとうてい想像もできなかった美しさではないか。

大雪山扇ヶ原。この地名をご記憶の方もあろうかと思う。ここは昨年夏、M紙に連載された「日本の秘境」にとりあげられた場所のひとつなのである。当時日本の山岳湖沼の陸水学的調査を主な目標においていた我々のグループ（横浜市立大学探査会）はこの記事に目をつけた。まだほとんど人の入ったこともない高原にちりばめられた未知の沼の数々。我々の調査目標として大いに魅力ある地域ではないか。そしてほぼ一年に近い煩雑な準備を終えて我々はいまここにはじめて目的の沼のひとつを眼前にしているのだ。

扇ヶ原というのは大雪山国立公園の北部白雲岳と忠別岳にはさまれた燦岩台地、高根ヶ原の東側の岩壁直下に横たわる、標高一五〇〇メートルの小さな高原である。ヤンベタツプ川上流とその支流忠別沢にはさまれ、ちょうど扇型をしていることからこう名づけられたという。上川からトラックにゆられて二時間で高原温泉、そこからさらに徒歩一時間半の登りでこの空沼のほとりに立つこ

とができる。扇ヶ原には主だった沼が七つ。水たまりのようなものも含めれば、おそらく百をこす沼がこの小さな高原に宝石のようにちりばめられている。

我々は七月下旬の二週間をこの美しい高原で過ごすこととなった。

九二度の青空温泉

トラックが林道の最後の急坂をたびたびのスリップにあえぎながら登りつめたところ、そこが我々の調査の根拠地となった高原温泉である。温泉特有の臭気が鼻につき、植物もろくにはえていない荒果てた地面のあちこちからは白い湯気がふき出している。直径一〇メートルほどの湯つぼがあつて底で灰色の液体がブツブツと音をたてて煮えたぎるさまはすさまじい。造材小屋がひと棟あり、ここに付近の山林で働らく人々のために温泉がひかれている。温度九二度、湧出量毎秒〇・三立方メートルの間歇温泉で層雪峽をはるかにしのぎ、硫化水素臭があるとはいえ無色透明で将来大いに有望であるという。

湯殿には澄んだ湯をたたえた木製の四角い湯舟がすえられて、そこに熱湯に近い温泉の湯と、沢からの手の切れるような水とが引いてある。自分の好みに応じてこのふたつを混ぜ合わせ、適当な温度にして、調査に疲れた体をトップリと湯舟に横たえる気分はなんともいえない。昼さがりの造材小屋はほとんどの人が働らきにでているので静寂そのもの。開け放した窓から青空を眺めている

と、すがすがしい小鳥のさえずりがとびこんできたりする。

ヤンベ温泉見ゆ

我々が入山したのはときおり強い雨がトラックの幌をはげしくたたかと思えば、しばらくすると太陽が顔を出すといった変な天候の日であった。高原温泉からキャンプ・サイトまで案内に立ってくれたのは立岩さん、例の造材小屋の持ち主である。

温泉からしばらくは大きな水芭蕉のしげったぬかるみの道で、ところどころ丸太が切って横たえてはあるものの足首までズブズブともぐってしまふようなところが多い。いよいよゆるい登りにさしかかるころから道の両側に大きな露があらわれる。葉の直径は一メートルに近く、荷上げのときなど雨に降られたりすると我々はよくこれを笠のかわりにかぶったものである。

丸木橋で水量の豊富なヤンベタツプ川をわたりヤンベ温泉とよばれるところに出ると、ここにもかわいらしい湯つばがいくつかあってボコボコ音をたてながら湯気をふき出している。それからしばらくはヤンベタツプ川にそった樹林帯の登りだが、たまたま大雨が降って川が増水したりすると道が完全に流れの下になってしまふようなところもある。七福沼への分岐を左手に見てなおしばらく登れば例の空沼に達し、はじめて視界がひらける。

沼、また沼のお花畑

この空沼から、立岩さんたちが昨年つけた切り開け（この多くは熊の通り路を利用したものだという。）が主な沼をめぐっている。かすかな路跡を、紺碧の空にはえる高根ヶ原の岸壁を右手に仰ぎつつたれば、雪溪あり、お花畑あり、小さな丘をこすと真青な水をたたえた大きな沼が不意にあらわれたりして快いおどろきをさそう。

高原沼、大学沼、天通沼、蝦夷沼を経て道はふた手に分かれる。左手の道をたどればふちなし沼、七福沼を経て空沼とヤンベ温泉の間の道へ出ることが出来る。右へ行けば湯の沼、緑の沼を経てヤンベタップ川をわたる丸木橋のすぐ近くへひょっこりとびだす。

どの沼もそれぞれ捨て難いあじわいをもっているが、何といっても最も忘れ難いのはそのほとりで我々が二週間近いキャンプ生活を送った大学沼であろう。かつてこの沼は藤見沼と呼ばれていたが、我々の調査を記念して地元の人々が大学沼と改称してくれたのである。扇ヶ原の平地はこの沼のほとり以外はほとんどが湿原なので、ここが唯一のキャンプ・サイトといえそうだ。

我々の四張のテントはこの沼の西側、ちようど黄色い花がまっさかりのウコンウツギの木々の間に張られた。テントの裏はタカネナナカマド、キバナシャクナゲ、エゾノツガザクラあるいはシナノキンバイ、ミヤマキンボウゲなどが美しく咲き乱れるお花畑を経て、高根ヶ原の岸壁に続いてい

る。岩壁の高さは一〇〇メートルもあろうか、いたるところに豊富な残雪を残し、朝夕に見せる色彩の変化はその迫力とあいまってまことに見事であり、あきずに眺めたものだ。岩壁の右手、高原沼の上あたりには巨大な雪溪がかり、クレバスを避けつつこれをつめれば三〇分ほどで高根ヶ原に達することができる。

湿性のお花畑で美しく装われた沼といえば例の空沼を第一にあげなければなるまい。ここは最も面積が大きい（長径約二〇〇メートル）、最も浅い沼で、沼に注ぐ小川の源となる残雪が消えると沼の水もいつしかなくなってしまうのでこう呼ばれている。ダケカンバの純白の肌を水面にうつし、リウキンカやシナノキンバイの咲き乱れるお花畑を西岸にしたがえるさまは明るくはなやかで、さながら扇ヶ原の女王といったところだがみかけによらずその水はたいへん冷たく、調査のためにはばらく足でもつけていようものなら足首から下を喰いちぎられたような気がする。

しかし扇ヶ原の沼はこのようにはなやかなものばかりではない。中には周囲をすっかり木立にかこまれさびしく横たわるふちなし沼のような沼もある。また、モウセンゴケで敷きつめられた湿原にかこまれた沼もあれば、お湯の沼のようにイワナが群をなして泳ぎまわっている沼もある。

扇ヶ原の南の端にある緑の沼から東側にもまだいくつかの沼があるが、切り開けがгүйいずれもひどいクマザサのやぶをこいでゆかねばならない。

この沼のさらに東に我々がかげろう平と名づけた広い湿原がある。周囲をエゾマツ、トドマツの

うっそうたる原始林にかこまれ、はなやかな色彩こそないが、ここは扇ヶ原の「ぬし」立岩さんさえ知らない場所で本当に奥深い神秘的な印象を与える。

恐いヒグマの宝庫

扇ヶ原の動物のことを書くとなれば、どうしてもまずヒグマに登場してもらわねばなるまい。我々がここを調査の対象として選んだときからヒグマ対策は最大の問題であった。我々はヒグマに対するささやかな武器を持っていた。各々が首から下げた小さなホイッスルである。調査中にはいたるところで大きなヒグマの糞にお目にかかったし、ミヤマバイケイを食いあらしたあとなどもあった。ときには強烈な獣の臭気をかいだこともある。そんなとき我々は必死になってホイッスルを吹きならしたが、ヒグマの方はききと意外に近いところで我々の様子をじっとうかがっていたのだろうと思う。ある日二名の隊員が熊にいくわし、よほど恐ろしかったとみえて例の急な雪溪をピッケルもなしに逃げ下って来た。

ヤンベタップ川でも忠別沢でもイワナはよく釣れるらしい。造材小屋の台所へ行くといつでもイワナがごっそりぶら下がっているのが見られる。お湯ノ沼で群をなして泳ぐイワナを見たときには塩焼きのことがすぐ頭にうかんだけれども、我々は標本とするための三匹以上は決して釣り上げなかった。動物であれ植物であれ科学的な調査に必要なもの以外は絶対にとらない。

大学沼のそばの岩場にはナキウサギが住んでいるし、樹林帯ではときおりエゾリスやシマリスの姿を目にする。

すべては太古のまま

地元の人々はいまこの扇ヶ原を一大観光地として開発しようとする熱意をもちしている。我々がここを去る直前に町役場の人々によって要所要所に道標がたてられた。しかし我々がここで生活した二週間というもの、いわゆるハイカーとか登山者とかいうものには一度も出会わなかった。扇ヶ原はヒグマとカモシカの天国の「秘境」であった。

我々の隊長は熱烈なナチュラリストである。次はかれの手記の一部。

「以前見立沼と呼ばれていた沼のほとりに『高原沼』という真新しい立札がたった。たった一枚の立札だがいかに甚大な影響をこの自然の景観に与えることか！昨日まで山道以外には全く人工的な産物は見られず、すべては太古のままの姿をとどめてここにあったというのに。この一枚の立札はこのすばらしい自然に対し何と不釣り合で俗っぽいことか！」

おそらくこの一節は全隊員の心を率直にあらわしている。それほど扇ヶ原の自然は清らかであったのだ。

Ⅱ 期

鵜渡根、地内無人島調査

一九六三年七月二日～七月三十一日

伊豆七島新島北方に存在する鵜渡根、地内無人島において鳥類、昆虫、ネズミ等陸棲動物に関する調査、高等、下等植物の採集を行ない、島内を踏査してその利用価値について検討した。

編 成

隊長 木村 努 理科三年

鵜渡根班

副隊長 松橋 隆司 理科三年

隊員 木村 努 理科三年

寺島 和光 医学部四年

奥田 耕造 商学部二年

森谷 常生 理科二年

高橋 敬 理科一年

地内班

副隊長 宮崎 捷二 理科三年

隊員 三橋 孝子 理科二年

日野 絢子 理科二年

菅田 弦 理科一年

高松 康夫 理科一年

伊東 芦一 小田原市立病院インターン

大野 正夫 東大大学院

江川調査

一九六三年七月二日～七月三十一日

中国地方随一の長流である江川をゴムボートで下りながら、河川の物理化学的調査、並びに菌類、藻類、水棲昆虫、魚類についての調査、陸上植物、昆虫の採集を行なった。

編 成

隊長 河合 武臣 理科三年
副隊長 松本 芳樹 商学部二年
隊員 山口 由則 商学部二年

中田洋一郎 理科二年
齊藤 惇 医進二年
荒田 英男 理科三年
鈴木 泰次 理科三年
島村 健二 理科二年

第一次男女群島調査

一九六四年七月一〇日～八月六日

五島列島の南々西七四Km、五つの小島（うち四つは、無人島）よりなる男女群島を踏査し、陸棲動物（脊椎動物の分類と生態、昆虫の分類）、植物（高等植物の分類、生態、下等植物——地衣類、藻類の分類）、海産動物に関する調査を行なった。

編成

隊長 松本 芳樹 商学部三年
副隊長 森谷 常生 理科三年
男島隊員

女島隊員

山口 山則 商学部三年
島村 健二 理科三年
遠藤紘一郎 商学部一年
鈴木 宏尚 文科一年
合田 濤 商学部一年
宮崎 捷二 理科四年
篠原 道雄 商学部三年
大江 達彦 理科一年
名和 裕美 理科一年
大隅登志夫 文科一年

朝日連峰北部調査

一九六四年七月一七日～七月二十七日

磐梯朝日国立公園朝日連峰の八久和川、湯屋俣川、及びその兩岸の尾根について生物相の調査を行なった。また朝日連峰北部地域部落の人文地理学的調査を行なった。

編成

隊長 奥田 耕造 商学部三年

副隊長 菅田 弦 文科二年
隊員 三橋 孝子 理科三年

齊藤 惇 医学部一年

高松 康夫 文科二年

出羽 寛 理科一年

小林 恵二 理科一年

折井 亮夫 理科一年

峰岸 常之 理科一年

第二次男女群島調査

一九六五年七月二日～八月一六日

第一次調査を基礎とし、特に鳥類の分布、オオミズナギドリの生態調査に力を入れた。あわせて海産動物の採集、陸上植物相の調査も行なった。

編 成

隊長 遠藤紘一郎 商学部二年

副隊長 大江 達彦 理科二年

隊員 安藤 嵩 商学部一年

大下 好憲 商学部一年

柿沢 亮三 理科二年

弘光 尚敬 理科二年
村松 正敏 理科二年
山崎 信也 理科二年

学術報告

第二回男女群島調査報告、横浜市立大学探検部、P. 一～五二、一九六二。

北海道雄武、枝幸地方調査

一九六五年八月一〇日～八月二〇日

北海道北見地方の雄武町、枝幸町に定着し開拓の歴史、経済構造、階層構成等に関する調査、民族調査を行なった。同時に幌内川の水質調査、野ネズミの採集を行なった。

編 成

隊長 山口 由則 商学部四年

副隊長 大隅登志夫 文科二年

隊員 名和 裕美 理科二年

出羽 寛 理科二年

津幡 光哉 商学部一年

井埜 邦明 文科一年

ウトネ、江川の頃

松橋隆司

昭和三八年（一九六三）の夏の探査は、ウトネ島、江川と部として初めて二隊を編成、ウトネは神津島の経験を、他方は北上川の総合調査を土台として計画が進められました。私はウトネ島の副隊長でしたので、その時の隊長の木村君にかわってその当時の様子を述べることにいたします。

卒業生と職員を含む探査会から独立して学生部ができ、学生が主体になって活動を始めたのは神津島の調査からです。その当時は学生のクラブ活動として探検をとりあげていたのは京都大学だけで、競争相手がいないからなにをやってもオリジナルでありえたわけです。そういう点では、やることなすこと全く新しい経験であったので苦勞も多かったわりには幸せな時代でした。北上川で原流から河口まで日本第三の長流を踏破することは、今迄の調査形態になかったことでしょうし、ゴムボートで下るといふことも日本で始めての記録だったと思います。

また大雪山、扇ヶ原は学生部の主要な活動方針とされていた高山湖の連続調査を中心にすえて、計画が実行に移されていったわけですが、この高山湖の調査は他の大学にはない調査目標でした。

私達は、ウトネ島をねらう以前にそういう経験をもっていました。しかしこのころになると各大学にも探検部が増え、どこをねらってなにをするかということ、私達の活動がオリジナルであるかどうか一番問題になってきました。他方三六年頃、同志社大がヒマラヤ、明大、慶大のマッキンリー、京大探検部はトンガへとというふうに海外遠征がブームになってくる、そういうときでした。私達の特殊性といってもなにか大変小さいような気がするのは当時仕方がないことですが、しかし出来る限りオリジナルなものと考えて、伊豆七島の無人島を選びました。

水のない無人島でどう生活するかということが、神津島の経験とは違った新しい経験でした。またその当時の各大学探検部は沖繩の諸島に目をむけていたのですが、無人島の調査はまだやられておりませんでした。

これが、「ウトネ、地内調査隊」の基本的な特徴です。従って新しい経験は船の便がないこと、細かくいえば、船がつけるかどうか、その船をどう調達するか、つまり足をどう確保するかという問題、水をどのくらいあげたらいいかという問題、テントがはれるような適当な場所があるかどうかということ等でした。

そういうふうに新しい経験を付け加えることができて、それは男女群島の調査へと結びついていくのですけれども、新しい探検技術の開発とまではいきませんでした。水のないところで生活するのだから、例えば海水を飲料水にする新しい器具を考えだしたというわけではありませんでした。

せいぜい海水で米をといでいたくらいのもです。

ちょっと塩気があってなかなかいい味でした。この点についてコーサ号で、海水に米を一晩つけておくと米が水を吸って水があまりいらなかったという報告をしておりますけれども、私達はそこまでさえも研究しませんでした。

一方、調査のほうでは、ミズナギ鳥の大棲息地があると報告しましたら、朝日新聞社はこれを発見と報道しました。すでに専門家の間では知られているのではないかと思われ、発見であるかどうかちょっと怪しい。そして報告らしい報告活動は、私が市大新聞に紀行文を書いたくらいで、調査報告についてはなにも明らかにされませんでした。従って、この調査活動の活動と欠陥が明らかにされていないまま、翌年学生部は探検部と名を変えてゆきました。これは一つの大きな問題だったと思います。

それから、ウトネの話からありますが、高山湖の調査を、これから全くやなくなる傾向について述べます。高山湖の調査は学生部の基本方針として採用されました。これは部員の専門が広がってくると、その立場をいかして活動することが大切だから「湖沼グループ」というようなものをいくつかつくろうという方針でしたが、学生部から探検部への移行のときに奥日光でその技術訓練をしたのが最後になりました。今は、わが探検部の活動が他の大学探検部と区別されるべき特長がな

んなのか、明らかにされていませんがこの点も現役の学生は深く考えてもらいたい点です。

——一〇周年記念シンポジウム原稿（一九六七）——

八久和川日記・朝日連峰北部調査隊

奥 田 耕 造

一九六四年七月一七日 曇後雨

鶴岡駅に下りた時には雲量多かったが、それでも我々は太陽を見る事が出来た。それが発電所に着くころから悪くなりだしたようである。しかしそんな空模様がこれからの我々を象徴していいようとは私はもちろんだれも考えてはいなかったであろう。それは目的の場所にやっと近づいた興奮のせいだったからかも知れない。ジープで一時間ほど走った所に八久和ダムがある。そのダムを見下ろす小高い所にある神社に着くころからとうとう雨が降りはじめた。条件はまた悪くなったようだった。というのは、ここ数日間の豪雨でダムは満水をはるかに越え、取水口に入って来る水量からみて八久和川も三倍の水量はありと所長が言っていたのを思い出したからである。その所長の言葉が、低く小さきぎみに伝わって来る発電機の唸と共に私の耳にまたよみがえって来た。あわただしい夕食の後皆でラジオの回りに輪になって今後の天気を聞いてみた。また大雨注意報が出た事を伝え

ていた。どこからか吹き入んで来る風がまんなかに置いてあるローソクの燭をゆらした。七つの大きな影が高い神社の天井の上を大きくうごめいた。だれも口をきく者は居なかった。屋根を打つ雨の音と、雨だれの音がばかに良く聞こえるようだった。

七月一八日 雨

明け方になっても雨は降っていた。強くなったり、弱くなったりはしたが、一度もやまなかったらしい。時々小降になったので、偵察かたがたちちょっと出かけて採集にはげむ。まわりの山はガスにかくれて、家も見当らない風景はさびしいかぎりであった。

七月一九日 雨

このままここに居ても食糧が減るばかりだし、今後の行動にもさしさわるので行ける所まで行ってみることにする。

雨の中を中尾根隊の三人は登って行った。三人を下ろすと流木と泥水の中を発動機船はさらに奥に進んで、きのう下ろしてもらった所で四人は下りる。さして大くない船なのでデッキカイ荷物を背負ってデッキを歩くとゆれる。おまけに岸もズルズルしているのであやうくすべりそうになりながら上陸した。

それから先はかすかに残る路らしい所をカマで切り開きながら進んだ。確認出来る位の沢に出ると、中田、峰岸はすぐ水棲昆虫、水質の調査にかかった。まったく雨の中だと何をやるのもおっく

うになる。昼少し過ぎとうとう路らしいものを見失ない、大分ぬれたりしたので、仕方なく少し太めの路が下りに向い始める峠状の所をナタを使って切り広げ、そこにテントをはる。夕方ようやくぬれたものを着替える事が出来てほっとすると、疲労が体中に広がりだした。このぶんでは、中尾根隊もさぞ大変だろうと案じられた。

七月二〇日 曇時々晴

疲れが出たのか起きるのが遅かった。明け方テントをうつ雨の音から起きても出発出来ないだろうと思ったからでもある。ところが七時過ぎるテントの中に光がさして来た。久しぶりに見る太陽だった。また何くそというファイトがわき上って来た。はるか下の木の間からちよっぴり見える八久和川の水色はきのうとはまるで違っていた。地図からも解る通り廊下状の川だから、水のひくのも早いのだろう。今まではんの少ししか見えていなかった岩がぐんぐんとせり上って来るのが分かった。その川の曲り角がどうも渡れそうに見えた。しめったキスリングを背に、何度もすべりながら下った。きのう小さな沢の前で杜絶えていた路は崖崩れで分らなかったのである。その向こうにはまた路が通じていた。道は一たん川に下りていた。今の水面よりもずっと上に有る草が川下に向かつてなでつけられていた。水はものすごい速さで流れていた。まだ少し濁っていたが、大分青さを増していた。水深は3m位有りそうだった。ここで渡渉出来ない以上、我々の進路は左岸に付いている路らしいものを出来るだけだとして、川が大きく進路を変えている地点に落ち入んでいる大き

な沢に行き当たる前に右岸に取り付くようなルートを取らざるを得なくなった。所々に有る大きな沢は極力避けなければならぬ。路は川から近いと五〇mほどの斜面にそっていた。時々川からはなれると比較的楽だった。しかし行程は遅々として進まなかった。その日はきのうよりも良い所をキャンプ地とした。しかし雨が降れば、ことごとくても安心などしてられない所だった。

七月二一日 晴

幸にして雨は降らなかった。しかし、今まで我々のささえとなっていたかすかに残る路らしいものがちょっとした沢に行きあたった所で、プツツリと無くなってしまった。二手に分れて一時間ほどさがしてしまっただろうか。やはりだめであった。とうとう本当のヤブコギが始まった。そしてその直後に恰好の渡渉地点を見付けて無事渡る事が出来た。これであの大きな沢に出会わずにすむことになった訳だが、ヤブコギでひどく消耗した。がその割にはほんの少ししか進めなかった。カマは使った方が楽に進めるが、もどかしくなって使わずに進んだ。気が付くとザックの上に付けていたカマが見当らなかつた。どこかで引っかけたはずではなかったらよかった。その日は足を半分宙に出すようにしかはれない所にテントをはった。少し川に向かって傾いていたので、翌朝皆下の方にかたまっていた。

七月二一日 晴

きのうから食料を検約するようにして来たが、やはり今までの進行状態からしても、もちそうに

なかった。天候にはめぐまれ始めたのに、とうとう引きかえすことになる。大きく彎曲している川すじを通過して帰るよりも、山越えの方が楽そうだったのでそうする事にした。流れる汗をすぐ目の前の斜面に直接たらしながら息ばかり切らせた。丸森山の頂上に着いたのは昼ごろだった。一日で山を越せると思っていたので、水はあまり持たなかった。それが甘かったようであった。夕暮は我々をいそがせた。しかしうす暗くなり始めるのにまだ川に下りられそうもなかった。その夜は水の無い所でなかなか寝つかれなかった。私は夢うつで川を渡ることばかり考えていた。水を飲みに行くのを夢みた者もいた。もう少しひどくなったら本当に夢遊病者のように外に出て行って分らなくなってしまうかも知れない。

七月二二日 晴後曇

水もないし食料も少ないのですぐ川に下りることにした。途中対岸に後で我々の行くはずであった高安山が白っぽいガレを見せてそばにいるのが見渡せたが、目はすぐ下の川に向けられた。昼近くになってやっと水にありつく。渡れそうかどうか見る前にゴクゴクと水を飲んだ。それからすぐに目は川に向けられた。川の真中に大きな岩があって、そのちょっと上流に小さな岩が二つほど出ていた。そしてその小さな岩の上流は広く深くなっているのでゆるやかだが、それから下流は比較的浅そうだが急流となっていた。我々は小さな岩の所に一たん集まってからさらに左岸に渡る計画だった。そこまでは膝と股の中間位の深さで何ということはない。その先は半分澄んでいる

が、腰位で何とか渡れるだろうとザイルをつけて第一歩を踏み出した。中の流れは以外と速く、そして深かった。アッしまったと思う間に私は流されていた。どうなったのかは一瞬分らなかったが、つけたザイルがグツとしまつて苦しくなったので流されたのだなと思った。足はついていなかった。中田がカツと目を見開いて必死にザイルを引いていった。中田の引くザイルと水勢とのたたかいだった。私はあまりの苦しさに声も出ず、やっとザイルをのばすように合図した。もうザイルが全部のびきつたらどうなるのかなどと考える余裕は全くなかった。少しづつザイルがのびた。足に何かさわった。川の真中の大きな岩がそこにあった。何も考えずに夢中でよじ登った。寒さと興奮とでしばらくの間身ぶるいが止まらなかった。

昼食を取りながらそこをどうやって渡るか案を出し合った。泳ぐには冷たすぎるようだった。適当な流木が有ったが重いし、岩の間からどうしてもはずれなかった。やはり別の渡りやすい所を探すよりなかった。渡れば、ものの三時間ほどで神社に帰りつけるだろうと思うと残念で仕方なかった。また木の根や草をたよりの急登が始まった。泳ぐ方が良いのではないかと何度も考えた。とうとうその日も渡る事が出来なかった。沢のすぐふちに石を積んで作ったキャンプ地は連日の場所と比べると良い方であった。夕食はおそまつであった。今日は天狗小屋で斉藤と落合う日であったのに、まだこんなところで苦戦しているとは。いったいこれからどうなるのだろうと考えると、目ばかり冴えてきてしまった。

七月二三日 曇時々雨

朝食はなおのことおそまつであつた。四人で二合ほどの飯と少しの漬物だけであつた。今日中に渡れないと本当にあぶなくなることは目に見えていた。おまけに出発するところになってまたポツポツ降り始めてきた。もう一刻の猶予も出来なかつた。尾根すじから見て渡れそうな所へ遮二無二下つた。

とうとう渡れそうな所に出た。深さは前の時と同じ位だつた。それでも流れはなかなか速く、中ほどで岩につまづき、ブラリとした時には、ここで流されたらもう終りだと声を出して叫びながら渡つた。三分の二ほど渡つて水勢が弱まるのを足全体で感じた時は、本当に休から力がぬけてゆくように感じた。あとは神社までは訳はなかつた。最後の神社の階段をゆっくり登りながら、苦しみの毎日を楽しく思い出していた。つゆ明けの予報が出たのは翌日だつた。

オオムでの食事・北海道雄武、枝幸地方調査隊

山口由則

我々の頃の合宿での食事は、いろいろと、工夫は試みたが、結局は四年間、同じものを食べていた。卒業すると、あの頃の味がなつかしくなる。北海道雄武でのコンダテをとどめておきたい。

16 日	15 日	14 日	13 日	12 日	
味噌汁 漬物 タマゴ	味噌汁 漬物 ふりかけ	すまし汁 漬物	味噌汁 漬物	味噌汁 漬物 卵	朝
紅茶 ハムサンド	即席ラーメン ライス	サラダ 卵 ゆで ライス	カン詰 ライス	即席タンメン	昼
チャーハン	ハヤシライス	ピーマンの塩焼 アジの塩焼 つくだに	テン普拉	カレーライス 副神漬	晩
	20 日	19 日	18 日	17 日	
	味噌汁 キャベツ マヨネーズ	味噌汁 つけもの	味噌汁 ふりかけ	味噌汁 つくだに	朝
	ソーセージ 野菜 紅茶 ため	ソーセージ チー 紅茶	サラダ 飯	パル ゆで ミル ク卵	昼
	カレーライス	けんちゃん汁 つけもの	おでん	シチュー 漬物	晩

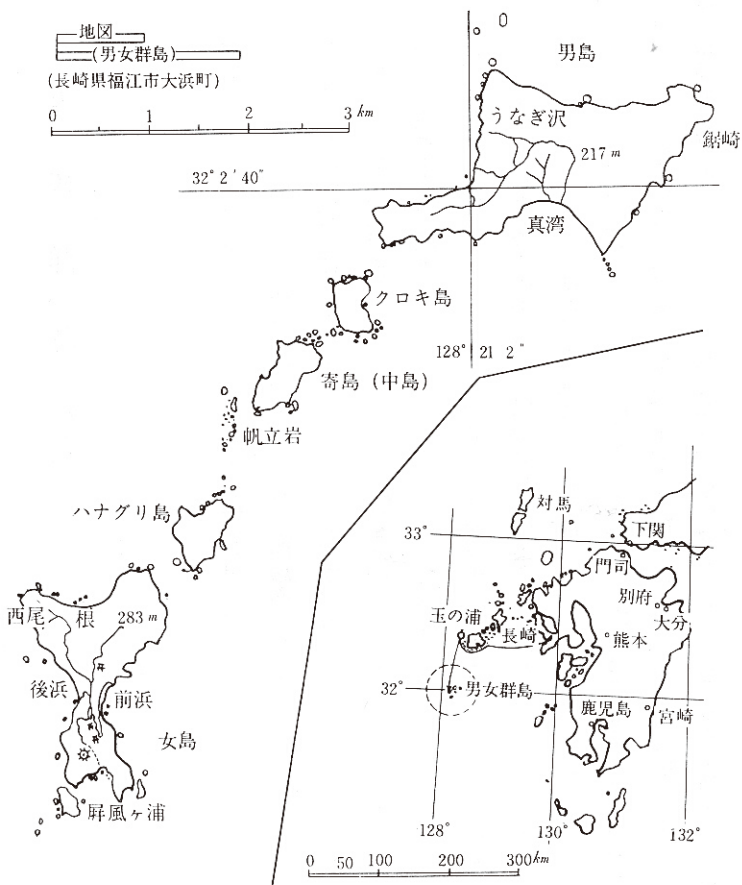
北海道雄武、枝幸地方調査隊一般報告（一九六五）

男女群島（第一次）

松 本 芳 樹

男女群島は東経一二八度、北緯三二度線上に北より男島、クロキ島、ハナグリ島、女島と並ぶ五つの小島よりなる群島で、長崎五島の福江島より七四km南下した、東支那海の荒波に浮ぶ一連の小群島である。この内女島には半月交代のきびしさの中で、本邦最西端の灯を守っている灯台があるほか、他は全部無人島である。我々はこゝに三九年（一九六四）七月一六日から八月六日までの二日間、生物を中心に調査を行なったのであった。『日本最西端の無人島』『本邦最後の秘境』というのが新聞社によってつけられたこの群島のキャッチフレーズであった。飲料水の問題、船の問題等やっと解決して宿舎の佐世保海上保安クラブに集合したのが七月一三日。その後出航の日までの二日間、食料の買入れ、装備の点検等島での生活に万全の用意をしたのであった。

「出航の朝。起床六時一五分、相当緊張していた為か昨夜は満足に眠れなかったようだ。午前中森谷と共に海上保安部へ最後の連絡事項の点検に出掛ける。自衛隊の広い構内に海上保安部がある。男女群島付近はもう十日もうねりが続いているそう。祈る様な気持で海を見る。一二時出



航。各新聞社、TV局のインタビュもそこそこに乗船する。自衛隊の基地内だけに一般の人々の見送りは無いが、前記の記者達、それに海上保安庁関係の人々、又港で働いている人々それぞれが手を振って見送ってくれた。これから約二〇日間、もしかすると一カ月以上も人のいる町に上陸は勿論ながめる事も出来ぬかも知れない。小高い丘に囲まれた佐世保の町がだんだん小さくなると一寸センチメンタルな気持になる。しかしそれもまもなくおとずれ始める大波で消えうせてしまう。一四時を過ぎると一寸紙面では書き表わせない様な大波が次々におそってくる。真青な上空を濃いあい色の海水と、白く高く上がるしぶきが続く。一五時を過ぎると進行方向右手に薄く五島の姿が浮び上ってくる。大波、文字通りの大波が我々甲板に立っている者よりも高い波がおそってくる。そして船に打ちつけては白いしぶきを上げてくだけていく。こうまでゆられると写真をとろうにも身体が上下してうまくピントが合わない。ピッチングとローリングの連続で気持が悪い。一八時予定を少しおくらせて福江島の大瀬崎灯台の下を右回しながら通過する。五島列島の南端だ。折からの夕日をおびて白堊の建物が森の中から姿を見せて荒海を見下している光景は印象的である。その下ずっと続いているきれいな断崖の岩はだが、何かキリンの背中を見せている様なシマ模様を描いている。玉の浦港内に入ると今までの波が急におとなしくなる。あたりがだんだん暗くなる。こゝで岸から五〇mの所にイカリを下し、明朝一時三〇分の出航まで休息をとる。明朝五時半上陸予定。とにかく両島の無事上陸を祈りつゝ休息とする。

五時、目をさます。『島が見えます』名和の明るい声が叫ぶ。皆元氣の様だ。予想外に海がないでいた為だろうか。それとも緊張の為だろうか。

青く赤くそして暗いなんとも云えぬ重苦しいモヤの中に男女群島が顔をそろえている。黒い岩はだを見せた数個の岩山。こゝが日本の西のはて。男島沖を通って後浜より女島をまくようにして通過。圧巻と云うのはこの様な事を云うのであろう。全島を横からながめると壮大である。グロテスクな岩山が何か突然にして海から顔を出したようである。船長の話だとこんなにいる海はめずらしいそうだ。うれしい。しかしうれしいというよりとうとう来てしまったという方がびったりくる。太陽が出てくると黒かった島が緑色に変わる。黒い海があい色に変わる。そして暗い空が赤くうすく空色をおびてくる。六時を過ぎ、今まで和氣相合の乗船員が命令調になると船上が急にあわたゞしくなる。カッターをおろし始める。女島沖に停泊。六時三十分カッターをおろす。ボートが激しく上下する。第一艇には灯台員とその荷物、名和、大江が、続いて第二艇では我々の荷物、宮崎、篠原、大隅、松本が離れる。七時女島に全員上陸する。一時間後荒波にカッターをこわれ、海に飛び込みながら男島の上陸に成功したとの報、トランシーバーで連絡を受ける。

桜色にほてった身体が六つ。テントの中に入るとたゞそれだけでむっと熱気がたちこめる。上陸して二日目と云うのに、はや背中がひりひりとして皮がむけてくる。朝でも七時を過ぎると三〇度

をこす。今日は最高峰二八・三mを目指して山に登る。まばゆい夏の朝焼けを背にうけてかなり急斜面をはう様にして登りつめると後浜、前浜を左右に見おろすヤセ屋根に出る。そこから南へとゆるやかな坂を登ると灯台にたどりつく。我々はこゝから北へ進む。船からながめると小さく見えた木々、草々も中に踏込むとそうではない。登る程に繁みが深くなる。サンゴ樹系の木が密生している。いつのまにか道が消えてしまいひどいブッシュの中をノロノロ動きまわってしまう。サルトリイバラのつるや、サイトモに似た葉をもつ丈の大きい植物。サユキ等が大いなる障害になる。周りは太いヤンホがうつそうと繁りまるでジャングル。たまにふじづるがぶら下がっている。もう太陽が出ているというのに中に入ると気持ち悪い程暗い。暗く、湿っぽく、かび臭いジャングルの間から時々光がさし込み、青い海の色をちらっと視界に入れてくれる。あたりの静じゃくを破るように道を切り開きながら進む。九時四〇分、ふと細い道に出る。その暗を進んでいく。そこから四〇度位の傾斜をまっすぐに木の枝の下をはいくゞって行くと急に前が明るくなる。一〇時頂上に立つ。大きく海が広がる。北の方すぐ下にハナグリ島、中ノ島、クロキ島がきれいに見える。そしてその向うクロキ島にかさなる様に男島が見える。こゝから見ると頂上が平らな形をした島だ。男島の向うは何も見えない。青い空と青い海がずっと広がる。期待していた五島の姿はいくら目ばたきしても見えない。すぐ下ハナグリ島との間には、白い潮目が立っていて潮流の複雑な事を知らせている。左に目を移すとY字型をした女島の西の尾根がぐっと伸びていて、頂上の尾根との間には

静かなる入江を作っている。南を振りかえる。女島の兩半分がきれいに見える。白い燈台の建物が強烈な太陽を受けて金色に光っている。あざやかな緑。白い灯台、青い海。自然が作った見事な絵画を思わせる。こうして頂上に立っていると、とてつもなく広い海の大きさをあらためて知らされる。そしてこの世界に自分以外に誰もいない様な錯覚におち入る。いつまでもこうしていいたいと思う。いつの間にか都会の人達には忘れられた情景がこゝには残っている。こゝも日本である。汗で重くなった上衣の中を強い風が通り抜ける。トランシーバーで交信。男島隊も一〇時過ぎ頂上に立ったとの事、同頂上で休んでいるという。たぶん同じ感慨にふけっているのであろう。

我々の仕事は午前四時、食当の起床と共に始まる。四時といえばまだうす暗く、南の島でも涼しいというより寒さを感じる。ヘッドランプで手元を照らしながらの朝食の用意を終えて、まだテントでぐっすり眠っている他の者を起す頃、やっと太陽が東の水平線上に見えてくる。そして荘厳な一日の開始を告げる。真赤な丸い円が黒い海を照らす。ダイナミックな自然の躍動とも言えようか。午前六時、さわやかな空気の下で朝食が始まる。テント場のすぐ下の一寸した磯の上に、拾ってきた流木で枠を組み食卓としている。上陸した当初は、生活環境が急に変わったせいか食欲がなかったが三日もたつと、朝からおゝ盛なる食欲を発揮する。油の浮いた水にもなれてきたのか、それとも、何も感じなくなってきたのか別に気にもとまらなくなってしまった。

手際よくあと片づけをする。そして前日の打ち合せどおり七時にはテント場を離れる。

来て一週間たつと島の大半の様子はつかめた。女島はテント場のすぐ上の鞍部を軸にしてY字型をした三つの屋根より成る。頂上から真下は二五〇m位垂直に切り立っていて、そのまゝ海に入っている。磯は前浜、後浜、屏風ヶ浦の三か所下れる他は不可能で、全体として名前とは逆で、ごつごつした感じである。午後四時になると汗でべとべとになった身体で山から下りてくる。水場といえる場所がどこにもないのが行動中最もこたえる。テントが近くに見えてくると元気な者は歩きながら服を脱ぎ始める。暑さにいたゝまれなくなり、帰ると共に身を投げ込む様にして海に飛び込む。残りの連中は、わずかな影を求めてぐったりとすわり込む。無言のまゝしばらく休んでからはだかになる。海は我々に憩を与えてくれる唯一のものである。きれいにすみきっていてまるで水族館にいるように、魚のパレードが広がる。天然色でみる魚が目の前を泳いでいく、針千本、はこフグ等面白いのはカラーでフィルムにおさめる。詳しく見るとサンゴ虫が美事に花を開いている。何回ももぐってはドライバーでこねまわし、やっと取り出す。魚は又栄養源でもある。泳いでいる魚を突き刺し、主要なるタンパク源とする。これらの魚は食当に料理されて夕食の食卓に色を添える。そして最も楽しい、ひと時をすごす。ミーティングを終え九時三〇分消灯。きつかった今日が終る。

我々はこの島で生物学的な面から採集を中心とした調査を行った。植物、昆虫、藻類、海産生物、そして水質等。主要な道すけを終えるとこれらの項目に添って全島を数個のブロックにわけ、一つのブロック毎に採集していった。オオタニワタリは、聞いていた通り、女島にはほとんど見えなかった。我々が最初に見つけたのは、上陸後六日目、頂上を越えて北西部の偵察をしていた時、がれ場の中に見つけた一m位のものであった。オオタニワタリは、かなり高価に売れるので、漁師がたまに來た折みやげものとして取って帰るそうである。その為男島に比べて比較的上陸しやすい女島では、ほとんどこの植物が見えなくなってしまったらしい。男島では二、三m近いのを、いたる所で発見しているのを見てもそう思われる。もっとも女島でも最後になって、容易には人の入れそうにない西端の尾根から一寸下った所で大群落を発見したのであるが。我々は採集品の一つとして四枚取って帰っている。

又この島には鳥類がかなり多い。しかも不思議と近よっても平気であるのには驚いた。きれいな声音は高ぶりがちな我々の神経を、おだやかにしてくれたものだった。オオミズナギドリを発見したのは、オオタニワタリを最初に見つけた直後であった。偵察の為北西部の斜面をぐんぐん下っていったのだが、最後になってオーバハングの岩が垂直におりており、あきらめて、もときたがれ場をはい上っていた時だ。誰か「大きいネズミが走った」と叫んだ。島にくる前から、猪より大きいネズミがいることを聞いていたが、これがオオミズナギドリであった。逃げ込んだと思われる直

径三〇cm位の穴の中に手を入れ、引張り出してみると、繁殖中の卵を抱いた鳥であった。うす茶に白いハン点があり、顔は白く、足には水かきを持っており、嘴が曲っていた。それにしてもこの鳥が、ここにいるとは知らなかった。オオミズナギドリとは、はっきり断定できなかったのもので、写真を何枚も撮って、走るようにしてテントに帰り鳥獣図鑑を広げてみたものだった。我々が上陸してから毎晩のように悩まされた奇妙な鳴き声、まるで人間の赤子と猫の鳴声を合わせたような気味の悪い声を出していたのはこの鳥だったのだ。後で漁師に聞くと彼らは「ぐーぎゃ鳥」と呼んでいた。たぶんぐーぎゃと聞える鳴声からそう呼ぶようになったのであろう。数については二万という人もあり、一〇万という人もいた。数がつかみにくい程沢山いるという事であらう。非常に弱い鳥のように、山を歩いていても所々に、他の鳥にかみ殺された死体が目につく。

オオウナギは男島で見つけたものだ。聞く所によると男島の神様とされていたようだ。実際男島には大きいウナギがいると言う人や、いないと言う人もいて、あやふやなうわさに止まっていたらしい。後になって漁師にこの事を話すと「あゝ、やっぱり本当にいたのですね」と真面目な顔付きで聞いていた。この島にいる昆虫の種類は大変少ない。誘蛾燈による夜間採集も行ってみたが、せいぜい五〇種類位ではなからうか。

夏は台風シーズンでもある。しかもここは台風の玄関口とあって、毎日の天気予報を聞きながら

天気図を作っていた。我々が初めて台風九号の発生を聞いたのは七月二九日であった。それまでは二度激しい雷雨があっただけで、他は快晴続きの毎日であった。運よく台風にもあわずに終りそうだと、ほっとしていたものであった。台風が群島の東を通過すれば、本土上陸のコースとなり、又西側を通過すれば大陸に抜けるわけだが、どちらにせよ、この付近はまぬがれられない台風銀座である。来る時は続くもので、九号のうねりが始まった頃、一〇号が続いて発生した。我々はこの様な孤島での台風には全く無経験でもあり、こわさというより、台風の通過後一週間位続くうねりの為に、帰りの日程がおくれる事の方を気にしていた。

トランシーバから聞えてくる声からも男島にいる連中の緊張している様子がよくわかる。高いうねりがテント場の近くまで押し寄せてくるとの事。そして大なる危険を感じ、里浦の方へ全員荷物共避難を開始したとの事。毎日の行動で疲れた身体で必死になって夜通しの山越をしているのである。灯台の人より、出来る限り漁船でもつかまえて、男島にいる者を、女島に収容する様連絡を受ける。男島隊よりの連絡によると、近くにいた船もすでに五島の方へ帰ってしまい、漁船の姿は一つも見当らず、ここで台風を避けるとの報である。里浦へ避難した男島隊からの交信がとだえて心配していた三〇日の朝、折からのうねりの中を木の葉のように激しく浮き沈みしながら、近づいてくる漁船が見えた。帰りがおくれ、里浦で台風を避けようとしていた一せきの船が運んできてくれたものだ。

我々をいためつけた一一号がおそってきたのは八月一日の夜から二日未明にかけてであった。三日の夕方、一二名にふえ、にぎやかとなった夕食をとっていた時、灯台より、巡視船が二日に來島するとの連絡をうけた。その夜は、灯台の職員を囲んで、皆思い思いの話に興じたものであった。喜ぶ者、なつかしがる者、強がる者、しかし何といつても、ホットした感情はかくしきれない様子である。一一号の存在が急に気になり出したが、うねりも現れず、八月一日は、朝早くから荷物の整理に精を出し、昼からは海に入り、島での最後を楽しんでいたものだった。ところが一四時を過ぎる頃から風が強まり、白波が立ち始めた。今まで種子島にかくれていたのが北上と共に急に影響がでてきたものらしい。灯台からも緊張した声で、女島も今夜半には暴風雨圏内に入るから嚴重な注意をせよとの事。こうなると帰る、帰れないの問題ではなく、テントを取りはずし、漁師小屋に避難する。採集品及び備品をそこに運び込み、流木で小屋の床板を張りつけ、穴のあいている個所を灯をつけ、水を貯える等、あわただしく夜ふけまで準備に急ぐ。台風の目が直径二〇〇kmあるそうである。こうなると明日船が来る事は完全にあきらめ、たゞ一夜の無事を祈るのみ。風音は益々激しさを増し、波音も高まってくる。暑くてたまらなくなり、外へ出ると数時間前まで泳いでいた海は、いつのまにか姿をかれ、うねりを増し一〇m位の高さで岩をのみ舞い上っている。暗くなつてから小屋にいく、コーヒーと菓子で気分を柔げる。トランプを囲む者、寝ころんでいる者、天気図をつくっている者。ローソクの火が薄暗くじめじめした小屋を照らす。二〇時頃、突風

でおそらく石が飛んできたのだろう。大きな音をたて驚かされる。ラジオは台風の事ばかりである。最も気にかけていた午前一時の満潮も無事経過し、一寸ばかり安心しだした頃、東の壁を高波がおそいはじめ、どんどんと猛烈な音をたて、小屋全体をきしませる。その度にこちらの心臓の周囲も激しく、おちつかぬ時間を過す。二、三回大きな波が打ちつける。午前二時三〇分、一段と激しい四回目の高波は、壁板を一気に押し破り、怒とうが押し入ってきた。突然にして破られた大穴を通じて、急激に高さを増した白波が狂ったように押し寄せてくるのが夜目にもはっきり見える。満潮期と重なっているから猛烈である。瞬間的に避難を始める。狂ったような音をたてる、風と波の中を着のみ着のまゝで灯台へ山に登る。点呼を繰り返しながら、風にふきとばされぬ為に、山をはい上る。見ようとしても目が海の上へ動かない。いつも夕方になると登っていた三〇m位の高さの岩礁が、白波の中にかくれそうになっていたのが、ちらっと見えただけであった。寒さに青くなつてふるえている者や足を切った者がいたが、ともかく全員無事であった。そして初めて味わった台風の強さをかみしめながら、無線室の壁にもたれかゝったまゝ、朝を迎えた。ラジオでは各地の台風状況を放送している。今や台風を中心であるこゝ女島灯台へ各地からの連絡や、要請が次々に無線に入ってくる。NHK長崎が我々のことを心配して聞いてくる。それから一〇分足らず四時のニュースの時、我々の無事がトランジスターから流れる。風がぐっと弱まり、台風の眼に入った事を告げる。外へ出ると白波が荒れ狂い、我々が歩いた前浜も、後浜も、屏風ヶ浦の浜も海の中にか

くれてしまっている。二日振りに下に下りるとテント場付近の地形が変わっていた。どこから流れてきたのか太い材木が浜に打ち上げられており、大きい石と波に打たれた小屋は全体が山よりすれ動いていた。心配していた荷物類も、一部を除きすべてみつけどされたのであった。

台風で荒された島にも、又静かな平和がおとずれた。雄大に拡がる海は何事もなかったかのように静かに小さくうねっている。我々が巡視船「あまくさ」の迎えを知ったのは三日であった。すでに台風一二号の発生もあり、半ばあきらめかけていた時であった。六日は早朝が交代予定の為、五日の夜は大きい岩のごろごろしている前浜でたき火を囲んで夜を明かしたのだった。もやとしぶきで湿っぽい身体を容赦なく刺しまわる蚊に苦しみながら、最後の荷物の整理をし、早朝来島予定の巡視船をまったのであった。赤く燃え続ける流木の周りで過ぎ去った二日間感慨にふけてみると、不思議なもので、上陸後思いもなかった都会の事が急になつかしさをもって感じられてくる。後は海の状態のみ。四時三〇分、巡視船「あまくさ」の声をキャッチ。船は灯台の明りが見える所に停泊しているとの事だがそれらしきものは見当らぬ。五時を過ぎ空が青味を帯びてくる。このように風いだ海の状態は最高である。五時三〇分うすぐらいもやをついて巡視船が白いその姿を表わし、ゆっくり前進を始めた。暗いうちは岩陰になっていたらしい。前浜から約三〇〇m位の所でストップする。いかりをおろしたらしい。海の色が青くなり始めた頃、収容という名の交代が始

まった。灯台職員らに乗せたカッターは、早朝の前浜をすべるようにして沖の本船に向った。交代は二往復で終った。二往復目が「棧橋」を離れた。新たな灯台員とその荷物。そして我々の二二日間という、長い苦しい、尊い、楽しい、なつかしい思い出を残して。六時四〇分全員「あまくさ」の人となる。巡視船は六時四五分静かに軸をまわして動き出す。実際に降りられなかった女島北部がはっきり見える。次第次第に思い出の小屋が小さくなり、前にあった岩の島もうすらいでいく。白い灯台がちょこんと乗る女島よ、もう我々の前に現れる事はないだろう。なつかしいテント場よ、前浜よ、さようなら。男島が近ずき中に並ぶ島が奇石、怪石を見せてくれる。静かなる海は、我々二二日間の無事を歓迎してくれるようだ。この青い波が、灰色になり我々に襲いかゝってきたものだった。しかしあんなのがまるでウソのよう。今日は全く滑らかだ。船は大きく太いカーブ。ハナグリ島と中ノ島との間を抜けて一路五島へ向けて進路をとる。男島はいつのまにか光り出した逆光を浴びて黒ずんでいる。船に乗ってやっと安堵の色が隊員一人一人にも感じられる。甲板の上では、灯台の人達、巡視船に乗り組む海上保安部の人と、そして我々の仲間が、それぞれの思い出話に花を咲かせている。後をふりかえれば、次第に小さくなりゆく男女群島の姿が一目に見えている。あゝもう一度、たった今あの女島の磯の上に足をつけてみたい。絶壁の頂上に立って大声で叫んでみたい。深くすみきった前浜の海で泳ぎ潜ってみたい。苦しければ苦しかった程こんな感情がこみあげてくる。そして懐しい二二日間の出来事が一つ一つ頭の中をかけまわる。

男女群島のその壮嚴なる海は水平線にかすかに残り、やがて一つの点と化し、とうとう紺碧の海と空に吸い込まれて消えてしまった。

第二次男女群島調査

遠藤 紘一郎

昭和三九年（一九六四）夏の一大課題として敢行した男女群島調査の後始末を終え、無人島生活の苦しかった頃である。

私は、「もう一度行こう」と考えた。

前回の男女群島調査においては、きびしい条件にもかかわらず、多大な成果をおさめた。多くの動植物の標本、更に、オオミズナギドリ、オオウナギ、オオタニワタリ等の貴重な発見等々の成果である。

しかし、私自身としては、それだけにとどまらず更に深く探究したい気持であった。全島の植物分布、オオミズナギドリの生態、オオウナギの生息状況、天然記念物オオタニワタリの分布状態をもっと深く知りたかった。また、一年生として参加した前回の男女群島では、大自然の偉大さ、き

びしさ、美しさに、生れて初めての私の経験であるためか、感激でいっぱいだった。

とりわけ、二〇メートル下の海底が手にとるように透きとおった真青な海の中を、自由に泳ぎまわる珍しい魚の様子はすばらしく、ぜひカメラに収め、皆に紹介したいほどであった。

以後、私なりに計画を進めていった訳であるが、一人ではどうにもならず、又、一人で三〇日間の無人島生活は危険極まりなかった。そこで、昭和四〇年の春頃から、同志を募った。しかし、部内においては、賛同してくれる人はいても、いっしょに行ってくれる人は得られなかった。しばらくたって、「男女群島に行きたい」という人が部外から現われた。生物科二年の村松君であった。日頃から男女群島の話をして気が合っていた彼と、早速、本格的な第二次男女群島調査の計画を進めた。計画が進むに従って、隊員も増えていった。探検部一年生の安藤君、大下君、それにやはり生物科二年の柿沢君、弘光君、山崎君が加わって、隊員は七人になった。

一方、この計画が探検部の正式なパーティーによって進めなければならない多くの障害が出て来たと共に、当然、第二回の男女群島調査が探検部に与えられた課題であると確信していた私は、五月初めの部会において、本調査の探検部による承認を求めた。

しかし、探検会初まって以来初めての第二回調査である事と、知床半島縦走探査に次いで二度目ではあるが、部外者の参加している隊であるという二つの特質を抱えている本調査には問題点が多かった。すなわち、次のような指摘があった。一つは、前回の調査成果が出ておらず、しかも多

くの標本をそのままの状態にして再び男女群島に向う事は、無意味であるという事。二つは、部外者が探検部の隊に参加する事に対してである。前回で、探検部が開拓した男女群島を、経験者である私が単なる *tourist* として、生物科学生の調査隊員に提供してしまうのではないかという事である。更に、当時二年生であった私が、隊長として、部外の者四名と探検部一年生二名をどこまで統率していけるかの問題であった。すなわち、目的地の性質上、隊の弱体が悪化されるのであった。

もちろん、私自身も、隊の弱体は心配の種であった。出来るだけ計画途上から皆に接して、隊長の性格をつかむ事に努力し、又、前回経験者の二年生大江君に参加してもらって、その強化には力を入れた。

しかし、その他の意見には、どうしても納得出来なかった。前回の探検では、開拓の偉業は成し遂げたが、調査成果は出ない事は明らかであったし、数多くの標本は、半年間の内に、役に立たないものとなっていた。又、男女群島なる未知の島を出来る限り既知にしていこうという所期の目的ののちとして、私は部外者に参加させる事はさしつかえないと考えていた。特に、前述した貴重な意見を、もう一步深く追求するという趣旨にとって、生物科学生の参加は必要であった。

六月に入ると、本調査は承認され、隊員八名の第二回男女群島調査隊が正式に発足の運びとなった。

(成果)

前回調査の経験を土台として、かなり調査は深く為された。又、前回では為し得なかった全鳥踏破、気象データ、水中撮影、昆虫等の調査を行った。オオミズナギドリに関しては、その生息分布、生態記録を行った。その他の鳥類に関しては一八種発見された。オオウナギの棲息状況を明らかにすると共に、男島全体で六ピキの実在を確認した。植物に関しては、標本採集は行なわず、もっぱらカラー撮影で収録した。植物分布も完全と言ってよいほどの観察が出来た。

(感想)

計画当初から懸念されていた隊行動は、部外者、部内者共に非常に頑張ってくれたおかげでスムーズに運び、未熟な私にとって大きな支えとなってくれた事は喜ばしい。計画途上においても、島内行動においても、前回の貴重な体験はすべて役に立った。上陸に際しても、今回はゴムボートを持っていたおかげで楽に上陸出来る事となった。又、前回、跡してあった島内道は簡単に整備するだけで歩けた事は調査をスムーズにさせた原因の一つでもある。

今回の調査隊において、二年生でありながら全責任を負って無事に帰って来られた事は、私自身感無量の思いである。

無人島での食事

鈴木 宏 尚

当初計画にあたり最も困難だった点は、長期間故、腐らない食品という条件下でのタンパク源、及びビタミン類の摂取という事であった。カン詰とビタミン剤、これは全てを容易に解決してくれる。但し予算には限度がある。この様なわけで多少美味という点は犠牲にしてもっばらタンパク、ビタミン確保の献立とした。しかしそれだけでは不十分で、現地での魚類、自生の野菜も考慮に入れていた。食糧計画の重要性は今更云うまでもないが、活動の基礎となり、その上気力にも大なる影響を与える。

さて以下食種について気付いた点を挙げてみる。野菜について、タマネギ、ジャガイモ、サツマイモ等とは最後までつきあう事ができたがニンジンは数日にして腐ってしまい大半を利用しないままとなってしまった。又予想以上にキャベツが長持ちしたが、これらの点、計画前の保存実験を行っていくべきであったと痛感する。次に漬物について、現地で漬ける事は、探検部として始めての試みであったが、技術的に幼稚だったとは言え予想外に我々を満足させてくれた。市販のポリ袋のものより味も秀れており、今後長期の探検にはかなり効果的であろう。

献立に關して、一週間単位として昼、夕食はかなりバラエティーに富むよう留意したが、朝食の準備に一工夫欲しかったように思う。

朝いきなり起きて準備するのではなく、前日に用意して朝は少し火を通せばよいようにすべきであった。行動食については、最初の数日パンを用い、その後は米飯にした。豆類に關して当初、大豆、小豆、ソラ豆は植物性であるがタンパク源として大いに利用する予定であった。残念ながら佐世保にて小豆、あずき豆のみしか入手できず小豆は保存が悪くほとんど利用されなかったが、あずきは赤飯、ゼンザイと非常に好評だった。非常食について今更言うまでもないが、もっと慎重に取り扱うべきであり、この点、隊員自身、身をもってその重要性を思い知らされたと思う。次にし好品について、楽しみの少ない無人島での生活であり、予算の許す限り購入したのだが、滞島期間が伸びた事もあり不足気味であった様だ。最も反省すべきは米の消費量で、平均一日一人当り四、五合位食べ、予想を大きく上廻っていた。毎日の活動が予想以上に激しく、計画通りの量では無理だった様だ。又ラジウスを使わず、カマドを作って飯を炊いたが、ラジウス以上に能率が良く、今後夏にはぜひ実行していきたいものである。

全体として、ボーフラのいる、油の含まれている、しかも塩水に近いという水を用い、食中毒も起さず又横浜では、食べる事も出来ない様な新鮮な魚を存分に味わたったのであった。

Ⅲ 期

第一次パラワン島調査

一九六五年六月二六日～七月一日

フィリピン共和国の西部、ルソン島とボルネオとの間に位置するパラワン島のバタク族に関する民族調査、並びに同島の動植物相の調査を旨としたが、手違いにより目的地に達し得ず、ミンダナオ島リアンガ湾付近の動植物相の調査、農業、林業、水産業等に関する聞きこみ調査、ビサヤ族有形文化についての調査にとどまった。

編 成

隊長	菅田	弦	文科三年
副隊長	合田	濤	商学部三年
隊員	小林	恵二	文科二年
	出羽	寛	理科二年
	鈴木	光	理科二年

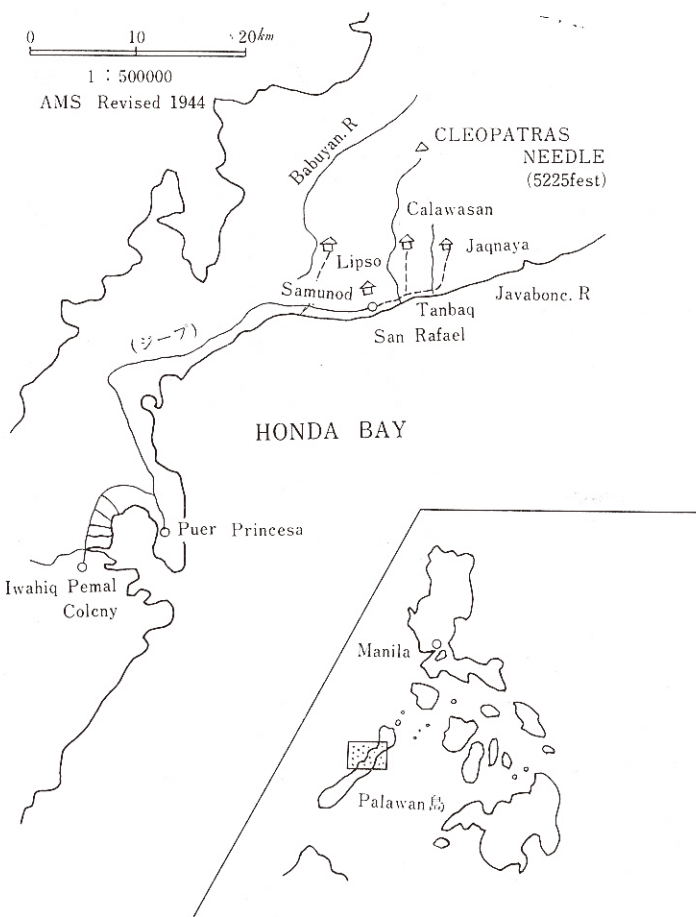
第二次パラワン島調査

一九六六年七月二一日～九月一日

パラワン島東部に住むバタク（ネグリート）族に関して人口、家族数、集落分布、人口移動の歴史、家族組織、社会組織、祭祀儀礼、精神文化（宗教、芸能等）、物質文化（家屋、生活用具等）についての調査を行ない、あわせてバタク族の栽培植物、ネズミの生態、その他一般的な生物学的調査も行なった。

編 成

隊長	合田	濤	商学部三年
副隊長	鈴木	光	理科三年
隊員	出羽	寛	理科三年
	井埜	邦明	文科二年
	安藤	嵩	商学部二年



行動日程

一九六六年	七月二一日	横浜港よりラオス号で出発。
	七月二九日	マニラ着（ファー・イースタン大学、聖トーマス大学訪問、動物園見学）。
	八月五日	マニラ発。同日パラワン州州都プエルト・プリンセサ着。
	八月六日	出羽、井埜隊員偵察に出発、他は学校訪問。（食料調達、州警察への連絡、資料調査等）
	八月九日	プエルト・プリンセサ発。同日ベースキヤンプ地、サンラファエル着。
	八月一〇日	サンラファエル発。（クレオパトラニードル登山を試みるが失敗）
	八月一二日	サンラファエル着。
	八月一五日	調査地スムロッドへ向けて出発。
	八月一七日	サンラファエルへ帰還。
	八月一九日	第二調査地リプソへ向けて出発。
	八月二三日	サンラファエルへ帰還。
	八月二四日	出羽隊員を除く四名は第三調査地タグナヤへ向けて出発。

八月二五日 サンラファエル着。（合田、井埜両隊員体調不調）

八月二七日 出羽、鈴木、安藤隊員第四調査地カラクアサンへ向けて出発。

八月二八日 サンラファエルへ戻る（現地調査日程終了）

八月二九日 プエルト・プリンセサ帰着。

九月一日 マニラ帰着。

九月一日 神戸着。

安家川^{あつか}流域調査

一九六六年八月二日～八月一二日

岩手県下いわゆる「日本のチベット」を流域に持つ安家川について水質、藻類を中心に調査した。またこの地域で初歩的な洞窟探検を試みた。

編 成

隊長	名和 裕美	理科三年
副隊長	大江 達彦	理科三年
	小林 恵二	文科三年
	峰岸 常之	理科三年

新井 静男 文科一年

大橋 正敏 商学部一年

藤本 隆久 商学部一年

藤山正二郎 文科一年

台湾たいわん蘭嶼らんしよ學術調査

一九六七年二月二八日～四月一二日

台湾東南方約八〇Kmの孤島蘭嶼において原住民ヤミ族に關して經濟、社会的調査を彼等のトビウオ漁に焦点をあてて行なつた。またヤミ族の原始信仰と後に流入したキリスト教との關係、タロ芋を中心とする栽培植物、蝶の生態についても調査した。

編 成

隊長 遠藤紘一郎 商学部三年

副隊長 津幡 光哉 商学部二年

隊員 鈴木 宏尚 文科三年

成田 佳紀 理科一年

日 程

一九六七年

二月二八日 本隊四名東京駅出發。

三月 三日 沖縄那覇港着。四日間滞在。五日出港予

定の那覇丸時化の為欠航。

八日 台湾・基隆港着。

九日 台湾大学訪問資料集め。

十一日 台東へ向け出發。

一二日 台東着。黃順興氏と対面。県長官舎にベ

ースを置く。

一五日 蘭嶼行き船便二日に延期決まる。プリ

テストとしてブスン族紅葉村を訪問。調査。

二一日 蘭嶼へ向け出發。航行不能の事態発生し、引返す。

二三日 蘭嶼へ向け出發。

二三日～四月二日 目的地蘭嶼にて各自の調査を行ふ。

四月 三日 台東出發、黃氏らへ挨拶参り。

五日 在台大使館へ帰還報告。

七日 台北發、基隆港より帰国の途。

九日 那覇港着。

一〇日 鹿児島着、税関検査。

一二日 東京晴海港接岸、帰国。

新冠川^{にいかつぶ}流域調査

一九六七年八月一日～八月二〇日

北海道の開拓村、新冠町において社会調査、日高山脈ポロシリ岳において野ネズミと植物の垂直分布の調査を行なった。

編 成

隊長 出羽 寛 理科四年

副隊長 小沢 幸重 理科三年

隊員 新井 静男 文科二年

藤山正二郎 文科二年

丸茂 一文 理科一年

水尾 寛己 理科一年

第一次パラワン島調査隊のこと

菅 田 弦

一九六五年七月三日、一週間の太平洋の航海を経た船は、淡い緑色のスリガオ海峡を横切っていた。南洋の太陽は我々五人の隊員の頭上にふりそそぎ、目は、はじめて見るヤシの茂った島々にひきつけられていた。三角の帆をつけた小舟が船のわきをすりぬける。肌の濃い漁夫が手を振っている。われわれは文字で知ったばかりのタガログ語をはじめて口に出した。「マガンダン、ハポシ、ポノ」（こんにちわ）ところが、彼の口からは「ハロー」の返辞が返ってきた。まもなく船はレイテ島のタクロバンに近づいた。ココナツの林と濃緑の山々の下の白い町をみて、上陸の準備を始めたのだった。

思えば、はるかな道のりだった。探査会学生部が探検部と名を変えた一九六四年には、すでに名称だけでなく、内部にさまざまな問題をかかえ、大きな転換をむかえなければならぬ時期にあった。そのひとつは、今まで生物科学生を中心としていた組織に、次第に文科系学生が増加してきたこと。もうひとつは、何回も計画され、達成できなかった海外探査が、渡航自由化とともに可能性の濃くなってきたことである。生物中心の調査対象から抜け出そうと、地理、民俗学、さらに対象

思えばあわただしく、危ういことの多い話であった。あまりにも未知なものに満ちていて、涉外そのものが、新しい知識を得ることに他ならないのだったから。

だから、六月二六日のたそがれの東京港を出た時は、合田、鈴木光、出羽、小林、菅田の五人の隊員は、皆、まるで、まったく新しい生を始めるかのような、すみきった心で、去りゆく東京の灯を見ていたのだった。

予定では、この船が移民官を乗せるために寄港するレイテ島のタクロバンに上陸し、飛行機でマニラへ、それからパラワンへ渡り、涉外、予備調査を行なうことになっていた。

船に現地人たちが乗りこんできた。われわれはザックを甲板に運び、すぐにでもランチに乗り移る準備をしていた。その時、あまりにも突然に、東京からの電報が舞いこんだのである。「マニラ移民局がタクロバンからの上陸を許可しない」という内容であった。追って「マニラ大学や住友商事を通じて交渉している」旨の電報が来たが、フィリピンの法律では、マニラ、セブ、ダバオなどの主要港以外からは外国人の入国を許可しないということが原因だった。しかし、ビザをくれたフィリピン大使館には、タクロバンから上陸することを伝えてあったのだし、船会社の方でも、そのような法律については知らないとのこと。とにかく電報だけが唯一の外との交信手段でしかない船の中で、われわれはまったくツンボさじきに置かれていたのだ。

を世界へと広げる文化人類学へと方向づけられていったことは、この二つの要素からの必然であった。

その年の一〇月、東京オリンピックに湧きたつさなかに、はじめての人文関係の調査を目的とした、静岡県小俣京丸の集落調査を行なった。これは、今までの探査会の方向とはまったく違って、民家に寝泊りしながら、社会、地理、民俗などを聞きこみを中心として調査したものだった。そして、ここで知ったことは、大いなる可能性だった。海外探査の計画がささやかれるようになったのも、このころからであった。費用の関係や、調査の遅れている地域などを考慮した上で、フィリピンのパラワン島が候補に上ったのは十一月のことだった。その時から、諸大学や会社等を通じて資料を集め、フィリピン大使館で情報を聞き、船会社を尋ねて便乗の交渉をし、渉外の日々が始まったのである。

この苦難の多かった渉外活動は、まったく未知なるものへ向かう我々には、それ自体、探検のひとつの過程であった。そして、さまざまな問題はひとつずつ解決していった。便乗は不可能と思われるていたのを、市大の先輩である第一中央汽船の出原氏を通じて福神汽船の玉福神丸に便乗させてもらうことが決まった四月。パスポートが下り、ビサの請求をはじめた五月。県や市や諸団体から援助をおおぎ、どうにか費用のメドがついたころ、ビザも正式に降り、めまぐるしい渉外の日々から解放されたのは出発の当日であった。

明日赴くミンダナオ島で上陸できるように交渉してみましようという船長の言葉を信じて、船は夕やみ迫るタロバンを後にしたのだった。

七月五日、右方に連るミンダナオの山々を目覚めに迎かえた。昼、北緯八度のビスリグの港に碇泊。ここに望みをかけていたのに、タクロバンから乗った太った色の黒い移民官はさっさと上陸してしまい、入国のみこみは全然立たなくなってしまった。北方の風景を想わせるようなならかな山々を後にして、再び船は北上し、夜にラワン材の積出港リアンガ港に碇泊した。

入国が不可能だとわかったので、せめて碇泊期間中だけでも、このミンダナオの一角を知っておこうと努力することにした。次の日朝から船に交換のために商品を持ってくる原地人たちの小舟が寄ってきた。船には二人の税関吏と四人のウォッチマンが乗りこんだ。甲板で対岸に見える水上集落をスケッチしていると彼らは近づいてきてしきりに絵をみている。今まで、黒い顔と不気味に光る目ばかり気になって、何となく抵抗を感じていたのが、このチャンスに話し合えるかもしれないと思った。そこで、絵を見ているウォッチマンの一人に「あの村は何という名ですか」ときいてみた。「ディアタゴン」彼等は案外気さくに答える。そこで、彼らの言葉を調べてみようと思う。「ふだんはビサヤ語を話しているのですか」「イエス」海を指して「海は何といいますか」「ランギット」「太陽は」「アラウ」こうして、視界にはいるものひとつひとつ名を尋ねてノートに写していると、いつのまにか、数人が集まって我先きにと答えようとしている。しかも、今まで何とな

く抵抗を感じていた鋭い目も、親しいものになつたようだった。

次の日に上陸してジープに乗って二〇キロ山奥にはいりホボ川で昆虫を採集した。キシタトリバネアゲハを追って走りまわったジャングルの中の道は、灼熱の太陽の熱さを忘れさせた。その次の日は、ディアタゴンの村を調査した。バリオにはいると子供たちが寄つてきた。次の日にリアンガの町へ行った時は青年たちにかこまれた。彼等と親しく握手し住所を教え合つたりしていると、これから探検部が海外に行く場合のさまざまな精神的な困難が氷解してしまつたような気がした。このミンダナオ島の一角は、我々にとってはもはや未知の所ではなくなつていたのだから。

七月八日。夕方、船はラワン材を満載し、静かにリアンガを後にした。日本に帰りつくまで、台風に会つて南へ逃げたおそろしいこともあつたが、一〇日間の海の旅は快適だった。我々はすでに決して忘れることのできない貴重な体験を心の奥に持ち返つたのだから。

次の年に、五人の隊員のうち三人が、第二次パラワン島調査隊に参加して、大いなる成果をおさめた。彼等にとつても、この第一次隊の失敗の記憶が、挫折感としてではなく、大いなる可能性と、自信となつて、いつまでも思い出せるのではないかと思つてゐる。

第二次パラワン島調査隊出発前の状況

井 埜 邦 明

第一次隊がフィリピンに入国できず、所期の目的を果せないで終ったため、第一次の隊員はもう一度計画を立て直し、これを果す決意を固め、一九六六年早々、合田、鈴木（光）、出羽、菅田の四名が集まり計画案の検討を開始した。二月に入ってこれに井埜が加わり、第二次パラワン隊を結成した。四月一三日、計画書を印刷に回し、同日、MM汽船ラオス号に四名の予約を済ませた。四月一五日、探検部総会にて正式に第二次パラワン隊―隊長・合田濤、副隊長・鈴木光、隊員出羽寛、井埜邦明、それに情宣役として菅田弦が承認された。又隊員をもう一人、部内より公募する事に決める。そして四月一八日、隊員に安藤が加わり、同日の部会で承認され、ここに第二次パラワン隊の隊編成が最終的に決定した。翌一九日に学生課及び学長に計画の内容を説明するとともに学校側の協力を要請した。また二二日には第一回シンポジウム（小林恵一・東南アジアの農業形態について、出羽：東南アジアの哺乳動物について）を開き、七月二一日の出発日に向け、渉外に、調査事項の勉強にと精力的な活動をはじめたのであった。

何といつても第一次隊は横浜市大探検部にとって海外初探査であつたので、渡航手続、また資金、物品（規模において）の援助集め等、経験のない事が多く、要領を得ず、日数的、精神的にもかなりの苦勞を重ねたようであつた。それに較べて第二次隊は第一次隊の隊員が三名も加わつたことにもより、その経験をもとに比較的スムーズに進んだ。その中で最も大きな相異点は渡航方法による事であつた。それは第一次隊がなるべく費用を安くしたいという事から貨物船への便乗を決めたのであつたが、一般の人の貨物船便乗は原則的に許可しないという大手船会社の協定が障害になり、渉外にあたつた会社は十数社、費やした日数は一月中旬から六月初めと半年間に亘る長さであつた。第二次隊はこの経験を生かして運賃の多少よりも確実性を選び客船を利用する事にしたため、そのチケットの予約に数日を費やしただけであつた。この事は日数の短縮ばかりでなく、出港日、入港地、ひいてはビザの入手もが確実となつた。これは精神的な不安を解消するうえで大きな影響を与えたように思う。また援助金集めも第二次隊では進交会の会員の援助を願つたが、日数的に多くの努力を費やした反面、成果はあまりあがらなかつた。他の面においては渉外、庶務関係の相異はみられず、第一次隊の方針、及び経験を受け継いだものとなつた。最後にもう一つ見逃せない点として、学校側の姿勢が第二次隊に対しては、かなり好意的であつたという事がいえる。これは、計画を遂行させるうえにも、渉外がやりやすくなり、我々にとって心強い事であつた。

第一次隊が入国できなかった理由は別項の中で菅田隊長が書いてるので詳細はそれを読んでいただくことにして、ここでは主な理由についてだけ述べる事にする。

第一次隊員は全員、フィリピン大使館から、ミンダナオ島のタクロバンという港から入国の条件で一四日間の観光ビザの交付を受けた。にもかかわらず、出入国を監督するマニラ移民局は、上陸直前になってセブからの入国は許可するがタクロバンからの入国は許可しないと連絡してきた。結局セブからの入国も諦めざるを得なかった。

一方、二次隊は一次隊の経験より渡航方法も貨物船より入国が確実な客船にし、ビザも五九日間有効な観光ビザの交付を得た。この点についても、一次隊の時は五九日間のビザはインビテーション・レターを必要としたのに二次隊の時は、レターなしでも交付されたように、はっきりしなかった。このように、両隊ともビザを有していたにもかかわらず一次隊が入国を拒否されたのは、その正当な理由を見出し難いのである。そこでこのような結果になった理由を推測するならば、上陸地が、マニラと、小さな港町タクロバンとの違い、客船と貨物船、それに五九日間と一四日間のビザの有効期間の違い、これらが大きな理由となったと言えるのではないか、と思われる。

パラワン島調査隊の装備

出 羽 寛

第一次パラワン探検の時での反省で、軽いことにした事がないが、何がどの位必要なのかをはつきりさせることと、輸送を能率よくすることが上った。そして二次隊ではリストにのせてあるものをリンゴ箱三個とキスリング五個で総重量は三〇〇Kgであった。

装備リスト

(共同装備)		(数量)	(費用)	(備考)
ハン	モック	四		米軍の放出品、第一次の時、購入。ビニールの屋根 カヤ付
テント	(六人用)	一		装備用テント
ラ	ジウス	二		
ハン	ゴウ	二		個人より貸与
コ	ッフェル	一		
フ	ライパン	一		個人より貸与
食		一二		
包	丁器	二		

替	同	電	ヘ	懷	ロ	石	細	ビ	ク	タ	メ	シ	ポ	布	魚	茶	オ	シ
電		池	ッ	中	ー			ニ	レ	ワ	タ	ャ	リ	バ	焼	コ	ャ	
球	(單二)	(單二)	ド	電	ソ	油	(一m×二m)	ール	ン	シ	(二〇人用)	ベ	タ	ケ	シ	タ	モ	
			ラン	灯	ク	引		シート	ザ	ー	ル	ン	ツ	鍋	器	マ	ジ	

一〇	二〇	四〇	五	五	一〇	五	五	二	三	四	五	一	四	二	一	二	二	二
----	----	----	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

一〇〇円					五〇〇円	三〇〇円			一二〇円	四五〇円								
------	--	--	--	--	------	------	--	--	------	------	--	--	--	--	--	--	--	--

〃	〃	〃	湯浅電池より援助	Puerto Princesa で購入	積水化学より援助	個人より援助	第一次の時、購入	〃	〃	〃	個人より貸与
---	---	---	----------	---------------------	----------	--------	----------	---	---	---	--------

大工道具一式

一

個人より貸与

(ハリガネ、クギ、ドライバー、カナヅチ、ノコギリ)

目覚時計

一

個人より貸与

輪ゴム

一箱

二〇〇円

マッ

Puerto Princesa にて購入

釣道具一式

五

五〇〇円

セロテープ

一〇

積水化学より援助

ビニールテープ

五

〃

布テープ

二

〃

カッ

四

個人より貸与

マジックインク

一〇

五〇〇円

ペンゼン

二ビン

三〇〇円

防虫剤

乾燥剤

二

(學術装備)

捕虫網

三

捕虫網

二

五五〇円

一本購入

リオン

三

三角管

三

毒ツボ

一

ボ	最	棒	ス	日	紙	卷	ノ	バ	注	菓	カ	ル	解	ト	マ	ク	三
リ	高	状	タ	付	テ	尺	ギ	ネ	射	子	ス	ー	剖	ラ	ヨ	ダ	
袋	最	温	ン	印	！	(五〇m)	ス	バ	器	の	ミ	ペ	具	ッ	ネー	ビ	
	低	度	プ		プ	(二、五m)		カ		あ	網	一	式	プ	ズ	ン	
	温	計	台					リ		き				(小)	ビン	紙	
	度									カン				(大)			
	計																

二〇〇	一	三	一	一	二〇	二	一	一	二	二	六	二	二	一	八	一〇〇	五	二〇
-----	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	---	----

五〇〇円
二〇〇円

二〇〇円

個人より貸与

個人より貸与

個人より貸与

蝶、ネズミの標本入れ

第一次の時、購入

個人より貸与

一四四〇円

第一次の時購入

個人より援助

根

メ

掘

一

個人より貸与

カ

メ

ラ

五

”

フィルム (モノクロ)

八〇

朝日新聞、アサヒ芸能よりネガティブ五本援助

(カラー)

二〇

一〇〇〇〇円

(NHK・岩波先生より援助)

テープレコーダー

一

日立より貸与

ホルマリン

一〇〇〇cc

” 援助

エーテル

一〇〇〇cc

酢酸

一〇〇〇cc

アルコール

一〇〇〇cc

五〇〇円

半分購入

——探検部報 第一五号、(一九六七)——

蘭嶼ヤミ族との一〇日間

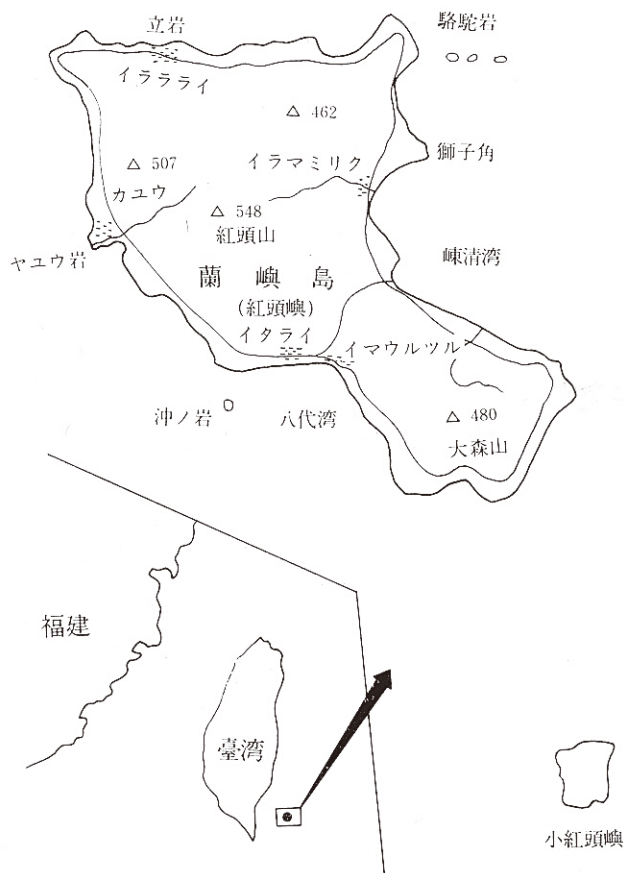
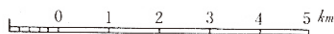
“フンドシ姿”の男が日本語で話しかけてくる

蘭嶼島は残された台湾の最後の秘境だが……。

遠藤 紘一郎

台東の加路蘭港より、三十トン足らずの老朽船で荒波にもまれること約九時間。われわれ蘭嶼調査隊一行は、ヤミ族の住むここ蘭嶼のイモル湾に到着した。

1 : 100000



この島と台湾本土との唯一の交通機関である月二回の連絡船でさえも、海の状態次第でいつになるかわからない。そのためか、外地の者がこの島を訪れることは珍しく「船来たる」は島での大きな出来事の一つなのだ。海岸には政府関係者をはじめ、女子供までくり出し、われわれの下船を、いまかいまかと待ちうけている。紺碧の海に続く白い砂浜に群がるヤミ族をながめながら、今後十日間の生活に不安と期待の入り混じった昂奮を、押えることは出来なかった。

われわれが海岸におりたつと、突然、「センセイガタ、ニホンカラキタカ、ヨクキタネ」と、日本語が耳に飛び込んで来た。振り返ると、真黒な顔をしわだらけにして笑いながら、一人のヤミ族の男が握手を求めてきた。

彼は今でも「東上等兵」という軍隊名で通っている大の日本通である。その名のとおり、戦争中日本軍と共に闘ったという彼は、日本から来たわれわれになつかしさをかくしきれなかったのだらう。

われわれの方も彼のことは、すでに聞き知っており、今回、彼に会うことを心待ちにしていたものである。

そんな訳で、われわれと東上等兵は、初対面の海岸で、十年來の知己であるかのように手を握りあった。

教育勸語をすらすらと暗誦し、「サーラバ、ラバウルヨー、マタクルヒマデ……」と歌い出す彼

は、われわれの滞在中一番のアシスタントであったことはもちろんである。

フンドシ姿のヤミ族を相手に、日本語がりっぱに通じるとは、いやはやびっくり仰天である。この島では、三十五歳以上の人は日本語がわかる。これは、日本統治五十年の教育のなせる結果であり、戦後二十余年の北京語普及の中にも依然として、根強く残っている。

ヤミ語を話せない台湾の役人たちは、中国語をはなせないヤミ族の大人と、日本語でやりとりしているといったありさまである。

女権国の中の『フンドシ姿』

台湾の高砂族の中でも、アミ族をはじめとする各種山地原住民族は、今ではすっかり台湾人と同化し、生活水準も相当高くなっている。今では昔のおもかげをしのぶことは難しい。わずかに、観光相手に民族衣裳で着かざったアミ族の踊りが見れるという程度である。

そんな中で、台湾本土と八十キロの海を隔てているこの小さな島を、昔から、自分たちの唯一の世界として生きて来たヤミ族は、外界の文化に浴することなく、今もなお昔のままの姿を止めている。

男のふだん着はフンドシ一つで、はだしといったかつこうが圧倒的である。最近では、政府や教会からパンツ、シャツなどの無料支給があるが、長年はきなれたフンドシは、なかなかやめられない。

いようである。

海に入って魚をとる時、散歩する時、寝る時、すべてこれ一本で足りる。亜熱帯性の気候のためでもあろうが、合理的といえは合理的である。

このフンドシ、白と青の糸できれいな模様が織っており、その上なかなか丈夫で、一生持つそう
だ。製作担当は奥さんの仕事となっている。われわれも大いに気に入って、一つ欲しくなった。

ヤユーという部落で、ある家の物干しに、洗いたてのフンドシがかかっていたので、早速その使
用主とおぼしき男に売ってくれるよう話しかけた。ところがその男、恐縮そうに答えた。

「ソレ、ワタシノモノチガウ。オクサンニハナシスルヨ」

われわれはあっけにとられたが、仕方なく奥さんと交渉しはじめた。話がこみ入って来ると、奥
さんはわれわれの日本語が通じなくなった。そこで、台湾の役人が日本語とカタコト日本語との通
訳となり、やっとの事でフンドシを手に入れることができた。

これは、女権の強いことをよく表わしている一つの例でもある。ヤミ族には女が少ない。三対五
くらいの比率であろう。そのため、当然男にとっては結婚難となってくる。女は十四、五歳から結
婚するが、それでもまだ足りない。やはり男たちにとっては最大の悩みであろう。

よくわれわれにぐちをいっていた。性のはけ口についても大問題で、その相手はヤギにまで
及ぶこともあると、恥かしそうに告白したヤミ族もいた。

結婚の条件は、その男の働きが良いかどうか、すなわち、海にもぐって魚をたくさんとれるかどうかで判断される。せっかく結婚しても、働き具合で、一方的に離婚される。かわいそうに、東上等兵も奥さんに逃げられた。

結婚歴五、六回の者は普通だという。しかし、婚約は、男から女に、メノウの玉をあげれば成立する。結婚式なんて面倒くさいものはない。離婚は女がそのメノウの玉を男に返したらよいのである。その点、合理的なシステムである。

夫が妻を大事にする様子は、はた目にもたいへんなものである。一番こわいのは、奥さんをおこらすことだからである。離婚に際して、男は従順でおとなしい。三角関係のもつれなどのけんかや、暴力沙汰は決していない。

もともとヤミの人間はいたって平和である。むしろ無邪気といってよいほどである。人を殺すなんてことはもちろん、傷つけたり、どろぼうしたりなどということは一切ない。

反面、食うに困らない彼らは、なまけものだともいえる。生活向上への努力だとか計画などという余計な神経は使わないようである。

石を投げあうヤミ族の戦争

われわれがこの島に到着する二週間ほどまえに、たいへんなことが起った。イラライという部

落とヤユー部落との間で、大きな戦争があったのだ。おどろいて話を聞いてみるとこうである。

ヤユー部落のある家が所有している放し飼いのヤギがいなくなって、イラライ部落の者に疑いをかけた。ふだんからあまり仲の良くない両部落は、ついに決闘となった。決闘とはいっても、それは平和でおとなしいヤミ族のこと、海岸で、雪合戦ならぬ石合戦をくりひろげるのである。

両部落とも、老若男女を総動員して、両部落の中間地点の海岸に集まった。約五百人、簾で作ったヨロイ、カブトに身をかためた男連中が、最前線で石を投げる。その後では、女、子供が石運びに懸命である。

ルールもちゃんとある。両部落の間で、取決められた場所に、決められた時間に集まり、合図とともに開始する。そして、どちらか一方が怪我人を多く出して後退したら負けということである。

この決闘を止めに行った郷公所（日本でいう村役場）の秘書官が流れ石に当って負傷するという一幕もあった。結局、ひょっこりとヤギが帰って来たということで終結となり、ヤユー部落がイラライ部落にメノウの玉をあげて仲なおりしたという。いともどかな戦争である。

主食はイモと魚

ある日、ヤミの男がニワトリの玉子を三つ持って、われわれの宿舎にやって来た。タバコ三本と「ギナギナ」（ヤミ語。交換の意味）してくれという。われわれはひさしぶりに玉子にありつける

と喜んで、早速引きとり、ちょうど、出来上がったインスタントラーメンの中にほうり込んだ。ところが、この玉子、くさっていて強烈な悪臭。ついにラーメンはおじゃんになってしまった。

ヤミの人たちは昔から、玉子は絶対に食べない。だから、二、三週間おいてひなにかえらない玉子でも、外地の人間なら喜んで食べるだろうし、おまけにタバコも手に入ればと思い、持参に及んだものらしい。何故か、われわれは怒る気にはなれなかった。

この他、彼らが口にしないものはまだある。ウナギなどのうろこのない魚や、トラトラ（ヤミ語でカエルのこと）である。トラトラは、台湾の人間はもちろん、われわれにとっても大好物である。ヤミの人がもってくるトラトラを、そのたびにタバコと「ギナギナ」した。

トラトラのスープがたいへんおいしく出来たので、宿舎にやって来たヤミの男にもごちそうした。もちろんトラトラの現物は除いておいた。

喜んで飲みはじめたまでは良かったが「それおいしいだろ。トラトラのスープだよ」と、隊員の一人が口をすべらしたとたん、「アイヤー」と叫んで、はき出してしまった。悪気でやったことではなかったが、いつまでもうらめしそうにわれわれをにらんでいたのには参った。

普通、ヤミ族の食事は、イモと魚である。最近は政府の奨励で少しずつ米を作りはじめたが、手のかかる稲作はあまりやりたがらない。主食は、ミズイモ、サトイモ、サツマイモ、ヤマイモ、タロイモなどのイモ類がすべてである。

海水と真水を半々にした湯でイモをゆでるのが彼らの料理法である。調味料は一切ない。われわれもミズイモを食べてみたが、なかなかうまいものであった。

副食も魚だけであり、後で話すトビウオや、海岸近くでとれる雑魚二、三びきを家族五、六人でつつき合っているのを見かけた。

こんな訳で、ヤミ族の食生活はごく簡単である。しかもイモ作りは女の仕事、魚とりは男の仕事と決まっており、その日の分の食料をとってくればこと足りる。

『明日は明日の風が吹く』生活である。気楽といえばあまりにも気楽、これが人間本来の姿かもしれない。

石垣に囲まれたまっ暗な家

この蘭嶼は台風の通り道となっている。海岸地域に住むヤミ族にとって、台風は最も恐ろしいものの一つである。そのために、彼らの住居は竪穴式の形体をとっている。とはいっても、地面に穴を掘る訳ではない。角材を骨格とし、板をうちつけ、カヤで屋根をふいた家屋のまわりをぐるりと石垣でかこむのである。

その石垣が、隣の家との境にもなっているし、りっぱな舗装道路でもあり、広い場所は子供の遊び場兼大人たちの社交の場でもある。その広場に、もたれ石や涼み台と呼ばれる高床式の小屋が立

っている。

ヤミの人間は、仕事のない時は、（もっとも、仕事のない時間の方が多いうだが）もたれ石によりかかってタバコをふかしたり、涼み台で昼寝をしてくつろいでいる。

三月といっても、日本の初夏を思わせる気候では、竪穴式の家は暑い。夜寝る時は、涼み台でゴロ寝する人も多いという。

イラタイという部落にある東上等兵の家を訪れた。道路から石の階段を降りると、ちょっとした広い場所がある。いわば庭である。その庭に面して、間口五メートル、奥行一メートルほどの廊下があり、これが入り口となっている。

高さ一メートル位の軒の下からのぞきこむと、東上等兵のお父さんがぬっと顔を出した。「コーカイ、コーカイ」。この島のあいさつで「コンニチワ」の意味である。しかし、ヤミ族はすべてのあいさつを、この「コーカイ」一つで間に合わせている。

東上等兵はいなかったが、家の中を見学させてもらった。家のかたすみには、かまどこそなかったが、ちゃんと台所らしき場所がある。そこでは、おばあさんがしゃがんで煮たきしていた。年中家の中で火を燃しているせいか、柱という柱、壁という壁は真黒に光っている。

中の作りは、三段の床になっていて、奥へ入ると、五十センチほど床が高くなっている。そして、入口は八十センチメートル四方である。これを、かがみこんで次の部屋へ入り込んでみる。

窓もなく、灯りもない奥の部屋では、昼間でも懐中電灯を使わなければならぬほど暗い。腰をかがめて立っているわれわれの頭にコツンとぶつかるものがあつた。ライトで照らして見て驚いた。天井に幾十となくヤギの角がぶらさがっている。これもすべて真黒になっている。中には油虫がついているのもある。この角がたくさんあればあるほど、その家は金持ちであるという証拠なのだそうだ。

一番奥の部屋にふとんが一枚あつた。そこは、老夫婦の寝室であり、中段の部屋は若夫婦、庭に面した廊下は子供の寝場所と決まっている。お世辞にも居心地が良いとはいへそうもないこの家から、そうそうに抜け出した。「ヤミの家は闇である」というのがわれわれ全員の一致した感想であつた。

伝統残す独特なトビウオ漁

東上等兵の家から帰ろうとすると、そのおじいさんが籐で編んだりっぱなカブトをさし出して、われわれにくれるという。家の中においてあるため真黒であるが、かなり古いカブトである。これは、日本への良いおみやげになると喜んで受けとることにした。

ところが、日本語が話せない彼は、今度はさかんに手をさし出している。タバコが欲しいのかなと思って、見せると、そうだそうだとうなづいた。またタバコか……。われわれは顔を見合せ爆笑

した。

しかし、ヤミ族とタバコの問題も考えたいへんなことであろう。

酒もタバコも知らなかった彼らが戦後すぐ、タバコをおぼえるようになり、今では女、子供までが「タバコ、タバコ」である。

現金収入のない彼らは、自然、外来の人間からタバコをせびる。さらには、道におちてる吸いがらまで拾う。われわれの滞在中も、例外なく、タバコ攻めに合った。

毎朝必ず、だれかがわれわれの宿舎にやって来る。「コーカイ」といいながら、われわれが昨夜すてたたくさんの吸いがらをきれいに拾い集めて「ハイサヨナラ」と帰っていく。

ヤミ族は、古来からの特有なる漁法でトビウオをとっている。三月にはいつて、月がかくれる頃になると、『チヌリフラン』という舟をくり出し、松明を燈す。その松明の光に向って飛び込んでくるトビウオをあみですくうのである。

最近、台湾の漁船がこの島付近まで出張してくるので、収獲は少なくなったと、ヤミ族は不平をいう。それでも一晩に千びきもとる舟もあるという。

この『チヌリフラン』という舟は、最高十人乗りのものまであり、板をはいでつくる高等技術が必要である。

また採色がほどこしてあり、赤、白、黒の模様が美しい。赤い色は赤土、白色は貝殻を焼いた石

灰、黒色はかまどのスス、といった具合である。

獲れた魚は、すべて平等に分配する。船長、網元といったものではなく、完全な共產制をとっている。

台湾最後の秘境、ヤミ族の蘭嶼ではあるが、今年の暮れには港も出来、船も新造船が就航するといふ。

今後、ヤミ族の世界も大きく変貌し、またそれを要求されることだろう。

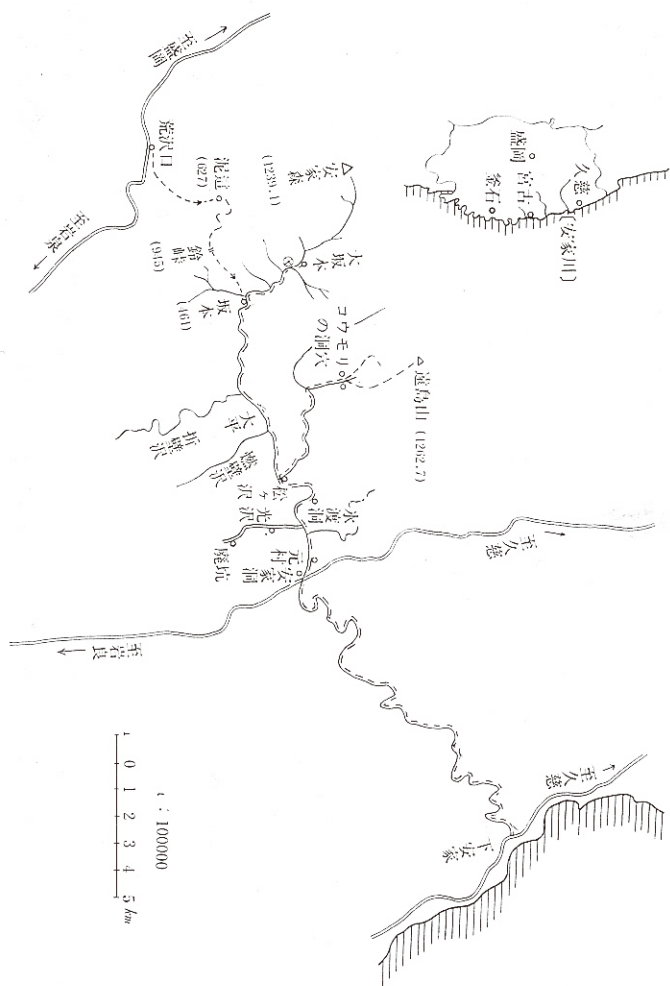
——「世界の秘境」七月号、(双葉社、一九六七)——

氷渡洞窟を探検して

大 橋 正 敏

〔注〕氷渡洞窟は岩手県安家川流域の松ヶ沢と元村の中間にあり、主洞の長さは約二kmで規模は中くらい。まだ新しく地下水が盛んに流れている。

林道に面した洞口に立つと、ヒンヤリとして、あたり一面霧がたちこめていた。ヘルメット、キヤップライト、懐中電燈、手袋、ローソク等の装備を点検しなおして、いよいよ中へ入る。始めのうちは大人が充分たって歩けるくらいの所が七〇m〜八〇mほど続いていた。突然、道がなくなり、



左上に人の胴がやっと入るくらいの穴があった。最初の難所である。上半身は楽に入ったが、腰につけた電池ケースがひっかかって下半身がどうしてもその穴から抜けない。無理に通そうと腰を動かしているうちにケースを岩にぶっつけ、キャップライトが消えてしまった。一方では足場がわからず、むやみに足をすべらす。

こんなことをしながらやっとその穴を抜け得る。すると目の前に約七〇×八〇㎡、高さ約二〇mの大殿堂みたいな所があらわれた。この洞窟では一番広い所であった。ちょうど腹がすいたので食事をすることにした。アンパン一個がビフテキのように思えた。

食後、荷物の一部をそこに残して、いよいよ奥に入る。この殿堂の入口と同じような穴が下に続いていた。これがまた一苦労だった。下りのため頭から入るわけにはいかない。足からである。足にライトはないし、目もないので、足さぐりでお入るほかない。くるぶし、ひざなどをあちこちの岩にぶっつけながらお入る。しかし、どうもうまくいかない。最後にはお入ることも上がることもできなくなってしまった。やたら体を動かす。そのうち、またライトが消えてしまった。直そうと思うのだが、手足がうまく動かず、もどかしいばかりだ。仕方なく、後方からライトで照してもらって活動開始……やつのことで穴をぬけることができた。

下の道に出ると、そこからは中腰で進める高さですっと続いている。そして始めて鐘乳石があちこちにあらわれてきた。地下水によって溶かされ、ちょうどトンネルのようになった穴、地震か何

かでくずれた大きな岩を越え、あるいはぐぐって二〇〇mぐらい進むと、突然、目の前に直経約五〇cm、高さ三〜四mの真白な石柱がさん然と輝いていた。いままでの鐘乳石が貧弱だったせいもあるが、それはそこらにあるものとは違い見事な石柱で、ギリシャ神殿の柱をまのあたりに見ているようであった。しかし、私たちは見物にきたのではない。探検にきたのである。奥へ進まなければならぬ。

中腰の状態で、または這いながら二〇〇m程進むと、ゴォーという音が大きくひびいてきた。何だろう？ すこし不安であった。滝ではないのかとそんなことを考えながらしばらく進むと、道は水にもぐっていた。そこからは水が奥へずっと続いていた。そこでもってきたゴムボートをひろげる。交代でまっしろな息をはきながらボートをふくらます。しまいには頭がいたくなるなりフラフラしてきた。それでもやつのことでボートを作り、綱をつけて奥へ進む。

五〜六m進むと流れは左右に分かれていた。どうやら水は左から流れ、水たまりとなって右へ流れているようであった。右はすぐ小さな穴に流れこんで、それ以上進めなかったので上流である左に向かった。五〜六m進むと、高さ約三mの滝があった。外でみれば何でもないものに思えるのだが、ここで見ると何となくすごい。音のせいだけではないだろう。そこをゴムボートをかっいで一気にのぼる。さらに奥へ進もうとボートを浮べたが、その先は穴が小さくなって、人間には無理と思われた。それでも少しでも奥へと、ボートが通れなくなるところまで進む。ついに行きどまりに

なった。

これ以上無理だ。そこで記念のフラッシュをたいて、そこを退こうとした時、足元に自分たちとは違うフラッシュの球が落ちているのに気がついた。ここには誰かがもう来ていたのか、自分たちが最初ではなかったのか。そう思うとガクンきた。

しかし、今考えてみると、私はここで少なくとも探検の一面である冒険というものを、初めて味わった気がするのである。

——探検部報 第一五号、（一九六七）——



IV 期

宝島調査

一九六七年七月一九日～八月一九日

吐喇列島に浮ぶ宝島についてその社会の親族組織、社会組織、宗教、風俗習慣等を調査し、教育、マスコミ、商品経済の流入等が古来からの文化に与えた影響について検討した。

編成

隊長 井埜 邦明 文科三年

副隊長 安藤 嵩 文科三年

隊員 合田 濤 商学部四年

紙村 徹 商学部一年

長谷川 上 商学部一年

小酒井由美 商学部一年

富宇賀ひろ子 文科一年

宇治群島調査

一九六七年七月二三日～八月二四日

九州枕崎市西方海上約八〇Km、いくつかの無人島より成る宇治群島について生物、地形の調査を行ない、遠洋漁業の基地として開発されようとしている自然の最後の姿を記録にとどめ、男女群島の自然と比較検討した。

編成

隊長 大下 好憲 商学部三年

副隊長 大橋 正敏 商学部二年

隊員 成田 佳紀 理科二年

今井 保弘 商学部一年

加納 良幸 文科一年

山口 幸雄 商学部一年

東 邦典 商学部一年

中島美千代 文科一年

川島由美子 文科一年

秋鹿 豊 商学部一年

青ヶ島調査

一九六八年七月一日～八月一七日

伊豆七島最南端の青ヶ島について下等生物、土壤に焦点をおいて調査を行なった。また天水の水質調査、島民の政治意識の調査もあわせて行なった。

編成

隊長 水尾 寛巳 理科二年

副隊長 川野由美子 文科二年

隊員 小川 博美 理科二年

加納 良幸 文科二年

佐藤美恵子 理科一年

林 令子 文科一年

沖永良部島洞窟調査

おきのふらぶ

一九六八年七月二三日～八月四日

沖永良部島の洞窟について、洞窟探検技術の習得、向上をも目的として一般的調査を行なった。

編成

隊長 丸茂 一文 理科二年

副隊長 長谷川 上 商学部二年

隊員 宝田 俊幸 文科二年

菊池 章 商学部一年

高橋 省三 商学部一年

四国山村調査

一九六八年七月二五日～八月二二日

愛媛県下、美川村長崎部落について、地主小作関係、土地所有関係についての調査、並びに農村生計、離村についての意識調査を行なった。また、柳谷村の中久保洞、犬神洞、おす谷洞の洞内図を作製した。

編成

隊長 藤山正二郎 文科三年

副隊長 大橋 正敏 商学部三年

隊員 新井 静男 文科三年

小酒井由美 商学部二年

富宇賀ひろ子 文科二年

小森 亨二 商学部一年

訓練合宿

五月の尾瀬

宮崎捷 二

一九六二年五月二日（水）

二時上野駅のホームで丸山さん、横山さんに別れて列車は動き出す。上空は曇り、ネオンの色がいやににじんで見える。空気はかなり湿っている様だ。

五月三日（木）二時に沼田駅に到着。かなり涼しい。大清水着六時三五分。初夏とはいえ山の空気が寒さを感じさせる。休憩所で朝飯をひろげる。ここ大清水は二年前と殆んど変わっていない。初めて経験する雪山である。皆元氣に出発する。雲の間からかすかに陽がさし込む。雪が木の間に見え始め、次第に大きく目につき出す。うぐいすの音が遠くあるいは近く聞える沢の音にアクセントを添えている。茶色の湿った道は白い縞模様入りの道となる。雪どけ水は土をも溶かし我々の足を奪う。やがて我々の足跡は真白になり始める。一の瀬の吊橋は振れ、背のキスリングがそれに合わせる。雲量は一〇であるが薄日がさし、風力は三位であろうか小枝がゆれている。赤い布は我々を導き、シラカンバ、ダケカンバ、ヒノキが単調な雪の白さに趣を添え、幾つかのパーティーが抜き

つ抜かれつしている。三平峠を九時五五分通過。どこを向いても黒い土は見えない。峠から五分位歩いたろうか尾瀬沼が見え始め、かなりの下りとなる。背中の荷物と調子を合わせ、膝の下が雪の中へめり込む程度のラッセルもどきというところ。

尾瀬沼は白く静かだった。長蔵小屋へ向う途中、奥田がモモに痙攣をおこしたので、大貫、伊藤が残って他は進む。長蔵小屋一〇時三〇分。直ちに昼食をとる。風がつめたかったので夏季の休憩小屋に入りしのご。木造船などがおいてあった。寒さが身にしみる。夏の尾瀬と比べた時の雪の尾瀬の淋しさ厳しさが対照的である。長蔵小屋の北東部の低地にテントを張り我々の住み家とする。

五月四日（金）訓練第一日目である。今日の訓練は二隊に分れて行うことになる。テントを七時五分に出発。沼の上を沿岸線沿いに歩く。うす日がさしていたが次第に曇り、西方の山脈の上には黒い雲が漂っている。歩きながら夏の尾瀬の花の景色を想い浮かべる。風のせいか沼面の雪はうろこ状に波うっている。七時四五分。寺島・大野隊は治衛門沼方面へ、我が伊東・松橋隊は燧岳方面へと分れる。我々は燧岳の途中まで登り、ワカン、グリセード、滑落停止訓練をする。ブレードが鎖骨をうつ。コーチャーの声が響く。汗をかき一応の訓練を終え下山をする途中で大きなサルノコシカケを発見し、ピッケルでついたり山口がぶら下ったりしたが採集出来ず。一一時三五分我が隊は寺島隊と入れかわって治衛門沼へ向うべく沼尻を発つ。かなりの起伏を経て歩く。寺島隊の足跡が連なっている。一二時一三分治衛門沼に到着したが、沼畔のどこにも寺島隊の足跡みつからず誤

って確認したのだろう。とに角、目測とストックで大きさを概測した。沼面にはもち論雪があり凍っていた。

一三時沼を離れて途中長径五〇cm余りのサルノコシカケを採集し帰路をたどる。沼尻小屋の一寸手前で山口の帽子の紛失に気づき松橋と返す。小屋に沼田から清水を捜しに来たという人がいたので茶をすゝりながらストーヴにあたって喋った。かの二人の姿が見えないのでテントに向う。沼の雪上を歩きに歩く。腹はすくし足下の摩擦は少ないので大いに疲れる。燧岳に雲が下がり始めた。黒い雨の音が枕元に聞こえている。

五月五日（土）朝方もまだ雨が残っていた。今日は晴れそうにもない天気である。午後になってもやまないので日程を一日遅らすことに決定した。二時近くになって陽が雪の上を輝かせ始めた。テントのすぐ近くの斜面に雪洞を掘ってみようと一人で掘り始めた。初めは面白半分で行っていたが調子が出てきたので、炊当の間にも食事を終えてからも掘った。テントの中の薄暗さに比して懐電一本で極めて明るい。一種の不安と好奇心が混って面白い気分である。快晴の西空に宵の明星が一二等級位の明るさだ。だんだん暗さを増し星の数も増えてきた。極部ながらも春の星座の醍醐味を味わうことが出来る。北斗、うしかい、おとめ、しし、小熊の斗もはっきりと。ラジウスが天井を溶かし水滴をたらす。背中の下で水の音が聞える。寒さのためにたびたび目が覚める。

五月六日（日）炊当なので三時に起きた。かなりの寒さだ。昨夜の空の醍醐味は夏の星座へとバ

トン・タッチしている。白鳥、琴、ワシが天を覆い北斗は大きく西へ斜き、カシオペアが東から背のびをしている。銀河も新鮮な乳を流している。

六時三〇分麓岳、尾瀬ヶ原に向けて出発。出発時の気温はマイナス四度C。上を向いたらひとかけらの雲もない。沼面の雪は凍り非常に歩き良い。初夏の陽ざしが細かく照りはえ、空の青、木々の緑、雪の白がくっきりとした意識をもたせてくれ何とも言えない素晴らしさだ。

七時一〇分二隊に分れる。我が麓隊は再び攻撃開始。小さな起伏が木立の間をぬい次第に高まる。木立が両側に退きナデックボが開ける。かなりの傾斜だ。キック・ステップの足も疲れ、たち止る。降りる事は出来ない、登るのみだ。ピークの方の空は紺青と白ではり合って、なんのにじみもなく静まっている。着いてたち止った瞬間、素晴らしい眺めだ。日光白根を中において右に富士山左に男体。眼下には尾瀬沼が控えている。附近の斜面でグリセードの練習だ。すごいスピードが息をつまらせんばかりである。雪の裂け目に身体をもたせ、呼吸を整えてスタート。重心がはずれ、あつという間に目の前が雪しぶき。ピッケルにしがみついた姿を見ると、絶対に助からないようなかっこうをしている。風もなく小鳥の声が響くのみ。上空では種々の雲がヴェールをかけている。練習終えて最高峰を目指す。福島、群馬、栃木、新潟が白く見えた。背伸びしても日本海は見えなかった。西側のピークにも立ち寄る。アマツバメが舞っている。下山の際はナデックボを選ばず新道に行く。どんな小さな斜面でもグリセードがしたくなる。沼畔の湿原から双眼鏡で見返すと

シュプールが輝いている。テント着一四時三〇分。シュラフ・ザックをかわかしたり靴の手入れをする。顔面がヒリヒリと雪やけをしらせる。寒くて眠れぬ程である。下半身がくつと寒く夜明けが待ちどおしい限りである。

五月七日（月）四時三〇分全員起床。直ちに荷造りの準備をし、朝食を五時四〇分に済ませ、跡かたづけをする。上空の薄い雲が東へ流れ、小鳥が楽しそうに鳴き、沢の音も気持がよい。出発は七時五分、もと来た道に戻る。歩き出してから五分して氷のゆるい割れ目に落ち込んだ奥田が腰までつかってぶるぶる震えている。いやはや行きも帰りも災難である。

二〇分程して再び動き出す。ゆっくり止って燧岳を眺めるのもこれが最後だろう。なだらかな上りを進む。なかなか三平峠に出ない。おかしいと思ってストップし現在位置を調べたら峠をそれて相当西へ来すぎた様である。方向を変えて前進。下りに下って沢にぶつかり谷の斜面に添って登り、コースを正す。三平峠着九時三〇分。木の間から燧岳がうかがえる。

まさか三平峠の標識のてっぺんに腰掛けられるとは思わなかった。風力は一ぐらい、うすい雲がかかっている。八時四五分に三平峠をあとにし下り始める。かなりの気温の上昇で雪が湿っている。来る時の道とは様子が大きい変ってかなり雪が消え、雪溶けの水が道に添って流れている。ところどころに残雪に靴跡を残して下る。背の荷が重く肩に喰い入る。一の瀬の三平吊橋通過が一〇時二〇分。ノンストップで大清水へ向かう。平地に出ると余計にキスリングの重さがひびく。大き

なサルノコシカケのせいだ。もうふもとは初夏だ。道端に白、紫のルリイチゲソウが風にゆれてい
る。沢の音が何んともいえない心地よさだ。雪の道、土の道、石の道、水の道きわめて歩きにく
い。一時五分大清水に着く。休憩所でカンパンやピーナツ、ジュースを飲食した。その辺の湿地
帯に水芭蕉が可愛い姿を現わして我々を迎えてくれる。だが今日はもう送られる日である。小型ト
ラックが動き出し、尾瀬は我々の想い出となるべく遠ざかっていった。

— 横浜市立大学探査会会報第一四号（一九六三） —

乗鞍岳雪上合宿、事故報告

合 田 濤

昭和四二年三月二五日午後一時四〇分、乗鞍岳で探検部初めての滑落事故が起った。探検を標榜
し、*adventure* を求める以上、ある程度の危険はいたしかたのない事だが、探検活動は同時に、い
かに高度の技術と周到な準備によってそれを避けつつ目的を達成するかという点が重要なことにな
ってくるのである。果してそれが十分なされていたかという点、残念ながら「否」と答えざるを得
ない。*adventure* と事故防止という相反する命題を統合していくためにも、今回の事故の原因を分

析し、反省し、今後の活動の中で充分生かしてゆくことが、我々に現在最も必要なことであろう。

三月二十五日、冷泉小屋附近に幕営。四・三〇食当（松橋、新井、藤本）起床。一般六・〇〇起床。食事後出発用意。今日は全員で肩の小屋まで行き、状況を見て乗鞍岳にも登る予定。隊構成は松橋隆司（二六才、数学科四年）、リーダー合田濤（二二才、商学部三年）、サブリーダー安藤嵩（二〇才、商学部二年）、井埜邦明（二〇才、文理二年）、新井静男（一九才、文理一年）、藤本隆久（二一才、商学部一年）、大橋正敏（一九才、商学部一年）、藤山正二郎（一九才、文理一年）の八名。

出発八・五〇。このとき松橋より登山中のリーダーの権限を彼に委任することを申し出られ経験面でも強いため（生物科卒業後数学科に再入学し、探検部在籍八年、冬山歴八回）了承し、リーダー松橋、サブリーダー合田となる。トップ合田、安藤、新井、大橋、藤本、井埜、藤山、松橋の順でスタートする。ラッセル五分毎に交代し登る。位ヶ原まで粉雪の新雪が吹いたあとなので深い。ワカンをつけても膝まで埋まる。

位ヶ原九・三〇、一〇分休憩をとる。天気快晴、大陸からの高気圧にすっぱりつまれている。位ヶ原からコロナ観測所の所員の登ったスキ一の踏あとについて登る。南ア、中央ア、北ア、八ヶ岳、御岳などがしだいにせりあがってくる。雪はそれほどクラストしていない。ワカンでちょうど

よい程度だ。

一・三五、肩の小屋につく。入口は深い雪に閉ざされている。無人。ピッケルでかい出して入る。中は広く設備もよい。ラジュウスをたき、昼食の用意。外は日本海側からの風が吹き出しが強く粉雪が舞い上り、皮膚につきささるようだ。石でかまどを作り、メタを利用して火をおこす。

一二・三〇、小屋を出て乗鞍の北側のピークにとりつく。ワカンをはずし、足でけこみ、足場をきりながら登る。アイゼンはない。少しクラストしている。日本海側は後立山、白馬等がよく見えるが、西風が強く顔を向けられないほどだ。ところどころ吹きだまりがあり、そこは楽に越せる。トップはずっと松橋、足場をきりながら、かなりの速さである。ラストは合田。最初のピークを越えるとあとは楽である。夏とほとんど違わぬ速さで次のピークを越え、最高峰の剣ヶ峰につく。頂上付近は粉雪でほとんどクラストしていない。

一・二五、全員で頂上を踏みアメを食べ、歌をうたい、エールをやってから下に向かう。

一・三五、トップを行く松橋がまんなかのピークを越え、北側のピークとの鞍部で東側にまき、グリセードの練習用の斜面をさがそうとする。吹きだまりのためほとんどすべらず、シリセードをし、少しすべったところ急にアイスバーンとなりスピードがつき、ピッケルをとばされる。ラストを歩いていた合田が急いでその場にくると、はるか下の方を小さな黒っぽいものがすべりおちている。二番目を歩いていた安藤の説明によると、アイスバーンに出てから、ピッケル制動をやるうと

したが、はねられ、ピッケルがとんで、そのまま横すべりになってすべりおちて行き、一〇〇mくらい下で人間の体くらい大きな岩に横むきのままぶつかり、はねあげられて一〇mほどとび、一回転してさらにすべりおちていった。気絶したらしく、二〇〇mほどすべりおちて粉雪の吹だまりにぶつかり、さらにゴロゴロと三、四回、回転して止まって全く動かなくなった。皆んなで大声で呼んでみるが返事はなく、下に見える体も動かないので、皆を夏道までもどし、肩の小屋側において、巻いて滑落場所までゆくことにし、下り出す。途中、我々の叫ぶ声に片手をあげて答えたので、まだ生きていたことがわかり、急ぐ。一年生はショックで足もすくみがちで早く歩けない。二重遭難をおこしては困るので、後を安藤に頼み、慎重におりてくるよう云う。合田は一人で先にとばしておりだした。肩の小屋までおりて向いのコロナ観測所の人がスキーですべているのに会い、身元と状況を告げ、救助の援助を依頼し、その場に向った。

南側の斜面中腹中下に松橋氏は座りこんでいた。止まっていたところからいくらか歩いたらしいが、我々をみて力が抜けたのだろう。顔は鼻と口から血がふき出し、キルティングの衿や裾にべったりくっついてる。すでに雪がついて凍りついているものもあるが、血は止まらない。手、足は大丈夫らしいが、呼吸が苦しいらしく、短くはっはっとなえいでいる。息を吸い込む時に全身に力を入れないと吸えないようだ。頭部はひたいに一カ所深い切傷がある他は傷がない。首の骨も折れておらず、意識は正常らしいが、全身ガタガタ震わせてひどく寒そうである。

観測所の人にスキーで肩の小屋近くまで運んでもらう。コロナ観測所からスノーボードをおろそうとしたが、時間がかかりそうだ。ひどく寒さを訴えるのでヤッケを脱いで着せ、手袋をかえさせる。右手の手袋はぬげてなくなっており、小指が傷ついている。途中ピッケルごととばされたのだろう。

安藤達はやっと肩の小屋の南側の斜面に姿を見せた。待っているひまもない。荷物を持ってあとから来るよう大声で伝える。一刻を争う状況なのでスキーで位が原までおろしてもらうことにして、後は安藤にまかせて自分はスキーのあとを走ってついてゆく。背中におぶったまま、ボーゲンでおりてゆく。ワカンをつけていないため、膝の上までくる新雪の中を走っておりるのはかなり苦しい。

三・一〇、位ヶ原の尾根に出る。安藤があとからついてくる。さらに大橋、藤山と続く。井埜他二名は肩の小屋の荷物を取っておりてくるとのこと。位ヶ原荘に運び込み、フトンを敷いて寝かせ、毛布をかぶせる。呼吸は更に苦しそうで、短くあえいでいる。ショックで全身の震えが止まらない。スノーボードをあげに冷泉小屋まで行ってもらい、待つ間、全身を調べる。手足、背骨、首、頭は大丈夫だが、胸と腹、腰が不明。胸には打撲傷が内出血している。ろっ骨を打っていることは確実だ。肺か心臓にささっていれば助からない。京大の医学部の学生が泊っていたのでみてもらう。悲観的で下までもつかどうかかわらないとの事。小屋の主人が湯とガーゼを持ってきてくれ

たので頭の血をふく。顔ははれあがつて人相もわからぬほどである。特に上唇と右半面がひどい。顔は土色でほとんど死相とも見える。しかし、意識ははっきりしているらしく、ストーブのそばに椅子を並べてその上に自分をのせるなどと指示している。ポリタンに湯を入れて足元にいれる。

三・四〇、スノーボートがつき、井埜達も追いついたのでスノーボートにのせる。上向きにしてしっかり固定しなくてはいけないのだが、脇腹を打って苦しそうなので横向きにしてのせる。

三・四五、出発。スノーボートを引っぱった経験がないので、皆戸惑っている。前に一人ついてスピードを殺しつつ方向を取り、後に二人いてすべり出さないよう止め、両脇に一人ずつついて倒れないようにする。皆、相当ばてているらしく、新雪に足をとられ、ころがるようにしておりてゆく。スノーボートをひっくりかえしたら死んでしまうのではないかと気が気でない。ころぶ奴を怒鳴り、はげましながら下る。冷泉までの道がずいぶん遠い。沢沿いに下り、途中左にまいて冷泉の上に出る。トランシーバーで位ヶ原から連絡してあったので、小屋の主人と女性二人が外に出て心配そうに待っている。

四・三〇、冷泉につき、小屋にいれる。小屋で、主人の娘さんがクズ場をつくって松橋さんに飲ませてくれ、ソバを作って皆の腹ごしらえもする。まだ先が長いのでむりにもたべるように言う。ともすれば皆、自失してぼんやりしてしまうので、次々に仕事をいいつけてさせる。松橋さんは手足をマッサージし、靴下をかえ、テントから持ってきた藤本のシュラフを下に敷いて、すっぱり休

を包むようにする。松橋さんはかなり落ちついてき、少し食べたこともあって、震えはとまっている。意識もはっきりしている。下までもてばなんとか助かりそうに思えた。

キシリングのひも、ロープなどをスノーボードの両脇につけ、皆でひけるようにする。鈴蘭にトランシーバで医者と自動車の手配を頼むよう依頼し、スキーで下る女性二人にも連絡を依頼する。テントは翌日おろすことにして、懐電、ヘッドライト、セーター等をサブザックにつめ、用意する。小屋の主人にこちらの身元と名前を告げ、状況を話し、主人の住所、氏名をメモする。お茶、ソバ、応急手当での費用を払おうとするが、受け取ってくれない。詳しい事は明日上ってくる時に話すことにして、五・〇五、出発する。

皆、相当疲れているのがわかるが、ノンストップでとばす。はげしい起伏があり、急斜面のトラバース等の時は谷川へ落さないよう、腰まで雪に埋まってしまいがち支える。荒れた沢五・四五、黒い沢六・三〇。太陽はすっかり沈んでしまったが、雲がないため、月の光が雪に反射してかなり明るい。人が踏んだあとはクラストしており、スノーボードがガタガタゆれ、油断すると道はずしてしまう。そのくせ脇を通っているものは、新雪に体が沈んでしまう。三本橋七・〇五。松橋氏の息が短くきれ、息を吸い込むのに全身の力をふりしぼっているのがわかる。時々呼吸がきこえなくなり、どきっとしてのぞきこむ。そのたびに意外とはっきりした声で返事があり、安心する。

時々腰までつまった雪に疲れ果てつつぶしてしまふ者もある。そのたびにどなりつけ、気のゆるまぬようはげましあう。島居尾根七・三五、鈴蘭の自動車の光が見えた。町の灯がやけに美しい。最後の急な下りだ。すべり出したら今迄の苦勞も何もならぬと、方向づけをしている合田以外は全員後にふんばってスピードを殺すようにする。もう体力の限界にきているかんじだ。鈴蘭のスキーゲレンデの中腹に光が二つ見えた。迎えに来た人達だろう。ライトを点滅させて合図しているのでこちらにも点滅させて応える。ゲレンデの横の最初のテント場の横を通り、斜めにゲレンデを下る。滑落場所から一〇km強、六時間経っている。夏道と交叉している所で、迎えの人達と会う。五、六人いる。消防団の人達のような。鍋底と呼ばれる急なゲレンデを手伝ってもらっておろすと下に自動車が待っていた。

合田、安藤は病院まで付き添ってゆくこととし、井埜にあとを頼む。後部シートに松橋氏を寝かせ、七・四五出発。大野川部落手前で下から登ってきた医者と警官に会う。上からの連絡では、もうだめだというようなことを云ったらしく、あとで聞いたところによると、警官は死体検票書まで持ってきていたそう。肋骨が折れている事だけはわかったが、命に別状ないということで一安心する。医者は島々整形外科病院の中山氏。胸部に包帯をまいて車にのせ、島々まで運ぶ。

九・一五、病院着。すぐレントゲンをとり調べる。左肺がつぶれてにぎりこぶしほどの大きさしかなく、血がとまってほとんど機能はとまっている。医学的というと無気肺だ。左肋骨が四本折れ

ている。右も一本折れている。頭の切り傷、全身打撲などがあるが、これは大したことはない。左腕はヒビがはいっていた。警官に調書をとられ、状況、地図、隊員構成などを知らせる。計画書を作成しなかったことが悔やまれる。警察から学校および本人の家に連絡してくれるそうだが、こちらからも松橋氏宅、学生課長宅へ電話を入れる。こうして一応の応急処置がすみ、その夜は交替で病人につきそった。

——乗鞍岳雪上合宿報告書（一九六七）——

探査会、探検部の歩み

探査会創立、三宅・知床探査と天山計画

丸 山 晃

横浜市立大学探査会は一九五八年二月生物科の学生が母体になって設立された。新制大学発足後六年、大学も、またさまざまな学生活動も建設期にあった。当時、すでに南極観測、ヒマラヤおよび中央アジア踏査などが行われていたが、前々年に京大探検部が誕生したばかりで、探査会設立は戦後の学生探査活動の黎明期にあった。

設立総会は二月二四日に行われ、会員一名で発足した。“山を科学的にとらえる”という目標をもつこの集団は、登山家(?)とナチュラリストをはり合せたようで、その当初の性格は歴然としない。こうした状態のなかで、陸水学派(?)ともいうべきグループが主位を占めて、その年の探査は三宅島の大路、新渚の湖沼調査という偏った方向に動いていくのである。この調査は(一)両池の物理、化学的性質(二)両池のフロラとファウナの二つに向けられ、八月五日間にわたって行われた。その結果は三宅島の湖沼の研究という一連の報告集に集録されている。

この会が最初に手がけた三宅島の湖沼調査は、この会の性格形成のための重要な踏台となった。三宅後、探査対象であった「山」は「未開発、未知の地域」と書き変えられ、科学的に高度のレベルを保持するという性格づけが行われた。この性格はのちに知床探査という未踏地域へふみ込むことによって、さらに強められた。この会のもう一つの特色、即ち会員構成を広く人文、自然科学の分野を含む教職員、卒業生および学生とする設立当初の意図は、三宅、知床をへて除々に達成されるかにみえたが、知床後の天山計画の中止を転期として、事実上崩壊してしまった。

知床探査は二つの目標――(一)知床岬から羅臼岳に至る知床半島主脈の走破と (二)主脈および海岸部の下等植物のフロラ調査――をもって行われた。知床踏査は原始林、飲料水の供給および力の大群に如何に対処するかが成否の鍵であった。この探査は総員三四名が投入され、一九五九年七月一二日間にわたって行われた。収集資料は、動植物標本三〇〇余点。他に三六五映画などに記録された。収集資料のうち、現在までに藻類の一部および地衣類について報告されている。

知床探査は探査会と山岳部とそのOBの共同体制のもとで行われた。山岳部側は夏の合宿の候補地として知床をとりあげていた。知床は探査会の有力候補地でもあった。探査会の実動人員、知床の手ごわさからいって合同体制を作ることとは必至のことであった。この合同体制は二転、三転した。当初の学生を中心とする体制から、OB体制へ、さらに新聞報道されてから、山岳部のOBの討論をへてOBが副隊長として参画し、この後医学部OBが医療担当として加わった。

知床探査は終始騒然としたうちに行われた。設立二年目のこの会にとって、その影響は天山計画という異常な形となつてのちに現われてくるのである。主要新聞の探査計画についての報道。踏破記録は連日報道され、踏査後は探査同行記が連載され、その他いくつかの雑誌に掲載された。こうした状態の中で、つぎの探査を前にして、探査会の再編が行われ、知床体制がそのまま探査会にもちこまれるのである。

天山探査計画は (一) 未踏峰群の縦走 (二) 内陸鹹湖の調査という二つを目標としていた。その頃はやりの、未踏峰登頂と学術調査のだけあわせ方式で大規模な計画であつた。この大計画は「天山の山々」という講演会と奇妙な形の天山計画の発表という公開集会を最後に終止する。天山計画はいくつかの困難な問題をかかえていた。(一) 莫大な費用を要する計画推進に関する問題、(二) 中国入国のためのアプローチに関する問題、(三) 先発隊派遣の可否の問題、これらの問題が未解決のまま、この計画は放棄することになる。

三宅・知床・天山と二年余のうちに、この会の探査対象と計画の規模が急速に拡大されていった。この急速な拡大は会員の過激なセレクトと異質のものの包含を伴つた。しかも知床探査という緊張した状態で、その包含、統合が行われた。その表面的な統合は、天山という長期的展望を要する大計画に対するには致命的欠陥となつた。天山計画の座折から十年を経て、多様化と質的深化のいくつかの萌芽を内蔵するようになった。この会発展の軸はそこにこそ求められるのであろう。

学生部にたいするひとつの意見

伊 東 芦 一

一、学生部はこうして生まれた

学生部の名がはじめてきかれたのは一昨年（一九六〇年）夏の神津島調査の直前であったように記憶している。

そのころの探査会は知床半島調査の成功に気をよくして天山山系などという龐大な目標をとりあげてはみたものの、会員のあいだに会の実力や社会情勢等にたいする正しい認識がめざめて、計画の破綻がしだいに明らかになりかけていたところであつたようにおもふ。

私が入会したのはその年の一月のことであり、それ以前のことは知らないが、当時、天山への *Expedition* が、一年後とか二年後とかいう話をきいておどろき、ちょっとみたところこの会の子ではとてもそんなに急にはゆけそうもないがまあ五年もたてばゆけるようになるかもしれないなどとかんがえてロシア語などを習いはじめたりしたものだった。

計画の困難性があきらかになるとともに会内部における *Ideology* の対立も激化しかけ、その年

の秋の除名問題の芽もこのころからそろそろきざしかけていたような気がする。

当時の上層部はただいたずらに会の危機をさげび、学生会員にたいし積極的に行動をもって技術的精神的指導を行うことを忘れ、ただ言葉をもてあそぶことによってのみ探査会精神と称するものをおしつけようとやっきになっていたように感ぜられた。

たとえば、四月に行われた奥日光訓練には学生以外には福島助教授が三日間参加してくださったのみであつたし、六月におこなわれるはずの富士訓練は中止された。夏季の神津島調査には学生以外の参加者は皆無であつた。

このような事情で神津島調査が学生部の名のもとにおこなわれたことがきっかけとなって学生部の基礎がための機運がおこり、

“時間の制限される教職員、OBと比較的時間の自由な学生との間には必然的に活動の面で開きがでてくる。そこで学生達の積極的な活動をのばしてゆくために……”

というような理由で十一月の総会で学生部の設立がみとめられた。しかし実際は、上層部が積極的に指導しない以上われわれは自主的に探検技術を習得せねばならないということ。また一人前の研究者でない学生は探査会内部で特異的な位置にあり、その活動の重点もどちらかといえば訓練活動のほうにおかれるべきであり、上層部がおしつける厳格な研究者の態度はとれないし、またとる必要もないというような理由、さらに現実からうきあがつたような海外探査をめぐるゴタゴタにま

きこまれることはもうごめんだというような消極的、逃避的な気分が潜在していたことも否定できない。

さてここであらためて現在の学生部の姿をみると、どうもはじめの理想とはほど遠い。それほど積極的に訓練をおこなっていないし、学生部精神ともいうべき *Backbone* もいまだ確立していないようにみえる。しかし探査会の弱体化のために主力が学生部にうつってしまったような感がなくもない。このへんでわれわれは学生部のありかたについてもいういちど真剣に考えてみるべきではないだろうか。

二、われわれは学生部でなにを学ぶべきか

探査会に学生部の部員として入会したものはみな探検というものに對してある程度の興味をもっているはずである。そして当然会の探検活動に参加することになるであろう。実際の探検活動を通して学生部の部員が学ぶること、そして学ぶべきことは第一に科学の方法論のひとつとして探検が持つ役割を正しく認識することである。科学に於て探検のしめる役割は科学の進歩にともなうてますます小さくなってゆくし、科学のもとめる真理が探検などという便宜的手段ではもはやえられなくなるような段階は時々刻々と近づいているように感ぜられる。しかし探検が真理を求めるための手段としてある役割をもっているかぎり、また過去においてもいた以上われわれは探検に對

する正しい認識と理解をうるための努力を放棄すべきではない。

さて、探検というものに対する一応の認識をえた学生部の部員の中からは将来探検や学術調査が方法論の中で重要な位置を占めている自然科学の分野にすもうとするものもあるであろうし、また、そうでないものもあるう。あるいは、かつてはそのような分野にすもうと思っていたが、いまはその方針がかわったというものもあるかもしれない。

しかし、少なくとも自然科学の一分野をころざそうとするものにとつては、自然といかに対決するかということが重要な課題であるはずだ。自然の中にある真理を科学的方法によって追求するにはつねにきびしい自然との対決をさけるわけにはゆかず、自然はそれに立ちむかう我々に一切の妥協を許そうとはしない。そのようなときに、自分の知力と体力とで自然に取組んでゆこうとする気概^①をもって、未知を打ち越えようとする旺盛なる精神をいだいて自然に立ちむかおうとする人物を養成する^②。ために、同時に自然の力を正しく認識し、謙虚な心と細心の注意とをもって自然に接する態度をやしなうために、探検活動が最も適当な方法のひとつであることにだれしも異論はないであろう。自然科学が自然をその対象としている限り、この自然に対する態度はそのあらゆる分野において、それがたとえ分子や原子の *Level* を対象とするものであろうと、共通なものであるはずだ。

さらに、科学の研究が進めば進むほど専門の路地は枝わかれして奥ふかくなる。それは近年の科

学の進展、たとえば原子力の問題をみてわかることであり、おおくのすぐれた専門学者の協同による総合研究が尊重されるわけあいである^⑨。こうしたときに *Teamwork* というものがいかに重要なものであるかはいうまでもないことである。いかに優秀な頭脳を数多く集めたところで *Teamwork* が十分でなかったら真の意味での協同研究、総合研究はなりたない。この *Teamwork* の重要性は探検にもあてはまるばかりでなく、二〇世紀後半の探検は *Teamwork* なくしてはなりたないといってもいいすぎではあるまい。したがってわれわれは探検を通して *Teamwork* とは何か、さらにそれが自然と対決するときにあたっていかに重要なものであるかを身をもって知り、それを真理探究の一方法として役立てることができよう。

これまで私がのべてきたことは自然科学にかぎらず、科学が真理の探究をころざすかぎりあらゆる科学の分野にあてはまることであるかもしれないし、さらに人生を生きるうえであらゆる人間にあてはまることではなからうか。だから将来いかなる方面へ自分の人生を向けようとする人も、その学生時代をたとえその一部であろうとも、探査会ですごし探検を通して真理の探求がいかに困難なものであり、いかなる態度をもって自然と対決すべきかを身をもって学ぶことは決して無駄ではないとおもわれる。

だから学生時代を終えたときに将来自分のすすもうとする方向が探検や学術調査などというものと縁がなくなってしまうと、探査会にはいっていることがそれほど意味をもたなくなってしまう

人は、より能率的に頭腦と力をつかうために、自由に探査会からはなれていくべきだとおもうし、探査会もそういう人に対しては学生時代にその人にあたえたものを（それはごくわずかなものかもしれない）餞別として祝福のことばをもっておくり出してやるのが当然だとおもう。

もし学生部の部員で将来もずっと探検や學術調査が重要な方法のひとつである学問の分野にすむものがいたら、それこそほんとうによろこばしいことで、それから大いに探査会で活躍してもらいたい。たとえ一年にひとり、いや二、三年にひとりでもそういう人が出てくれば、いまはなさけないほど弱体な探査会も一〇年後ぐらいには真の総合的探検を海外でおこなえるような実力をそなえるようになるだろう。

三、学生部における Expedition のあり方

探査会の性格上われわれは前章にのべたことを Expedition を通してまなぶことになる。

Expedition というものが “文明人が生活できるような設備のないところへいって、そこで文明人の生活様式をくずさずに生活すること”^②だとすればわれわれはそれを科学的研究の一手段としてうけとらねばならない。なぜならそれが探査会の主旨にそったことだからであり学生部についてもそれは例外ではあり得ない。手段であるというからには、その目的は一段と高い Level にあるわけで、われわれは手段を完璧なものにしないかぎり完全に目的をとげることとはできない。した

がって *Expedition* の技術を *master* することはわれわれがまず第一になすべきことである。未知の地域で生活することができずして、どうして科学的研究ができるか。

さらにわれわれは科学的方法をもって自然に対決する態度をまねばならないのであるから、科学的目的をもった国内探査を数多くおこなうことが重要である。そしてその探査の目的地は、科学的に未知なるものをもち、われわれの *Expedition* の技術がそこで生活するばかりでなく科学的調査をおこなうにも十分であり、科学的調査をおこなうにあたってわれわれが自然を見る目をやしなうことをたすけ、調査にあたつての正しい態度をおしえる指導者が同行することがぜひとも必要であらう。

目的地までかけてはみたものの、それだけで力をつかいはたしてしまい、科学的調査などともおこなう余裕がないなどということではこまるし、調査のまねごとはおこなったものの指導者が同行しなかったために調査方法に誤解があり *Data* がつかいものにはならなかったなどというのこまる。やはり調査をおこなう以上はわれわれの能力やつかった力に相当するだけの成果にちかづくことに努力すべきであらう。

しかし学生は一人前の研究者とちがつて自分のすすむべき道もいまだ決定していないものが多いし、したがって知識や技術の上でも全く不十分であるのが当然だからその科学的成果には大きなものを期待できない。だが何等かの科学的目的をもつことによってわれわれは自然と対決し、自然の

中から真理をひきだすにはいかにすべきかを、またそれがいかに困難なことであるかをまなぶことは十分にできようし、たとえわれわれのあげうる学問上の成果は小さくとも、世話になった地元の人々をいくらかでも啓蒙することがあったとすればそれもまたわれわれのささやかなる成果の一つであろう。

またわれわれが一般社会から援助をうけて探査をおこなうことがあれば、うけただけの援助は成果としてふたたび社会に還元することを目標として調査をおこなうべきで、それに自信がなければ援助などはうけるべきではない。“われわれは学生であり、学生が *Expedition* を通して精神的に成長することは社会にとってもまたプラスである”などという独善的、特権階級的な考え方は世間では通用しないということはわれわれが昨年夏の北上川調査でいやというほど経験したはずである。とにかく学生部が養成機関として *Expedition* の技術と自然科学の方法論に対する正しい認識をもつ正会員を捜査会に供給できるならば学生部の目的は十分に達成せられているものとかんがえた

四、おわりに

以上のべた意見はあくまでも私個人のものであり、考え方のあやまりもあろうし、事実をあやまって解釈している部分もあろうかとおもう。私はこれを絶対的に正しい意見だなどとは毛頭かんが

えていない。もしもあやまりを指摘し私に納得のいくように説明してくれる方があれば私はいつでも考えを修正してゆきたいとおもう。その意味で私はこの意見にたいする会員各位からの反響を期待している。

①加納一郎山、雪、探検（河出書房）一九五五。

②今西錦司ヒマラヤを語る（白水社）一九五四。

——横浜市立大学探査会会報 第二二号（一九六二）——

部名変更当時について

松 本 芳 樹

市大探査会がその名称を現在の探検部と改名したのは昭和三九年（一九六四年）五月の事である。もっとも厳密に言うならば、探査会が探検部になったのではなくて、それまで現役の学生で組織されていた探査会学生部を探検部と改名したのであり、O・Bとその他の組織体であった探査会は従来と何ら変更されていないと言われるべきである。現在の探検部はその当時までは正式には、探査会学生部の名称で市大に於ける一サークルに属していたわけである。

当然の事ながら、この部名変更問題については、我々の活動が過去幾年かのフィールド活動の蓄積の上に成り立っている事もあり、そう単純に変えられるべき事ではなく、当時もよく部内で議論

の対象にされていたものであった。そもそもこの改名は従来探査会の持つ名が単純な意味において、その活動内容を外部から理解し難いという点もあったが、内部においては、それほど積極的改名の必要にせまられていた事は無かったようであった。当時の外的問題としては、学生部が市大内のクラブでありながら学外組織である探査会に属している点にあり、毎年予算の上に夏季探査の度、文化部連合会を始めとして学内、学外より援助を保っていた我々に対する他団体との対面上的の問題にあったように理解している。我々の活動に要した費用から見ても、その額は別としても、毎年のごとく援助を受けてきた学生部にとって、又その活動範囲が海外を始め比較的遠い地点に向けられ始めていた学生部にとって、自分自身を学問における一組織としてながめてみる時期にも来ていたようであった。一方、内的には当時ともすれば混合体し勝ちであった探査会と探査会学生部との間に形式的な形で、はっきりした一線を画しておこうとする意識の存在も部内にあったように感じる。このことは、はからずも人的にも時間的にも充分なる活動のとだえ勝ちであった探査会の強化という問題に継がり現在に到っているようである。当時新たに入学してきた者にとっては、探査会という一種のアクティブなニュアンスも加味され、比較的容易に受け入れられたようであったが、無事探査会での生活を通してきたO・B、上級生等にとっては、当然の事とはいえ、単純な割り切り方もできず、改名後もかなりの間ピンとこない様子であった。しかし不思議なもので、当初耳にそぐわなかった探検部も時の経過と共に、抵抗感もなくなり、現在横浜市大探検部として日々エネ

ルギッシュな活動に励んでいるようである。もっともその名称は変わろうと、その底に流れる精神的支柱は探査会時代と何ら変わる事なく、今も科学性と積極性を持ったバイオニヤワークに意欲を燃やしているようである。

改名当時は探査会設立以来の活動の中から生まれてきた新たな各種の問題が表面に浮かび上ってきており、その解決をせまられていた時期でもあった。これら新しい諸問題は、そのほとんどが、探査会設立当初と、我々をとりまく客観的情勢の変化に起因するものであり、そこから又新たな問題が波及し生じたものであった。その一つが各種の学問分野を専攻する数多くの部員をかゝえてきた事であった。従来の学生部の活動の母体は、生物学専攻生であり、彼らのフィールドワークがそのまゝ学生部の活動となったのであるが、探査会の成長と共に、次第に学生部は生物学専攻生のみならず、化学、数学、文学、地理、経済、医学等各部門を専攻する数多くの部員をようし、彼らが新たに自分の専攻分野、興味を持つ部門を部内において、いかにして位置づけていくかに苦慮する問題をかゝえていたのである。生物面における方法論、技術論については、市大の強み、伝統とさえいわれた長年の蓄積があり、その上に立って自己の分野を押し進めていく事ができたものゝ、他の者にとっては、探査計画の中で具体的にどの様な意識、態度をもって参加するかゞ大きい問題であった、しかも数的な面で、探査会の活動主体が生物科生に変わり、それら新たな分野にとり組まんとする者に移っていく過程の時期でもあった。その様な中で、過去常に中心テーマとなった生

物のみならず、その目を民俗学、社会学、地理学等あらゆる中広い面に向け始めようとしたのである。三九年（一九六四年）九月の小俣、京丸集落調査は、その手始めとして、静岡県の山深い部落に入り、集落、民俗調査の方法論を得んと試みたものであり、翌夏の北海道雄武での調査へと足を伸ばしていったのである。その後我々にとって初めての海外探査となったパラワン島では、バタク民族に関する衣類、食生活、家屋、焼畑、さらには家族組織、宗教信仰等多くの民族学的資料を持帰るに到ったのである。この様な情況の変化は、探検における地味な調査活動の主要性を部全体に再認識させる動きを示したものの、一方では学生の学問的力量の限界に悩む現象と、その調査至上主義的傾向に探検部の危機感を叫ぶという一連の問題提起を生んだのであった。

すなわち部内において、あまりに調査活動、調査内容に窮する余り、探検の持つ本質的な面、アドベンチャーへの姿勢を失ないつつあるという事であった。すでに国内において、地理的に未知な地域は皆無に等しい状態でもあり、前述のようにあらゆる意味で未知な所、未知な分野を探索対象とする姿勢が探検の持つイメージをすでに失なっている事に対するジレンマでもあった。本質的に探検の持つ冒険性と学問性との間で、探検論、探検思想論について日々よく話し合ったものである。

改名後始めての長期探査となった男女群島はこの問題に正面から取り組まんとする意図を持って練られた計画であった。第一次ではアドベンチャーを、翌夏の第二次では、我々の力量一杯の力で

もって、学問的に島と取り組まんと努力したものであった。部員構成の多様化は調査内容と共に、その行動の中でも新たな動きを示すようになった。従来の活動形式が夏の長期探査を主眼として一年の計画をすべて夏に集中する傾向が強かったようであるが、多種の興味を持った多くの部員をかゝえた当時の部内は、各種の計画が練られ、海外、国内をとわず、小パーティを組み、年中各地へ出掛けていくようになり、クラブの新たな広い力を蓄える絶好の機会にもなった。夏季の合宿において分散が見られたのは、三九年ウトネ、地内、江川水系探査の頃からであり、部の集中力の缺如をあやぶむ声とは別に、多くの部員が山、川、島に各自の情熱を注ぎ探査会以来蓄積してきた探検技術の向上と共に、新たな技術的分野への開拓を計らんとしたものであった。

改名が内的必要性に強くせまられた為でなかったことは、すでに述べた所であるが、我々が、我々過去十年の歴史を、探査会時代と、今後も変化をもつてあろうが、探検部時代とに分け、当時をその両者の接点としてみる事は、結果的に見て、間違つた無理なとらえ方ではない様に思える。その最も顕著な変化として、前述のごとく、生物学的フィールドワークと、その為の地味な学問的姿勢を前者とするならば、多くの専攻分野、各種の行動への興味を示した雑多な行為の中に後者をつかみとる事が出来るからである。たゞしこの事は、探査会時代が冒険性を否定していたと言うのは絶対にはないのであり、むしろ探査会初期にみられる、自然に対する激しい闘志、探検を志す者への必然的要望でもあった山への接近、又その技術は、現在とは比較にならぬ高度なものを保持し

ていたのであり、現在の探検部、その当時の技術を追い越すより、その退歩に苦慮しているようである。

さらにはまた、後者をながめる時、未知に対する数多くの分野からの接近、数多くの興味の行動への転化の中には、観光趣味的計画を時折見ないわけにはいかぬのである。ブームとさえ言われる今日の探検の中で、その最たるものは、いうまでもなく、米、ソ二大国による宇宙へのアプローチであり、国家の名誉と、人類のはてしない夢をかけて、巨大なエネルギーが注ぎ込まれているのである。我国の南極への取り組みも、この様な範疇の中でとらえる事が出来る。この様な周囲の中で、その活動母体であるクラブ名の変更はあれ我々が、過去十年間、そして今後幾年も一貫して探検への情熱を燃やさんとするのは、我々が真に探検のもつ、ロマンチズムに魅せられているからであり、それにアプローチする若人の連帯感が、人格形成の上でも、又無視出来ぬ動力を含んでいるからであろう。

探査会―探検部運動史の検討と考察

峰 岸 常 之

一、

探査会設立が一九五八年であるから一〇年になる。その間探査会学生部が発足し、それはまた探検部に移行したのであるが、探査会時代とその後とは質的に変化がみられるのではなからうか。

今、我々がこの問題を考えるとき、それは現在の活動から意識的に反省されるべきであり、されねばならない。この問題は、意識そのものによってしか捉えられないのであり、かつ、現実の感性レベルから出発するかぎり、意義をもつから、科学的なものでなければならぬ。

(註) 「感性はあらゆる科学の基礎でなければならない。ただ科学が感性的な意識と感性的な欲望との二重の姿態で、感性から出発する限り――それは現実的な科学である」(『経済学』哲学草稿)

感性的問題からするならば、探検に探検らしさが無いという反省がある。ここに探検の全面的反省につながる要素があると思われる。即ち、冒険的要素(行動に於ける)喪失が問題なのである。それは調査的要素の増大と無縁ではないだろう(この追求は後に、二以後で行なう)。重要なこと

は、精神的なものと行動的なものと二重の規定において、探検が、「未知のフィールドの解明」という抽象的かつあいまいな規定を意義としているかぎり、探検らしきは復活することはあるまい。それは「未知のフィールド」という言葉の中に、すでに失われた（実体をもたない）「夢と冒険の血わき肉おどる探検」という地理上白地図地域の踏査時代のなごりをもっているからに他ならない。他方、このような要素を調査という意義におきかえて（即ち調査主義）「未知」という言葉を濁しても大きく変わることはない。否、むしろ冒険的要素の後退であることもしばしばある。調査そのもの（というよりむしろその行為）の意義をも一度捉えなおす必要がある。それは決して科学的探検調査の否定を意味することではなく、「未知のフィールドの解明」という規定に対する問題提起であり、科学的探検との関係の追求に他ならない。このために用意されたのが、この史的検討に他ならない。即ち、その方法は、過去に行なわれた活動に於いて、調査隊の行動がそのまま科学精神となって現象し、そこには隊員数の多少によらず、隊員は各専門分科内容の一員となるとして、隊員の現地における活動はそれが部の日常活動の凝縮であると考え、しかも、隊の目的によってその性格が一樣でないことは捨象し、現地で隊の活動は「計画書」及び「報告書」に對象化されることを認め、その内容を検討することである。このようにして、「探査会―探検部運動史」の検討は「計画書」及び「報告書」の検討として捉えられるのである。

二、資料の客観化

資料——学術調査「計画書」「報告書」の客観化は、次の数量化を各項に行なうこととする。

- (A) 調査計画項目数の推移（計画書）
- (B) 調査計画内容数の推移（"）
- (C) 報告結果項目数の推移（一般報告書）
- (D) 報告結果内容数の推移（"）
- (E) 計画項目の報告された割合——(A)と(C)から
- (F) 調査結果報告の学術レベルの推移

〔意義〕

(A)(B)は調査隊編成当時の組織程度であり、(E)はきちんと報告されたか、(C)(D)(E)は成功の程度である。

〔数量化〕

(A)(C)の項目数については、自然—人文—社会—医学の各系列に於いて次のような分類を行ない、各項目を一単位とする。

(一) 自然科学……生物、化学（物理）、地学（自然地理学）

(一) 人文科学……地理(人文地理)、民俗、歴史

(二) 社会科学……政治、経済(産業)、社会

(三) 医学……医学全般

(B)(D)の内容数については、上記の(一)(二)(三)によるパーセント表示。(E)は(C)/(A)によるパーセント表示。(F)は最も数量化が困難であるが、これについては得点制を採用する。

(イ) 一般報告書はすべて一点を与える。

(ロ) 純学術報告書はすべて一点を与える。

(ハ) 学生以外の学内・学外有識者参加に対しては一点を加算する。

(ニ) 大学論叢・学生論集・研究会報告・卒論提出分につき、各一点を加算する。

〔対象〕

学術調査内容をもつ探査の資料に限定する。次のようにナンバー付けをした。

一九五八(昭三三) 三宅島湖沼調査

NO・1

一九五九(昭三四) 知床半島調査

NO・2

一九六〇(昭三五) 神津島調査

NO・3

一九六一(昭三六) 北上川水系調査

NO・4

那須鏡沼調査

NO・5

一九六二（昭三七）

大雪山扇ヶ原調査

NO・6

一九六三（昭三八）

鵜渡根、地内島調査

NO・7

江川水系調査

NO・8

一九六四（昭三九）

第一次男女群島調査

NO・9

朝日連峰北部調査

NO・10

小俣京丸集落調査

NO・11

一九六五（昭四〇）

第二次男女群島調査

NO・12

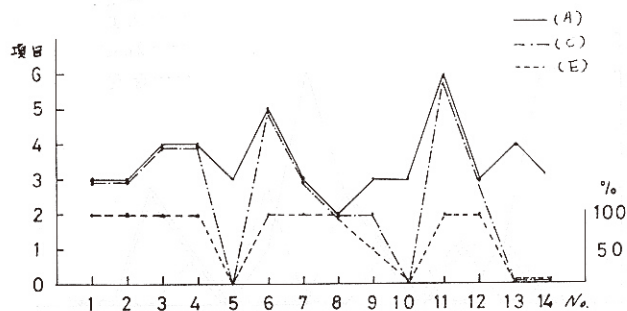
北海道開拓農民調査

NO・13

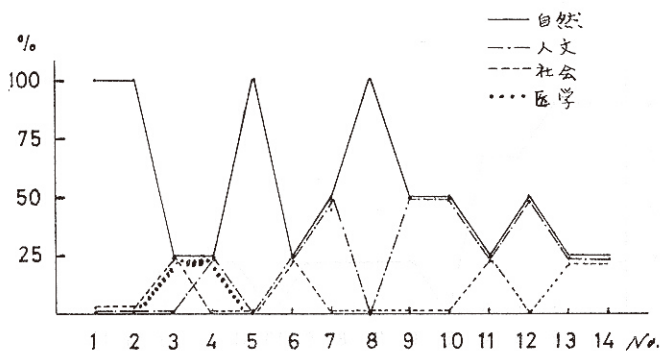
第一次フィリピン・パラワン島調査

NO・14

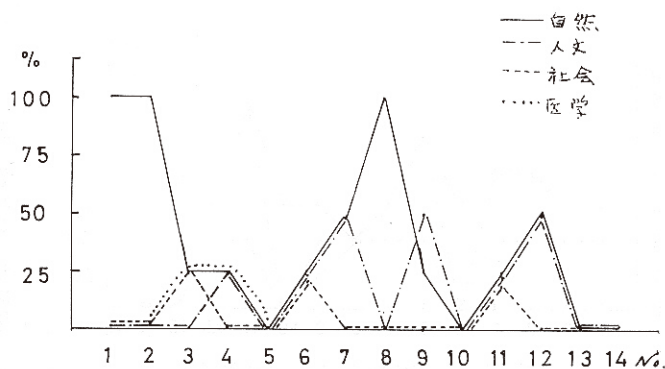
三、資料の分析結果（データ）の図



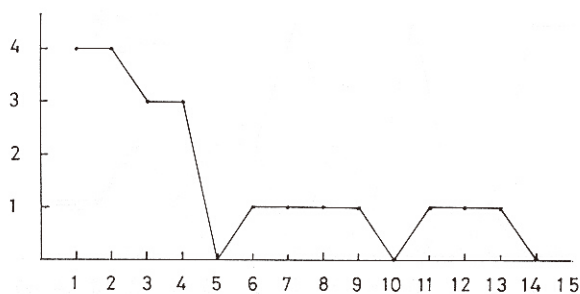
(図一) (A)(C)(E)についての推移グラフ



(図二) ⑧調査計画内容数のグラフ



(図-3) ④報告結果内容数の推移グラフ



(図-4) (F)学術レベルの推移グラフ

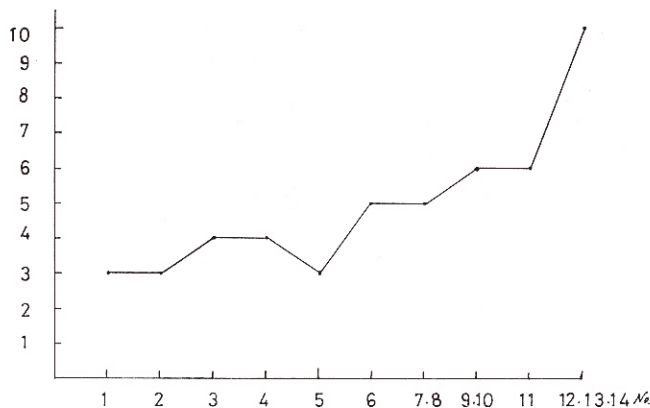
四、資料の分析結果に関する考察

〔図―1〕の考察

〔図―1〕をみると、後にゆくほど計画項目の報告（達成）された割合率が完璧（一〇〇％）ではない。この割合率は大変ゆるい基準をしているのであって、例えば少しでも一般報告書に記されていれば報告されたとみなしているのであって、当然一〇〇％にゆかねばならないはずのものであるから、この意味で探検部時代（NO・9）は徹底した調査が達成されていないと云える。

次に計画項目数についてみると、このグラフでは同時期に行なわれ総部員が二〜三隊に分かれた調査をしているので、よってNO・7とNO・8、NO・9とNO・10、NO・12とNO・14をひとつに集計した項目数のグラフを（図―5）に記す。

これより計画項目は着実に伸びているが、この理由は



（図―5） 計画項目数の変化のグラフ

二つある。

(一) 部員数（会員数）の増大

(二) 内容数（系列数）の増大

〔図―2と図―3の考察〕

上述の(二)内容数の増大を支持する根拠は(図―2)に示すように、NO・1～8を通じて優位であった自然科学系列調査は、NO・9以後人文科学系列調査と一線になっており同程度に調査されたということ、社会科学系列調査も盛んになって来たことを示し、これは明らかに、部員の学部構成の反映に他ならない。この推移とともに、自然科学系列調査の報告に不徹底さがみられ、人文―社会科学系列調査も一様でないことが(図―3)よりわかる。

〔図―4の考察〕

NO・1～NO・2では有識者参加のために学術報告レベルの高いのが当然であるが、学生主体となっているNO・3～NO・4ではこの経験をよく継承し、やはり学術レベルは相当高い。探査会学生部後期からは一般報告書だけの点数であって調査不充分とも云える。

以上のことからして、人文―社会科学系列調査の増大と学術レベルの低下とは比例の関係にあるが（単純な正比例でないが）、この理由は、

(一) 自然科学系列調査は探査会前期のような継承性を失ない不徹底になった。

(二) 人文・社会科学系列調査は導入されてゆく過程にあるので調査結果が徹底していない——導入すべき方法論（自然科学におけるそれとなく）が見い出されていない。

(三) 全般に（図―5）に見られる項目数の増大は、（図―4）に見られるように実質を伴わず、「この限りでは」、「発展」と云えるものではない。

（註） 探検部報_底15と異なった記述はわかりやすくしたのであることをつけ加えておく。

五、史的検討今後の発展のために

三、の結果に至る過程で捨象を行なったので、こうした残った問題を考えてゆくことにする。

二、の資料の客観化に対して、⑨の「調査結果報告の学術レベル」の数量化が正しく「レベル」を反映しているかどうかは問題となるところである。数量化は報告書が書かれるためには必要な勉強と調査もしっかりやらなければならないと今まで部員が考えていた限りでは妥当なものである。

しかし、何よりもこの⑩項では報告書の「質」を全て外的な数量でしか表現していないし、例えば「一般報告書に全て一点を与える」としているが、このことは第二次男女群島調査で生物班の相当な報告を行なっているが、こうしたことは無視している（第二次男女群島調査報告書「男女群島」昭四一・一・六「生物調査隊報告書篇」参照）。第一次のみで充分知りえないときはこのように二次へと続けることが必要である。しかし、第一次においても学術的未知のアプローチを目的と

して行ったことを忘れてはならないだろう。即ち、フィールドを離れて探検はありえない。

第一次フィリピン・パラワン島調査の旅行手続きのミスによる目的が達成されなかった経験を生かすことによって、第二次調査がなされ、本稿がデーターに含めなかった探検部報NO・15発行後に、報告書ができた（パラワン島調査報告〔第一号〕参照）。未知の分野への追求に隊メンバーが勉強したからこそによって相当の学術レベルになったのであって、いつでもそうであったように、隊員の知ろうとするものへの勉強が必要であり、個別的フィールドを離すことなく、そのフィールドを追求してゆく姿勢が大切である。

以上のようないくつかの質的高まりをみせる探検が行なわれたことを確認するとともに、男女群島、パラワン島をはじめとして、一面では、行きたいフィールドを地図上でさがし（それが離島であり、外国であるから、という理由で）、過去に調べられていること、調べられていないことをさがすという形をとって行なわれてゆく。それは、過去に殆んど分っている場合には、もはや二番煎じの調査になってしまえばかりではなく、むしろ、探検における最も重要な精神的規定の後退である。「調査」をするためにフィールドに出かけるのではなく、フィールドを知るために出かけるはずである。何を知りたいのかという目的の欠如は、単に主体性の欠如のみならず、既存の意義・目的・方法・過程の受け入れを意味する。基本的には、知りたいことが分ったその時から、その目的に関する探検の意義はなくなる（これは人跡未踏時代からの精神）ことを失なうこともある。そこ

で過去に殆んどの既製科学で分っているフィールドに対して、新しい角度で未知を「意識的」に求めようとした探検の可能性を追求したのが日高地方新冠川流域調査で試みられた（「新冠川流域調査隊一般報告書」参照）。この調査の重要性は、既存の意義・目的・方法・過程に対する意識が異なっているということであり、その結果よりもむしろ、この過程が重要なのであると云える。

探検らしさの復活は、このような「個別的な」「その」フィールドの、「何を」「どのようにして」知りたいのかという極めて当然のことから出発して、その意義・目的・方法・過程に対する意識的かつ個別的な追求を通して、すでに出来上がった未知そのものが興味の対象となるのではなく、それを創る過程として、新しい科学の形成にこそ意義を認めることに他ならない。例えば地底・海底探査に於いて、確かに安家川流域調査でもクライミング技術と潜水技術があれば未踏に達したと考えられる（特に水渡洞「安家川調査隊一般報告」装備報告参照）が、かかる技術が日常的な場合それは検討の対象となり、海底に於いても小型水中居住家屋、小型潜水艦、また大気圏に於ける小型気球の開発等は、既製のものの変革をめざすかぎりにおいて、秀れて、科学的探検そのものに他ならない。このような既存の意義・目的・方法・過程の検討によって、「地理上白地凶地域」の踏査時代の終末という一定の限界と探検らしさの復活という問題に対して、「感性的矛盾から科学へ」という「意識的探検観」を構成し、かつ、構成するものとして探検を捉えなおすことであり、それは「感性」から出発することを提唱したのであり、このようなものと、「可能性としての冒

「訓練としての冒険」との関係は、相互に意識的であるかぎり、「受動性」から「能動性」への転化を意味するものとして、「冒険」を位置づけることになる。即ち、冒険を行なうことは、「感性」を高め、「つくる科学」において、「調査主義の科学」を質的に克服することである。その結果の多少によらず、調査項目達成の程度によらず、意義・目的の明確性すらなしに旅行的センスで行なわれたかつての受動的探検――全ての理由を究極的に「人間」という抽象的存在の「原始的本能」におきかかるものが「珍しいもの」「奇異なもの」を知ろうとした――こそが、探検を不毛にさえしたと云える。フェニキアからスペインへ、ヘディンからスタンレー、アムンゼン、白瀬からバード、ヒラリーからガガーリンまでを無原則的に結合し、フィールドも、単に、未開から未開へ、未踏から未踏へと追ってゆく。だから、なぜに「未開」へゆかねばならないのか、なぜに探検が帝国主義侵略に常用されたか、なぜに商業――独占資本の援助に結合させてゆくののか、に対する一片の反省すら出てこないばかりでなく、このことを、ことさら意識的に避けようとさえするのである。

本稿で追求した、未知への欲求は、感性にあるのであって、本能にあるわけではない。本能は、人が生きてゆくかぎり続いてゆくわけであるから、このような一般的抽象性の中に規定することは無意味である。規定すべきは、現実の問題だけである。それ故に、意義・目的・方法・過程に検討を必要とする。例えば、月世界探検は、もはや、コロンプスの頃とは大きな質的变化をみなければ

ならないのである。

(註) 「科学」は「数量化」「合理化」「機械化」を単に意味しているのでは当然ない。化学は、精神的生産部門に属し、肉体的及び生命的生産部門に関係しており、物事を先験性なしに、追求し、矛盾を解明することである。

(註) 本稿は問題について行動とともに探検の実践的役割をなうものとする。観念について強調しているが、実践によって行きつく所がかつての行動と同じことをするのかどうかはたいして問題ではない。行動が別な視点——感性から科学へ——から捉えなおされることを強調しているのである。

探 検 部 と 私

吉 野 孝 子

学生時代(こういう言葉を使わなければならない程、それは遠いものになってしまったようです。)私は、探検部における紅一点の存在を誇っていました。ある時期には、私以外の女性も現われては消えていきましたから、正確ではありませんが、探検部で初めての女子卒業生という名誉ある称もいただきました。今では、八景の部室(あの狭く、きたなくそしてなつかしい場所)を訪れると、女子学生に会うことも出来るし、送られてくる計画書に誇らしげに名を連ねている彼女等の名前の数々。私の在学中には考えられなかったことです。

松橋さんの新人生観迎会での部紹介の「探査会に女はいらない。」という名セリフは残念ながら聞きそびれてしまいました。当時の探査会とは、女子学生の近付くところではなく、まして入部するようなところでもなかったのです。山岳部・ワンゲルとも異なった何かが、あの狭い部屋に巣くっているように思われたのです。

その得体の知れない何かや、映画で見た早大の探検部のイメージなどが入部を決意したのでしたが、正直のところ「大雪山湖沼調査」にひかれたのでした。小学校、中学校時代に登った大雪山へ行きたい気持ちが強かったのです。

「どうして女なのに探検部にいるの？」と質問を受けたことも何度かあります。その度に、「女だからこそ、卒業してしまったらこういうことができるチャンスは失くなってしまいうような気がするので、今こうして探検部にいるの。」と、答えていました。

事実、卒業し、就職してしまったら、長い休みも思うようにとることができず、山行きはせいぜい長くて二、三泊。日帰りハイキング程度にしなければならなくなりました。

そのわずかの山も、結婚してしまうと、又出かけることも少なくなってしまうました。土曜日も夕方五時までの勤務では、家事がどうしても休日にも集中することが多く、お天気の良い日には、出歩くことよりも、「さあーお布団干さなくちゃ。」と考えてしまうこのごろです。

私の嫁入り道具には三面鏡がない代りに、シュラフ、キスリングといった登山道具一式が入って

いますし、お祝いにもらったコッヘルもあります。決して山歩きをあきらめた訳ではないのです。

何度かの合宿・調査のなかで特筆すべきは、大雪山湖沼調査と朝日連峰調査での思い出です。

大雪山（扇ヶ原、高原温泉）は、いまは観光開発がかなり進んでいるようですが、当時は、各人が熊よけの呼笛を首からぶらさげて（矢島さんだけは、トーフ屋のラッパを吹いていました。）隊長（寺島さん）の「決して単独行動をしないこと。」という注意の下で二〇日近くの調査活動を行ないました。

数多くの湖沼はそれぞれ表情が違い、周囲のお花畑も個性に富んでいました。

航空写真と磁石をたよりに薙こぎする地理班の後については新しい湖沼を発見（？）して歩きまわした。大貫さんが「こっちの方角だよ」といって、先に立ってけもの道らしい処を抜けて行くと、そこに写真と同じ格好をした沼があるのでした。

ある日扇ヶ原の上にある高根ヶ原へ植物採集に行きました。河合さんが同行してくれました。急なガレ場を登って行くと、白雲岳への縦走路に出ます。その縦走路の真中でコマクサをみつけている。裏大雪にあたるそこは、そんなのどかな登山道なのです。しばらく進んだ後、這松の下で咲いているリンドウを採集しようと下を向いて根堀を動かしていると、となりの河合さんが「熊だ」というので顔を上げたら、恐い顔をして「逃げろー」といって走り出しました。私は熊を見た訳でな

いので、その恐さがピンとこないもので、そう疾走する訳にもいかない。すると「もっと早く走れよ」と、河合さんからおこられる仕末。でも山に入る前に聞いていた、大雪の熊はソーセージが好きとか、リュックごと取られたが何日かして縦走路に「財布」と「定期券」が落ちていたという話が頭の中をめぐり廻り、昼食のフランスパンはさっき食べてしまったから、何にも熊に渡すものがないし……などと考えていました。

しばらく走ってから、「もういいよ」というので落着いて、河合さんの渡してくれた双眼鏡からのぞくと、向こうの這松をゆらせて黒いものが消えていきました。河合さんの目の前を大きなお腹がたぶたぶして横切っていたそうです。

やがて、テントを張った沼が見えるガケの上（アラモの砦と呼んでいました。）に出てこのことを湖沼調査をしている本隊に連絡することにしましたが定められた交信時間が長く待遠しく思われました。

帰路は今の縦走路は危険だと河合さんが主張するので、テントの真上へ雪溪を降りていくことにしました。その雪溪は階段状になっていて必死の思いで降りたものです。胴乱は河合さんが背中にしょってくれました。

テントを熊に襲われてバラバラになって逃げた、別岳の高校生パーティのニュースが直前に伝わっていたから、河合さんも真剣だったのだと思います。

朝日連峰での調査では、八久和川を遡行する本隊に対して、我々三人（菅田、高松両君と私）は、尾根道を踏破し合流する予定でした。八久和川は梅雨明け時期によくある大雨で増水していました。発電所の人々は、水量がかなり増加していることを指摘してくれました。でも我々は予定を一日遅らせるだけで出発し、小雨の降る中を発電所のモーターボートで送ってもらいました。上陸地点には大きなフキやヤグルマギクがびっしり生えていて、バッタ、バッタと鎌で薙ぎ払いながら前進しました。昔の踏み分け道を見つけることができたなら、尾根への道は簡単になるのですが、最初の日はとうとう見つけることができませんでした。それからの二日間は何となくの連続でした。前にある枝を手で払うと、こんどは背中の荷物にひっかかるといった具合に遅々として進みません。一番厄介なのは、越えるには高すぎるし、くぐるのには低すぎる数です。今まで来た距離を考え、これからの道のりを考えると、到底予定通り合流日にはまにあいそうもありません。そこで踏破をあきらめて下山し、登山道を予定の天狗小屋まで行くことにし、ダムへ通じる沢を降り始めました。調子よく降りていき、ダムの水面が見える地点まで行きましたが、その先に流が何段も続いていて、その先は前進不能となってしまいました。とうとうその日はその河原にテントを張り、翌日、尾根を越えてダムの上流の川を目指しました。あまり頼りにならない地図を頼りに登っては降り、登っては降り、と尾根をまいて歩きました。

ラッキーだったことに我々が降りた地点はダム上流の洲に掛かった橋の上でした。その上流でも下流でも深い水ががけの直下にせまっっていて、ほっとするより、ぞっとしました。丁度釣に來合せていた宮林署の人々の好意により、トラック、バスを乗りついで夕方には朝日連峰の裾を廻って登山口に着くことができました。

家に帰ってみると腕はそこらじゅうアザだらけでした。藪こぎしていて知らないうちに枝でたたいて内出血をしていたのです。

その時は、あんな山を歩けたのだから、登山道のある山ならどんな山でも登れるのじゃないか、などといった不敵な思いも抱いたものでした。

探検部は、私に、登山、ボートでの川下り、無人島調査といった、形に現われた思い出の豊かさだけでなく、あの部屋に巣くっている何かが、私にも浸みこんでとりつかれてしまったようでした。

探 検

探 検 の 意 義

河 合 武 臣

市大探査会に入会して一年、経験を通じて探検の意義を自分なりに考えてみたいと思う。

我々が探検やそれに伴う科学調査を行う場合、対象となるのは裸の自然である。このいつわりのない自然に直面からぶつかり、我々のエネルギーを発散させ、そこでわれわれが何を得ることが出来るか、と云うことが探検する上に考えねばならないことである。現代現世に於て、我々は科学を触媒として、自然を支配することによってやっきになっている。そして、より多く自然を支配出来ることが時代の進歩といっても過言ではあるまい。だから我々は美しく、また、きびしくもある自然の中に探検を行うことによって入りこみ、その新しい真理を少しでも進んで得ようとするのである。さらに、自然認識は探検という実践を通じて得られるものであり、人間にとって非常に貴重なものと強調したい。我々はたとえ探検を通じてではなくとも自然のさなかに入りこむと確かにある種の深い感銘と勇氣を得ることはできる。しかし、科学する精神をもって、さらに、綿密なる計画をもつ

て深く自然を認識しながら自然にとびこむ場合とでは、自然から受ける感銘と勇氣は單にロマンチストが感じるものとは、おのずから異なるはずである。それは事実と信念にみちた感銘と勇氣であるから、私は社会の發展が自然の、より多くの支配であるなら探検が自然の認識の手段であり、その認識は自然支配の土台となり得るものだと思ふ。このように探検を考えると探検は單なる冒險主義とはいえないだろう。そして市大探査会が調査目的で探検を行うことは、自然認識を助長するという点で大いに意義があるし、微力なりとも社会發展に役立つ事は否定出来ない事実だろう。また自然を多少なりとも理解できた人間が社会を見つめる場合、何かしら自分の生活の中に役立つものをその認識から引き出せば幸いである。以上探検の意義を一面的にとらえてかいてしまったが、経験不足なのでどうにもならない。これに対する諸氏の意見と批判を期待します。

——横浜市立大学探査会会報第12号、(一九六二)——

マクマード基地で考えたこと

福 島 博

マクマードには八〇〇人の人々が生活をしていた。この中一五〇人が観測関係の人で、残りの六五〇人が輸送を受け持っている海軍の軍人であった。だから観測隊員一人につき軍人四人余りの比

率になっていた。この観測隊員の中でも設営する人が入っているので科学者對それを助ける人との比はこの比率よりはるかに大きくなる筈で、この人数をみただけでも極地の観測は如何に困難で、又如何に金がかかるかが想像できる。

七〇種もある建物はすべて一六度C位に暖房されており、この建物群の中にある生物学研究所の設備は日本の地方大学の生物学教室よりはるかに整っていた。そして要所には避難用の小屋がありそこにはストーヴや燃料、食料が貯蔵されている。調査はヘリコプターで行く。といった、もてる国の観測隊のオブザーバーの一員としてマクマードで一ヶ月程生活する機会を持つことができた。

このマクマードへ来て、再開されようとしている日本の南極地域観測は、どのような方法で再開すべきか、という点についていろいろと考えさせられた。しかしこの事は今回の論外なのでそれにはふれないが、探査会と関係ある事で一番深く感激させられたのは、スコット・ハットを訪れた時であった。

ロス島にエバンスという岬がある、この小屋を一九一一年に出発して、南極点に向ったスコットらは、悪戦苦闘の末、一九二二年一月一八日に南極点に到達したが、そこですでにアムンゼンらの一行の使用したテントを見つけ、極点一番乗りの栄誉をうることができず、焦躁の帰途、食料デポのすぐ近くで一九二二年三月一九日頃全員遭難してしまつた。スコットは日記に「食料デポから一マイル以内の地にいるがブリザードのために四日もテントの外に出ることができない。オートミー

ル他一日分の食料と二日分の燃料をもっているが、すでに衰弱はなはだしく、この日記を記すのも苦しい」と記している。そのような苦しい旅でさえ、三〇数Kgの岩石の標本をもっていたという。

「スコット最後の探検」という著書をもても、スコットがいかに科学調査を重要視していたかが想像出来るが、三〇数Kgの岩石標本こそがスコットの探検の考え方を如実に物語っているものである。

このような探検の考え方はスコットに限った事でなく、この頃南極にくりだした諸外国の隊長は多かれ少なかれこのスコット魂に燃えていたと考えられる。その証拠として、それらの探検隊は沢山の資料を持ち帰り調査書のぼう大な事でもわかる。

日本の探検はどうだろうか。勿論例外はあるが、たんに「日の丸」をその地に立てることのみを目的としていると考えたくなるような探検隊が多かった。科学調査を目的としたチームが何ひとつそれらしい資料を持って帰らなかった例すらある。科学調査うんぬんはパスポートを得るための単なるお題目にすぎなかったのだ。

五〇数年前に建てられて現在も殆んどいたんでいないスコット・ハットに入った私は全く驚いた。食料は棚に、コーヒークップは柱の釘にきちんとかけてあり、机の上には新聞が置いてあったが小屋の中はきれいに整頓されていて、今にもスコットらが戻ってきそうな気がした。二つあるストーブだけが赤さびて時の流れを物語っているだけであった。

この小屋の一角が実験室になっていてその机の上に試験管やビーカーやアルコールランプがあり、棚には薬品が並んでおり、科学調査を重要視した精神が小屋にも満ちていた。

このスコット精神は我々の探査会精神として大いに学ばねばならない。

——横浜市立大学探査会会報第一四号（一九六三）——

大学探検部のあり方

大 野 正 夫

入試勉強から開放されて、「大学に入ったんだ!!」という感激にひたっている頃、私はある先輩から夏に人跡未踏の地「知床」へ学術調査隊が出るという話を聞いた。何か新しいことをしたいと思っていた時であったので、「これは面白い」と飛びこんだ。それが探査会であった。その時は、私は「探検」とか「学術調査」ということには気をかけていなかった。しかし、知床から帰ってきて探査会にはいろいろな問題が持ちあがった。

その頃、京都大学に探検部があったが、教職員、卒業生、現役学生がいっしょになり学術調査を目的としたサークルはどこにもなく、私達は組織作りと会の性格をどのようにするか連日のように議論した。当時は「探検」というよりも学術調査をする会という色彩が強く、その方面の業績は、

研究論文として発表されていた。

その後、学生主体の探査会学生部、さらに探検部となっても根底には、その色彩が強く流れてきた。なかでもパラワンの調査は、学生が企画し実行したものとして誇ってよいものと思う。しかしこの一〇年間各大学に探検部ができ、つぎつぎと海外へ出てゆくのをみると、すばらしいことだと思ふと同時に、なんとなく危険を感じる。それは私自身が大学を卒業すると、実際に山や野を歩く機会が少なくなり、探検の味を忘れつつあるためかもしれない。このような時に記念号の編集者の一人として、過去のデータや他大学の探検部の動きに注意を払うようになると、大学探検部のありかたについて、一言云いのこしておきたくなった。

大学の探検部といっても、その規模や色彩は大学によって非常に違うようである。総合大学で大学院のあるところは、探検部の活動分野である民族学、人類学、地質学、生物学や農学方面を専門としている先生や大学院生がいるので、直接、間接に指導を受けられ、将来そのような方面へ進もうという学生が部員として多いので、非常に活動しやすいと思う。反面、小さい大学では、調査をうたう探検部としては、活動範囲がせめられ、海外探検も困難なところが多い。そこで探検部をつくったものの、何をやるかという段階で行きづまってしまっている。このようなことは過去に私達が味わい、現役の部員の口からも聞くので、たぶん一般的なことはなからうか。

探検部が日本の大学サークルとして、一応定着した今日、大学探検部のあり方について、徹底的

に討論する時期だろう。未知をもとめて、なんとなく秘境の地へ行く初期の探検部時代は終ったような気がする。未地の地へ行くのだから体力的にも技術的にも、かなりの訓練が必要である。そのためには、探検部員は総合的な実力を養える山の技術は必要であり、山岳部員としても通用する体力と技術を探検部員は持たねばならないと思う。

また、新聞や雑誌での記事で、「……学術調査隊」の中に探検部員がまざっていたり、部が主体であるが、専門の先生が入っているのをみかける。このような学術調査をうたう場合には学問的業績を要求されると思う。しかし、大学生である場合には、その程度が問題になる。横浜市立大学探検会、探検部についても、初期の頃は、学術調査をカンバンにして活動してきたが、いつのまにか「学術」の字が消えていた。大学生には学問的業績が上げられないとは云わない。努力によって立派に第一線の業績をあげる人もいると思う。しかし多くの部員はついてゆけず、とくに工学部や商学部などの学生は、この点で悩む場合が多いのではなからうか。また学術調査をカンバンにするため、先生の援助を受け共同行動をとるような形になり、大学サークルとしての独自性を失ない、専門家や将来その方面に進もうという学生の予備機関にすぎないようになりかねない。

そこで探検部の基本的なありかたは、「なんでもみてやろう」ということではどうであらうか。物をみるだけでは観光旅行でも良いわけだが、探検とは未知の対象物をフィールドでさぐることである。生物や民族に興味をもつ学生は、いろいろ資料をあさって学生でできる範囲で、対象物を

み、しらべる。また自分の専門とは離れた分野に興味をもつのも良い。あるいは、それこそ「なんでもみてやろう精神」を養うのもよい。探検に必要な器具や技術を調べるのも必要だろう。もちろん、全く学術調査を否定するわけではない。このような考え方から生れた報告が、あるいは一線の学術論文になればすばらしいことである。この意味で日本の探検部員のパイオニアである本田勝一氏の書いた「カナダエスキモー」や最近のベトナム報告は現役の学生に示唆を与えていると思う。一見、探検とは関係ないようなベトナム報告も、現代社会の探検なのである。

さらに、各大学に探検部ができてくると、山、河、洞穴とも候補地がなくなり、同じ地に、二、三の大学がハチアワセすることも生じてくる。そこでこの辺で、各大学で特色のあるテーマを長期にわたって計画するような傾向をもっても良いのではなからうか。私達の部でも、初期の頃、山岳湖沼調査を系統的にやろうという方針がでた。これは、湖沼の水深、大きさ、水質等は、特に専門的な知識や技術はいらぬ。しかも山の中にあるため、山岳技術の訓練になるので訓練活動の一つのテーマに良いし、地図に点としてあるような湖をこつこつと調べてゆくことは日本の湖沼学のためにも貴重な資料にもなるのではないかという考えであった。このような計画は出入のはげしい大学サークルとしては困難なこともかもしれぬが、各大学に「あの大学は〇〇をやっている」という特長があったら、大学探検部に厚味がでてくるだろう。

人生のうちでもっとも希望にみちた青春時代に探検をこころざすことはどんなにすばらしいこと

だろう。そしてある人は探検精神をもってエンジニアになり、あるいは民族学、人類や生物学の研究者が生れれば、底辺の広い探検精神が日本に定着するだろう。

自然保護と探査会

寺 島 和 光

一、はじめに

「自然保護」ということは、文明が進み、地球上の人口が増加するにつれて、ますます重大な問題となってきた。特に狭い国土に一億近い人間がひしめいている我国では、人口問題等と並んで非常に重要な問題であるにもかゝらず、全く軽視されているように思われるのは、はなはだいかななことである。

さて自然保護の問題は、直接人間の利益に関係することが多いため、その解釈の仕方はその人その人の立場によってかなり異なるようである。そこで、私は私なりの考えでこの問題を取り上げてみようと思う。

自然保護とは、「自然を人間生活に最も役だつ状態にしておくこと」とといえる。自然とは、生

物は勿論、空気、水、土をも含めた広い意味であり、人間とは、現在生きている我々のみならず、将来この世に生まれてくる我々の子孫すべてについて言っているのである。

二、自然保護は何故必要か

言うまでもなく、自然保護が必要なことは明らかなわけだが、さらに次の二つに分けて説明してみよう。

(一) 先ず、「自然の中のすべてのものは自然の他のものに影響を与えずに、あるいは他のものからの影響をうけずには決して存在しえない。そこで、日本では至る所で見かけるブナのはえた山を例にとつて説明してみる。

この山も大昔からブナが生えていたわけではなく、はじめは苔のような下等植物から始まり、草、さらにカシワやユリノキがこれにとつてかわり、それらも結局最後には芽生えが日光の少ない陰地でも育つブナに山を占領されてしまったものと想像される。

ブナは、人類に対しては、材木として役立つ所大であるわけだが、一方では絶えずキクイムシ等の昆虫に生命をおびやかされている。逆にキクイムシはキツツキによつて捕食され、キツツキはタカなどのえじきになる。そこには、ブナ——キクイムシ——キツツキ——タカという一連の生態系がなりたつていて、特別の事情のない限りお互のバランスが保たれている筈である。

ところが、例えばハンターの為にキツツキの数が減少した場合を考えると、当然キクイムシの数は増加し、この為ブナの木は食い荒され、ひどい時には何ヘクターもの山が禿山になることさえある。そうなるに材木の損失だけでなく、それまでは網の目のように張りめぐされていた根や腐蝕土により、降った雨や雪を天然の貯水池としてたくわえ、平地に住む者に雨のない時にもきれいな水を絶えず供給してくれた同じ山が、今度は一旦大雨が降れば、それを少しも溜めることなく土砂と共に一時にどっと流して下流で洪水をおこしたりするのである。

次に、何かの事情でキツツキの数がふえた場合を考えると、少しぐらいなら問題はないが、増加が甚だしい時には、キクイムシはどんどん食べられ、しまいにはキツツキのエサはとも少なくなり、翌年生まれたヒナは飢えの為に生き残るものが激減する。従ってその年はキクイムシが急増するのでやはりブナ林は破壊されていく。

以上はキツツキについてだけ述べたのだが、同じことはキクイムシやタカについても言えるし、実際の自然界は勿論こんな単純な関係でなりたっているのではなくて、ある生物の個体数を左右する因子はそれこそ無数にあるといつてよい。

要するに、自然界は互に極めて複雑にからみあっていて、しかもたえず平衡状態を保っている。そしてこのバランスをくずさないようにすることこそ、人間生活を豊かにする上に最も必要なことであり、即ち自然保護なのである。万物の霊長たる人間がこのバランスを保つ上の殺生与奪の権利

をもっていることはいうまでもないことである。その文明力をもってすれば広いブナ林を丸裸にするぐらいは全く容易なことであろう。

しかしうかつに自然に手を加えるならば、たちまち自然界のバランスがくずれて、その結果は自然から手ひどいしっぺがえしをくわされることは必至である。

具体的な例をあげると、足尾銅山の周囲の山は精練所からの煙害で広大な面積にかけて樹木が枯れてしまい、その為雨が降ると多量の土砂が流出し、川は洪水をおこしたりしてすっかり変ってしまったこと。マツクイムシやクリタマバチの大発生で沢山の木が枯れてしまった話、無理な宅地造成の為台風シーズンになるとがけくずれの騒ぎをくりかえしている横浜や横須賀、魚をとり過ぎて沿岸漁業がなりたなくなつて困っている漁師等きりが無い。

松尾鉱山と北上川の関係も似た例だろう。

こゝで注意したいのは、自然保護とは何も現在ある状態には絶対に手を加えてはいけないというのではなく、現在が *best* でなければ勿論手を加えることによって *best* にもっていくべきである。例えば丹沢のシカは現在禁猟になっているが、もし数があまりに増加し、植物への害が甚だしくなればバランスのとれた数になるまで減らすべきであろう。

又自然保護は広い、世界的視野から眺めるべきで、日本国内の問題だからといって決して外国と無関係ではありえない。ソ連との間に行なわれているサケ、マス漁獲高の交渉や南氷洋の捕鯨の間

題等、自国の利益ばかり主張しないで、もっと自然保護の考えをとり入れて大所高所から検討してもらいたいものである。あるいは又、ツバメのような渡り鳥は冬期東南アジアで過すのだから、毎年のツバメの個体数を左右する地域は日本を含めた非常に広い範囲にわたるわけで、この保護については、これらすべての国々の協力が必要なのである。

(二) 自然保護のもう一つ重要なことは、「自然は人類の共有財産である」ということである。丹沢を例にとろう。こゝはまだ人手の加わっていない自然がかなり豊富に残っている。それは学術的には生態学その他の研究の材料としてだけでなく、観光の及び文化財的な価値もある。

近年登山人口は急増しているが、それは、高度に機械化された文明生活において精神的な慰安を与えてくれる場を求めんがために人々は山へ行く為であろう。そして登る山が自然の本来の姿をとめていればいる程人々は心に安らぎを覚えるのは当然で、もし蛭ヶ岳のてっぺんまでバス道路が走り、周囲の木は切り倒され、観光ホテルや展望台が建ったりしていたのでは、おそらくがっかりするだろう。こういうことが方々で行なわれると、将来我々の子孫は本当の自然を見ることができなくなり、従って学術的研究の場も精神的な憩の場もなくなるおそれが生じてくる。古い時代の建造物や絵画等に対しては、学術的文化財のないし観光の価値を認めている日本人が、全く同じ価値を持つ「自然」に対しては冷淡であるのはどういふわけだろうか。

日本は狭い山国で、しかも地下資源の乏しい国ではあるが、四季変転きわまりない美しい自然

は世界にも広く喧伝されている所であり、多くの外人観光客が訪れるのもいわゆる名所旧跡と共にこの「自然」を見んが為であって、すっかり人工化された自然というものは、厚化粧をした女のようなものではなはだ魅力が無いという事は殆んどの外人が指摘している点である。外人観光客からの収入がばかにならない我国では切実な問題である。

要するに言いたいことは、自然に手を加える時は非常に慎重でなければならぬということ、一旦破壊された自然をもとに戻すのは殆んど不可能に近いことなのである。

三、自然保護に対する認識

探査会の目的が自然、それも未知の自然を対象にしている以上、会員は当然自然保護については十分認識し理解しておかねばならない。自然保護は、いわば一種の生態学であり社会科学であり、応用の学問であるわけだから、生物学は勿論地理学や経済学を学ぶ者も知らないではすまされないし、又知っているのと会の活動においてだけでなく、いろいろな機会に大役役に立つものである。

さらに欲を言えば、会員は自然保護については指導的な立場にたてるようになりたいものである。それは、我々は過去の何回かの活動を通じて、原始の自然がいかに少ないか、又貴重なものかということを一一般の人達よりはずっと多く見てきているからである。

五、自然保護と探査会の活動

会の活動の中で、自然保護ということを含く考える必要のない場合、いくらでも考慮する場合及びこれを目的とする場合の三通りが考えられる。例えば「大雪山扇ヶ原の大学沼のプランクトン」と「自然保護」はほとんど無関係のようだが、「北上川水系のプランクトン」と「自然保護」ということになる。と漁業等の点から見れば関係は濃厚である。さらに一歩進んで、「ある地域の自然保護」という目的の調査を本会が行なうことも可能であろう。

又一見自然保護とは無関係に見える事柄もさらに検討してみると、ある点では深い関係を見い出すこともあり得る。大学沼のプランクトンでさえ何年か後にはどういうことで、実際に役立つようになるかは誰も予測できない。

さて探査会の本来の目的からすると、日本国内で活動できるような地域はもうほとんどなくなつたように思われる。というのも活動が生物学、それも分類学の段階を抜けきつていないからではないか。そこで、自然保護ということを活動の目標に強くうちだせばまだけっこうやることがあると思ふ。

例えば丹沢山塊に関しての分類学的地理学的な調査はほとんどしつくされているが、丹沢の自然保護ということになると、登山道路や山小屋はこれ以上増やした方がよいのか悪いのか、あるいは

虫害による樹木の立枯れが目立つが、どういう昆虫によるものが多いのか、それを防ぐにはどうすればよいのか、あるいはノネズミ、ノウサギ、シカが最近増えて植害が甚だしいとなれば、実情はどうなのか、又予防はどうすべきか。あるいは広い面積の木を一度に切り倒した為相模川や酒匂川のプランクトン、ひいては魚類がどんな影響をうけているのか等。これらはあまり良い例ではないが、いろいろの角度から研究すればもっと立派な活動目標ができると思う。

次に海外に目を向けてみよう。

広大で未知の自然にあふれている海外の諸地域でさえも現代文明の破壊の手は急速にのびて、やがては今の日本のように悪い方向に変化してしまうのもそう遠い将来のことではあるまい。こういう視点から本会が自然保護を目的にするか、ないしはこれを背景にもった所の調査を行なうことは大変有意義なことだと思われる。あるいは先進国の自然保護の実態を実際に見てくることによってそれを日本及びその他の国々に応用することも必要である。これまで海外に行った我国の調査隊は自然保護ということにはあまり関心がなかったようで、ガラパゴス島調査のごときは自然保護に反した行動をとった人もあると聞くが、まことに残念なことである。

具体的にどういう活動をしたらよいかという案は持ちあわせていないが、海外遠征の場合なら材料には事欠かぬのではなからうか。

六、おわりに

自然保護の問題は、私には荷が重すぎて、これだけのまずい文を作るのに随分苦勞をした。かunjんの「活動の中にいかにかすべきか」については正直な所具体的な良い案は何もない。皆さんと共に研究してみたいと思っている。いずれにしろ自然保護は結局「自然への愛情」につながるものだから探査会員である以上決して忘れてはならない問題がある。

この文については皆さんがめいめい異なった意見や批判をお持ちのこと、思う。又それを期待するものである。

——横浜市立大学探査会会報第一四号（一九六三）——

構造主義的「方法」についての一考察

合 田 濤

はじめに

私は探検を通して、それを手段として、何かやりたいと思っていました。日常的な自己の世界を離れ、全く異った環境に身を置くことにより、自己の世界を拡大、ないし、深化してゆく……そんな

なことに漠とした夢を抱いていました。しかし、手段はあっても、はっきりした方向はみつからず、試行錯誤、暗中模索の状態が長く続きました。同じような悩みを持っているかも知れない人達の為に、私の前に、ようやくうつすらと影を見せはじめたものの輪郭なりとも、スケッチしてみようというのが本稿の目的です。

問題の所在

日本での構造主義の扱いは、一方では、マルクス主義、実存主義に替る、新しい哲学への誕生であるかのように言われ、他方では、人間不在の、ブルジョワ擁護の為の哲学であるかのように言われています。新しいものとはいってけるとこのような混乱を呈すのは日本の通弊かもしれません。が、どちらにも誤っている事は言うまでもありません。このような分け方が必ずしも正しいとは思いませんが、レヴィ・ストロースも言っている通り、構造主義はあくまで「上部」構造主義であり、むしろその価値は、豊富な社会人類学、文化人類学の成果の上に、独自の認識方法を示しつつある点に置かれているのです。従来から上部構造も、下部構造と同一の原理で理解しようという風潮が根強いのですが、我々が営々と積み重ねてきた文化、社会、宗教、世界観その他の上部構造は、一つ一つの方向に向けるというより、その *variation* をより広く取り、その広い中から選択してゆくという意味で下部構造とは別の視角が導入される必要があります。我々が自己の置かれた環境

に影響されるという意味では真の主体性などは形容矛盾ですが、実存哲学を引合いにだすまでもなく、人間行動の可能性と多様性を客観的に示す事は今後どうしても必要になってくるのではないのでしょうか。もっとも、そこまで気負うには、道はあまりに遠いのですが。……そこで、ここではレヴィ・ストロースの最近の英訳から、トーチミズムの分析を通して、構造主義的方法の一端を示してみたいと思います。なお、それに関しては、一九六八年一月の都立大社会人類学研究会での比嘉政夫氏の発表を手がかりとしている事を付記しておきます。

若干の解説

実例にはいる前に、レヴィ・ストロースの認識方法を多少解説しておく必要が有ります。彼の方法はソシユールが構造言語学において言語の認識に使用した方法にヒントを得ている事は周知の事実です。ソシユールによれば言語ラングとパロール、つまり意味するものと意味されるものの統一によって成立っており、例えば「花」という言葉は意味するものであり、それが示す実物が意味されるものなのです。そして「花」が何を意味するかという概念を互いに持っていて会話というのは成立するわけです。そこでこの言葉（何らかの *symbol* でも良いわけです）を *code* と言います。この *code* を構成する言語でいえば音素、*"a"* とか *"o"* とかいうものを次に考えるのですが、この *"a"* は別に *"a"* である必然性はどこにもないわけです。ただ、それが *"e"* でも *"o"* で

もなく“a”であるという弁別性が有り、一方、話者より多少の差異はあるにしても一応“a”である聞き手にわかれれば言葉としての役目は成立するので、その類似性も含めて、音素には二つの性格が必要とされるわけです。そして社会というのも言葉と同様に、いわば、父、母、オジ、オバ等の音素にわかれ、その持つ意味と相互の関係のワク組によって成立している。簡単に言えば、こんなことなのですが、この場合、言語では、“a”にも“o”にも何ら特定の価値判断は必要とされないわけです。こうした認識方法を応用して、彼は先づ類似の物を集め、その中で差異を明白にしていく事により、特定の認識に達するわけです。以下のトーテムの認識にも最近の「料理の三角形」「生のものと煮たもの」等の著作にもそうした方法が見られます。

トーテムの撰択

ピアッツィは「我々がトーテムと呼んでいる信仰と慣習は、事物における呪力 of 概念である呪術と多少人格化された霊に関する観念である宗教との境界線上にある」と述べています。特定のトーテムの採用は、従来、起源伝説との関連、或いは生産物、獵狩物におけるタブーとの関連において説明されたりしておりますが、彼は、社会をいくつかに区分する際のコードとして、区分作用のみに重点を置いて考えています（表一）。表を見れば明らかなように、人間と自然との区分は、その構成、意味（認識）、実践の三つの段階でなされ、全体的な把握がなされています。そこで人間の

表一

人間	自然	
非連続的	連続的	→構成論
文	↓	process
化	知	認識レベル
象徴作用	識	→意味論
metaphoric		→実践論
metanymic		
トーテム	守護神・先祖	
collective	individual	
Sociological	Religious	
metaphoric	metanymic	
(隠喩)	(換喩)	
例	例	
(霊—白髪)	(ビン—酒、王冠—王)	
非連続的	連続的	
structure	event	
fictive descent	descent	

象徴作用の実践的側面として、トーテムを考えるわけです。そこでトーテムと似たものとして、守護神ないし先祖を対比し、その両者の差異をもって、トーテムの全体的属性を考えるわけです。トーテムが、それ自体、ほかの何ものかを表象しているシンボルであるという考えを持った最初の人々はデュルケームであり、彼はそれらが表象したものは社会集団自体であると論じています。しか

し、社会が一つの事物ではなく諸関係のシステムであり、ある意味の概念構成である事をはっきりするにつれて、単なる現実の人間集団のみを問題にし、その社会的集合が持つ権利と義務の複雑なシステムを厳守する事が秩序づけられた社会生活の条件である、という側面との区分をあまりにしていいた事が批判されました。ラドクリフ・ブラウンは、オーストラリアに見られるように、食物となる動植物がなぜ一般的にトーテ

ムとして選ばれるのか、という問題から、その社会にとって実際のな、それゆえに、儀礼的な関心の的である為に、トーテムとして、選ばれているのだと論じていますが、北米のエスキモーや、インド洋のアンダマン島人のように、トーテムは持っていないが、なお自分達の自然環境のある重要な特徴を儀礼的に重んじている点から考えると、トーテムがシンボルだという根本的事実を見落しているという欠陥があります。レヴィ・ストロースによるトーテムの認識は、デュルケームの立場に立ちつつ、より徹底的、抽象的把握をめざしているように思えます。モデルの立て方に何か別なものをもってくる可能性は考えられるので決して完全なものとは言えませんが、彼の認識方法を知る手がかりとしては、格好のものであると考えます。よりくわしいトーテムズム研究に興味の有る方は、専門的な文献に自らあたってみて下さい。

おわりに

field work の結果を比べてみると、同じ政治、経済的段階にある社会が、ほんのわずかな離れているだけで、一方 *unilineal* であり、もう一方は *ambilineal* ないし *bilateral* な原理が根底にあり、或いは *unilineal* な社会でも *patrilineal*, *matrilineal* 等さまざまな偏差が見られるのは、アフリカ、東南アジア、南米等々、世界中いたるところにあらわれている現象です。しかもそれらは、どちらがより進んでいる。或いは優れているという判断は、つけられません。ましてその世界

観、価値観等ははなはだしい *variation* を持ち、そしてむしろその事により意味があるのではないでしようか。そうした意味でこうした研究が長期間にわたる、未開社会の現地調査に依存している部分は、はかりしれないほど多いといわねばなりません。個人の問題としてみても、なるべく異った環境に身を置いてみる事により、ズシンとくる *cultural shock* を味わってみるのは、日本という狭いワクの中での発想法が身についてしまっている我々には、何より、意味深い事だと考えるのは私ばかりではないと思います。



名 簿

— () 内は職場住所及び電話 —

福島 博 横滨市立大学文理学部生物学教室(横滨市金沢区六浦町四六四六、TEL(七八二)

一三一)、豊島区長崎町一一二七△教授V

一戸 正憲 東京都水道局、小河内貯水池管理事務所(西多摩郡奥多摩町五、TEL奥多摩四)

△昭三三年卒V

丸山 晃 东京大学応用微生物研究所一〇研、文京区(向ヶ丘一丁目、TEL(八一二)二二一

一)新宿区東大久保二一三〇三、TEL(二〇三)〇九六三、△昭和三四年卒V

花野井忠司 日本大学付属三島高校(静岡県三島市文教町)三島市幸原二四七△昭三五年卒V

大野 迪朗 白い小屋、長野県安曇郡細野村

中林 茂夫 千葉県松戸市岩瀬町△昭三五年卒V

杉山 純多 东京大学理学部植物教室、世田谷区玉川等々力町三一七七一一五△昭三七年卒V

高田 継男 四〇六医学研究所、横滨市中区小港町一の一、公団住宅六の一〇三

山田 勇 高松市多賀町三の一の一五

若林 稜子 横浜学園、横須賀市坂本町二の四四△昭三五年卒▽

蒔田徳太郎 日本曹達株式会社生物研究所（神奈川県中郡大磯町東小磯九三〇番地、TEL（〇四

六三）六一〇九二六）平塚市中里八〇の二、日曹平塚寮△昭三七年卒▽

森下 一郎 自家営業（菓子）、横浜市金沢区州崎一三八△昭三七年卒▽ *045-701-8870*

伊東 芳一 横浜市立大学医学部生化学教室（横浜市南区浦舟町、TEL（二三一）二〇八一）、

藤沢市鶴沼桜ヶ丘四の一七、TEL（〇四六六）四二一九四九六△昭三八年医卒▽

寺島 和光 横浜市立大学医学部泌尿器科（横浜市南区浦舟町、TEL（二三一）八五二一）△昭

三九年医卒▽

松橋 隆司 港区港南四の二の一六の三〇六△昭三八年生物卒、昭四二年数学卒▽

大野 正夫 高知大学宇佐臨海実験所（高知県土佐市宇佐町井の尻、TEL（〇八八八五）六一〇

二六八）、同上△昭和三八年卒▽

横山 宣雄 山形大学理学部生物教室（山形市小白川町、TEL（三）一四二一）、山形市線町二

の二の四〇、緑ヶ丘ハイツの三〇一号△昭三八年卒▽

松岡 徳治 大日本製薬（宮城県仙台市大町一の九六仙台営業所内）、東京都中央区日本橋浜町二

の五〇△昭三八年卒▽

大貫 紀男 出版社、教科書会社、世田谷区砧町三二二〇昭三十九年卒

原田 泰郎 南日本放送、鹿児島県姶良郡東野田町稲葉山崎三二〇〇昭四〇年卒

木村 努 名古屋水道局、名古屋市宇山区大字守山字北山一一の四公園守山住宅二二三号〇昭四〇年卒

四〇年卒

河合 武臣 調布市金子町一九四〇、TEL〇四二四（八二）五九八一〇昭四〇年卒

宮崎 捷二 藤岡女子高校、群馬県伊勢崎市宗高町二三〇昭四〇年卒

松沢 花子 （旧矢野）山麓園（スキー小屋）、長野県北安曇郡小谷樽池高原〇昭四〇年卒

松本 芳樹 香川相互銀行（琴平（五）三二二六）、香川県綾歌郡綾南町陶猿王〇昭四一年卒

吉野 孝子 （旧三橋）東京都下水局、世田谷区玉川等々一〇九一五〇昭四一年卒

中田洋一郎 栗田商事、横浜市旭区南希望ヶ丘六、TEL（三九一）四一四八〇昭四一年卒

奥田 耕造 報国チェン株式会社経理課、TEL（七六一）六七九一七、太田区久ヶ原一〇七〇

醍醐隆方〇昭四一年卒

森谷 常生 早稲田大学、教育学部生物学教室〇昭四一年卒

島村 健二 品川区西大崎一の六四〇昭四一年卒

矢島 孝昭 東北大学大学院（仙台市荒巻字青葉）、横浜市中区末吉町三の五四〇東北大学へ転

校

篠原 道雄 百十四銀行、香川県高松市天神前一一九一三△昭四一年卒▽

田村 瑞穂 横滨市立大学医学部△昭四一年卒▽

山口 由則 福岡県庁、福岡県直方市大字下境、県職員、鷹取寮、TEL(〇九四九二)二一二九
九五△昭四一年卒▽

菅田 弦 松江中学校(TEL(六五一)四二八五) 般橋市前原西六ノ一三五一四〇七△昭四二
年卒▽

高松 康夫 川崎市本月四一七八五山本方△昭四二年卒▽

遠藤 紘一郎 平塚市平塚一六八七、TEL(二一)三七五二△昭四三年卒▽

出羽 寛 横滨市大生物教室、金沢区六浦町三〇四二一三五△昭四四年卒▽

合田 濤 (東京都立大学人文学部社会人類学教室(大学院) (世田ヶ谷区深沢、TEL(七一

七)〇一一一) 川崎市中幸町三の二六一七三七、TEL(五一)八〇二四△昭四三年
卒▽

小林 恵二 神奈川県松田小学校教員△昭四三年卒▽

峰岸 常之 東京工業大学大学院(TEL(七二六)一一一一)、大田区東東糞谷六一九一二

△昭四三年卒▽ (七四三) 三七三五

名和 裕美 文京区小日向台町三の一の一、TEL(九四七)二八〇〇△昭和四三年卒▽

大江 達彦 大阪府南河内郡狭山町西山△昭四三年卒▽

折井 亮夫 大阪市立大学理学部生物心理学教室研究生(大阪府住吉区杉本町四五九)、大阪府住

吉区杉本町一三、岡本方△昭四三年卒▽

鈴木 光 九州大学農学部昆虫学教室、福岡県福岡市平山方△昭和四三年卒▽

鈴木 宏尚 海外技術協力事業団(新宿区市ヶ谷本村町四二、経済協力センタービル、TEL(三

五三)二二七一)、東京都板橋区向原町二二五―二穗本方△昭四三年卒▽

四〇年度入部

安藤 嵩 文理学部独文科四年、東京都杉並区下高井戸二一五五二、TEL(三二八)〇三九八

井埜 邦明 文理学部社会科学科四年、横浜市保土ヶ谷区仏向町一三二四、TEL(三三二)一四五〇

大下 好憲 商学部経営学科四年、横浜市金沢区六浦町三三五五(帰)徳島市南二軒屋町西開一三

〇七一〇、TEL(三)一七七四

小沢 幸重 東京教育大学理学部研究生△昭四四年卒▽(帰)茨城県稲敷郡阿見町大字阿見三八三

九一三

津幡 光哉 神奈川県中郡伊勢原町東大竹四五七、TEL(九五)〇三七〇

四一年度入部

新井 静男 文学部地理科四年、横浜市南区下永谷町一三五〇の二〇

大橋 正敏 商学部経済学科四年、横浜市鶴見区鶴見町六六三、TEL(五八一)七二一六

成田 佳紀 文学部生物科四年、東京都中野区鷺の宮五の七の一三、TEL(九九〇)六五三七

藤山正二郎 文学部社会科四年、横浜市金沢区六浦町三三五(婦) 佐賀県佐賀市柳町五

藤本 隆久 東京都江東区亀戸五の九

山本 皖司 東京都世田ヶ谷区代沢五の二三の八

四二年度入部

東 邦典 商学部三年、東京都世田ヶ谷区代沢二の三六の二九(婦) 広島県広島市牛田町旭区九

八四

今井 保弘 商学部三年、鎌倉市雪の下三の一の四河内方(婦) 豊橋市岩屋町岩屋下一の二

川野由美子 文学部歴史科三年、横浜市神奈川区三ツ沢南町四一、TEL(三一一)三七八〇

紙村 徹 商学部三年、横浜市金沢区六浦町四二五七桧波田方(婦) 大阪府高槻市芥川町四の一

二の一、TEL(八五)四二五五

小酒井由美 商学部三年、神奈川県藤沢市長後八三八、TEL(四四)三九五〇

富宇賀ひろ子 文学部英文科三年、横浜市金沢区富岡町一四八六沼川方TEL(七六一)八一二〇

55-711, 7219
11/23/24

(婦) 群馬県新田郡尾島町粕川五二二

長谷川 上 商学部三年、横浜市港北区篠原町二二一五

丸茂 一文 理学部生物科三年、横浜市金沢区平潟町一三三栗岡方、TEL(七八一)一八五五

(婦) 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸四一二三、TEL八七四一

水尾 寛己 文学部生物科三年、横浜市金沢区六浦町三〇四二の三五(婦) 北海道上川郡美瑛町

下字莫別

秋鹿 豊 横浜市金沢区六浦町三九三八大内方(婦) 島根県松江市朝日町四八七

加納 良幸 東京都目黒区中根二の一二の一六

中島美知代 横浜市保土ヶ谷区川島町二九の六、TEL(三八一)一六七五

山口 幸雄 (婦) 愛知県葉栗郡木曾川町黒田東針口四一、TEL(六)三二四五

宝田 俊幸 東京都中野区中野二の二四の二二六、TEL(三八一)九八二八

四三年度入部

菊地 章 商学部二年、横浜市港北区篠原町二〇四八佐藤方、TEL呼出(四〇二)五九七〇

(婦) 北海道紋別郡遠軽町西町二丁目

小森 享二 商学部二年、横浜市金沢区六浦町三九六一入川方、TEL呼出(七〇二)八一四五

(婦) 名古屋市中村区西柳町一の一

佐藤美恵子 文理学部化学科二年、鎌倉市西鎌倉二一六―三、TEL (二四) 六〇四八

高橋 省三 商学部二年、横浜市金沢区六浦町三九六七松野方(帰) 兵庫県西市上野三〇

林 令子 文理学部文科二年、神奈川県逗子市池子二一四―二七、TEL (七一) 五五八七

四四年度入部

今野 友一 東京都武蔵野市吉祥寺東町三の一の四、TEL (二二) 三三四二

杉山 英俊 神奈川県湯河原町鍛冶屋六八八、TEL (〇四六〇六) 五九八七

増谷 研二 横浜市南区永田町殿ヶ谷一二八〇鉄道弘済会横浜学生寮、TEL (七四一) 九七二三

(帰) 北海道旭川市宮下四丁目国鉄アパート一四の四〇一

三浦 茂 神奈川県三浦郡葉山町堀内三九一(帰) 愛知県豊橋市小松町字北郷三一

編集メモ

○記念号発刊の話がもちあがり二年目になる十二月、やっと原稿を印刷所へ送りこむことができた。編集委員は、現役一名、OB一名、出版関係にタッチしているもの一名ということで、安藤、大野、松橋が選ばれた。しかし、いざやってみると、皆それぞれ自分の仕事に忙がしく、なかなかこの本のほうに手がまわらず、伊東芦一、松本芳樹の両氏にも原稿の検討、清書の仕事を分担してもらった。福島博先生、丸山晃、遠藤紘一郎、井埜邦明の諸氏にも写真や地図の相談にのってもらった。この本の作製には、このほか多くの仲間から「よろしく頼む」との手紙をもらい、それがこの本ができる陰の力になっている。

○記念号の内容は、できるだけ現役時代に書いたものを再録する方針をとった。探検精神という名のもとに、熱病のごとく部活動に熱中していた頃の文章は、うまくななくても、すがすがしい魅力がある。本人からてれくさいから掲載を辞退するとの返事をもらったものもある。十年間に蓄積された資料はかなり多いが、その多くは費用の関係で、この本に入れることができなかった。はじめに集まった原稿は、二六〇頁に見積られたが、その四分の一を省略してしまった。なかには、せっかく書いてもらった原稿をボツにしたり、あるいは内容を短縮してもらったものもある。紙面を借

りておわびする次第である。

○この本で、最も悩まされたのは印刷費であった。最初の見積りで、五〇〇部で四〇万円とはじかれた。それから原稿は、東京と高知を二度ほど往復し、やむをえず、二〇万円の予算内におさまるように、すべてをやりなおした。印刷費で、内容が左右されるという奇妙な結果になってしまった。まだこの編集メモを書いている段階でも手許に一〇万円しかない。

○十周年記念の事業として企画されたこの本の題名であるが、これもなかなか決定しなかった。結局、話しあいの結果、われわれがよく使っていた言葉「エキスペディションⅠ」がえらばれた。われわれは、この十年間、「アドベンチャー」か、「エキスペディション」かと議論した思い出がある。エキスペディションの精神、パイオニアの精神は、われわれが学生時代に得た唯一のたまものではなかっただろうか。これから幾年か後に横浜市立大学から、「エキスペディションⅡ」が、出版されることを期待しつつ筆をおく。

一九六九年十二月一日



エキスペディション

昭和四十五年四月三十日

非売品

発行所

神奈川県金沢区六浦町四六四六
横浜市立大学

探査会・探検部

編集者

大野正夫
松橋隆司
安藤嵩

印刷所 高知市稲荷町四八

高知印刷株式会社